
イン・ザ・ファンタジーノベル

kurora

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イン・ザ・ファンタジーノベル

【Nコード】

N2827Q

【作者名】

kurora

【あらすじ】

ネット小説投稿サイト「小説家になろう！」その中の人気長編小説「The earth without the end（果ての無い大地）」小規模ファンのオフ会サークル「物語同好会」に入っている主人公、黒野 迅くろの じんは、毎週2日更新されるこの人気長編小説を楽しみにしていた。いつものように小説を読むためPC画面にカーソルを合わせてクリックをする。

PC画面から表示されるはず小説。だが今回は違った、展開される

ものはP C画面を飛び越え視界にあるものすべてだった。

読者だったはずの黒野は、「The earth without the end」の小説内に召喚される

さらに、そこには自分も含め、他にも小説閲覧者が多数も召喚されていた。

いきなりの超展開にも驚きながら、仲間と夢にまで見た世界を駆け巡る。

異世界召喚物のファンタジー。

序章 上（前書き）

今回あらすじに書かれている内容の「小説家になろう！」はこの小説投稿サイト「小説家になろう」をイメージして書かれたものです。「The earth without the end（果ての無い大地）」

何て小説はありませんし、その小説を書いた作家さんいません。一応こちらで確認しましたが、該当するものや、同一人物がいましたら報告ください。

存在していた場合、小説名、作家名を早急に変更いたします。

この小説は完全に独立された物語として始まります。

頑張りますので、よろしく願います。

序章 上

21世紀が始まり数年がたった6月、日差しが強くなってきた月曜日。

大学の講義が終わってレポートを提出して大学を出る。
電車に乗り揺られること30分。

俺は毎週月曜日と木曜日、駅近くのドーナツ店で待ち合わせをする。
いきなりだが、このドーナツは食べ飽きてしまっている。
そりゃ週2でここを利用してるし、それも約1年半も続いていたら
あのエンゼルフレンチでさえ飽きてしまうのは仕方ないと思う。
だからここ最近はお店ナツ店なのにコーヒーしか頼まないのだから
店の方が良いんじゃないか？と交渉してるんだけどことごとく却下
されてしまう。

「黒野^{くろの}、今日遅いわね」

と、奥の席から三つ編み丸メガネの声が聞こえる。

「ん？なんか悪意のある説明をされた気がするんだけど」

「気のせいだ、君は文学少女の鏡だよ」

「なんか釈然としないけど、良い事言ってくれるじゃない」

この今では珍しい三つ編み丸メガネこと宮本^{みやもと}あかり、俺の交渉を却下し続ける張本人だ。

この約2年間欠かさず、週2日ドーナツを3個も食べ続けてダイエットしないとやばいわ、とか馬鹿な事を言っている、同じ大学の大学3年、俺と同じ年の21歳。

「今日中にレポートを提出しときたくてね」

「え、もう提出しちゃったの、写させてくれる約束は？」

「そんな約束はしてない、それにレポート写すと俺まで評価下がるんだ、そんな自滅行為するか」

「そんなあ、私に単位を落とさせて言うの？」

「いや、自分でやればいいだけだろ」

「待ってよ、私に物語以外の文章を書けって言うの？ 鬼、悪魔」

「たかがレポート作成がどれだけ苦痛なんだよ・・・」

そんなくだらない会話を続けていると身長190cm以上もある大きい男が肉まんを何のか買って入ってくる。

「たー君は、いつ見ても大きいわね、入って来て直ぐにたー君ってわかるわ」

「そうだな、俺はいつも大きいぞ、毎日トレーニングを欠かさないからな」

「トレーニングを欠かさないとそんなに大きくなるのね」

「まて、その理論だと、大抵の体育会系の人間は2m近くになるぞ」

「それは怖えなあ、俺の大学皆2m超えるやつばかりになるな」

と軽快に笑いながら俺の隣に座るたー君こと田中 ただのり 忠則

こいつは、昔同じ高校出身で、体育学科のある大学に行った、元同級生。

柔道や剣道、ボクシングなんかを手当たり次第に手を付けては中途半端に強くなって飽きてしまう、もったいない奴。

本人曰く、どれも県大会優勝レベルまでは成長出来るが、コーチや先生に認められて期待されるとやる気をなくしてしまうらしい。

そのくせ、強くなりたいらしく今では、テコンドーと少林寺を経て空手に至っている。

俺は一度なぜそんなに強くなりたいのか聞いてみた時があったが、

「だってよ、いつ異世界に飛ばされて勇者として駆り出されるかわからんだろ」

当たり前だろ？と首をかしげながら言いやがる正真正銘の中二病の馬鹿。

だけど、こういう性格の奴が、漫画やゲームのファンタジーの主人公になるんだろなどと、思う俺もいて、まだ俺も中二病を完治していないなと苦笑いをした事を覚えている。

その後、少しの間、あかりがレポート用紙とにらめっこしていたり、忠則が早くも4つ目の肉まんに手を出した時にうるさい声が聞こえる。

「あんたが、あんなラノベを買うか買わないかであんなに悩んでるからこんなに遅くなったんでしょ」

「待つんだ、〇〇先生の作品に対して、あんなとはどういうことだ、本当は迷わず買いたいところだが、私には資金に制限があるんだ、たとえどんな名作だからと言って全て購入できるわけがない、だから悩むのは仕方ない事だろう」

「うるさいわね、あんな学園物のありきたいな萌え小説の何処が面白いんだか」

「な、咲子、何て事を言うのだ、〇〇先生の作品を侮辱するなんて、そもそも〇〇先生の作品は・・・」

「あくもう、そんな話はどうでもいいのよ、あんたのせいで遅れたんだから責任とおごってよね」

「いや、待て、私には資金が、それに最後まで店から出なかったのはあんな腐女子小説に悩んでいた咲子じゃないか」

「う・・・元はと言えばアニメイトの前で待ち合わせしようって言うあんたが悪いんでしょ」

「何という責任転換だ、それに実の兄に対してあんたは無いぞ、ツンデレキャラの妹は定番だが、お前は一向にデレ期が来ない、そろそろお兄ちゃんと呼んだらどうだ」

「キモい、もういいわよ、あんたなんかと一緒に来た私がバカだったのよ」

と、ドーナツとジュースを先に選んで兄から離れる様にこっちに向かってくる。

「今日も仲が良いね、咲子ちゃんは」

「今の会話を聞いて何処に仲が良い要素があるんですかあかり先輩」

「うーん、全部だよ、仲良しな兄妹にしか見えないわ」

「あかり先輩は、色々知っていますけどそれだけは間違っていますよ」

「そうかしら」

「そうですよ」

と、あかりがにこにことしてしていると遅れて兄がコーヒーを持って向かってくる。

「遅れてすみません、ちょっと究極の選択に悩まされていて」

「そうね、聞いていたわ、とても大変だったのね、直人君」

「はいとても苦しく辛い戦いでした」

さっきまで言い争いをしていた二人は、

佐藤 咲子さとう さきこと佐藤 直人さとう なおと

咲子は高校2年で直人は大学1年で俺らの違う学校。

ネットから知り合った、このドーナツ店で行われるサークルのメンバーで、仲の良い兄妹。

「さて今日も皆集まった事だし始めましょうか」

そして今日も始まる俺たちのサークル活動『物語同好会』

序章 下

まず俺達の『物語同好会』を語るについて話さないといけない事がある。

俺達がサークル活動を始めた理由なのでこれだけは外せないのだ。

ネット小説投稿サイ「小説家になろう！」に掲載されている、ヴェアリアス先生の小説。

「The earth without the end」（果ての無い大地）

この「The earth without the end」は約10年前から続き、そしてその10年間ランキング上位から離れた事の無い長編小説。

この小説がここまで長くそして揺ぎ無い人気が続くのは理由がある。

1つ目に完成された世界観

オンラインゲームと同等、又はそれ以上に綿密に構成された世界。

2つ目に素人とは思えない表現力

挿絵一つない文章が漫画やアニメのように脳裏に再生される世界。

3つ目に様々な主人公

たとえば長編小説だと言え、毎回約9000文字の物語を、週に2日のペースで書き続けるヴェアリアス先生は単純計算で1年94万文字、10年で940万文字になる。

20万文字を長編小説1冊と計算しても47冊。

この量だったらたとえば名作だと言われてもさすがに手は出せないだろうし内容に浮き沈みが出てきてしまう。

これを可能にしたのが1章ごとに完結される主人公達の物語。最初はだれも思わなかっただろう。

一つの作品が綺麗に完結したと思ったら、次の週に全く同じ世界で、別のキャラが主人公としてほぼ同じ時系列で別の物語が始まるのだ。どの物語から読んでも違和感もネタばれもない。

その一つ一つが優劣の出来ないような物語。

剣士、魔法使い、狩人、商人やメイドの物語でさえ、独立した完全な物語になっている。

そして物語が進むにつれて交差される主人公達や重要な人物も一つの楽しみにもなっているだろう。

「The earth without the end」はこの3つの要素が綺麗に詰まった作品なのだ。

なぜここまでこの「The earth without the end」について熱く語ると言うのと。

俺たちは簡単に言うところの小説のファンクラブみたいなものなのだ。

あかりがこの小説が好き過ぎて勝手に非公式ファンクラブHPを作成して同士の募ったのが始まり、当初は結構人気のHPとして軌道に乗っていた。

だがやはり思いつきで作った簡易HPなだけあって、訪問数は日に日に減り掲示板の書き込みも著しく低下していった。

俺とあかり、忠則はさすがに一緒に作った一人として週に2日ヴェアリアス先生が更新する日曜日と水曜日は欠かさずチェックしていたし、数少ない常連さんと意見交換を繰り返していた。

ある日、あかりがまた思いつきの提案でオフ会をやろうと言いだして、掲示板で俺たちの周辺の同士を募った。

最初は日本三大都市とはいえ東京じゃないしそんな簡単に人が集まるわけないと思っていたが簡単に裏切られてしまった、なぜかほとんどん拍子に日時が決まり、12月の寒い中俺たちの『物語同好会』が結成された。

それが俺達の『物語同好会』結成の物語。

あかりがサークル開始宣言をしたすぐ、さらにあかりが口を開く。

「ねえねえ、今回の物語は結構前作の物と比べて何か違ったよね？」
「そうだね、何かいつものように物語に引き込まれる力とか次回の期待度なんかは変わらないというより常に進化している気がするけど少し違和感があったかも」

俺たち『物語同好会』の活動は、実に簡単なものだ。

まず前日に更新された「The earth without the end」の感想、これからどうなるかについて意見交換や激論が繰り広げられる。

それが一通り落ち付いたら、自作小説の状況報告や今読んでる小説の感想や評価、感想文創作バトル何かを繰り広げたりする。

ちなみに俺とあかりと咲子ちゃんは自作小説や「The earth without the end」

の二次創作小説何かを書いていたりする。

忠則と直人は基本的に読む方専門、忠則なんかはバトル要素のあるファンタジー・SF限定で、直人は学園物や萌え系の物が多い。

「そうだったか？（小説家）だろ、俺はバトル要素があまり無くて物足りなさがあったがそんな事は無かったと思うけどな」

「さて、忠則、お前は基本的に主人公が戦士じゃないと物足りないとしか言わないじゃないか」

「やはり、小説を書くところを小説で表現するところや、全体的に舞台が自信の書齋だったのが違和感の原因ではないだろうか」

「そこは残念ながらあんたに賛成ね、いつもはどんな物語も他の国や町に行ったわ、だけど今回一回も他の国まで行っていないわ、国から出ても草原や小川までだもの」

「うーん、本当にそれだけなのかしら、何かもう一つある気がするのだけどなあ」

そう今回の議題は今週連載終了した、第13章の小説家の物語についてだ。

会話の通り今回は少しだけ良く分からない違和感があった。

それは小説家という職業のため、バトルや他国との交流の機会が最も少ない作品になっていた。

この後も色々と議論を交わしたが途中で次の作品の主人公について話が変わり結局わからずじまいで終わった。

そして、次の主人公が誰かを、次の集会でドーナツをかけて今回のサークル活動は終了した。

このときは誰も賭けが無駄になるなんて思っていなかっただろう。

序章 下（後書き）

これで序章は終了します。

説明が多くてすみません。

このから異世界召喚物語の本格スタートです。

第一章 01話

俺、黒野 迅くろのじんはとてもファンタジーが好きだ。

小学校のころから指輪物語やダレンシヤンを読んでいた。

難しかったので理解できないところを親に聞きながら読んでいたし、ハリー・ポッターは何回も読み返した、それに他にも手当たり次第にファンタジー小説を読みあさっていた。

そんな俺は中学のころインターネットでネット小説サイトを発見する。

そこには同年代の子供や大人まで色々な人達が物語を作っていた。恋愛、ファンタジー、SF、コメディ、様々な小説に俺は衝撃的だった。

結構人気に俺も好きだったのは主人公がいきなり異世界に召喚されて勇者になるような物語。

今では珍しくなんてない異世界召喚物。

そんな物語の主人公に憧れていたし、俺もそんな冒険がしたいと思った。

まあ正直こんな話はどうでもいい、俺は何が言いたいかと言うと異世界召喚物は光や闇なんかに覆われて草原とかお城とか魔法陣の上なんて所に突如現れるのが良い。

いつものように小説投稿サイトにログインして更新されたはずの「The earth without the end」を読むためにカースルを合わせてクリックと同時にウィンドウズ画面が切り換わるはずが視界に入るものが全てが変わり、座っていた椅子が無くなり尻を打って蹲るという状況。

こんな始まりは情けなさすぎる。

煮え切らない気持ちをどうにか抑えて、まあもう過ぎた事は仕方な

いと自分の尻をさすりながら立ち上がり現状把握をする。

正直、今この現状を見ても何が起きているか全然わからないし、少なからず混乱しているが、そんなことより自分の情けなさで突然の痛みで、色々どうでもよくなってしまっていた。

黒野は直ぐに気を取り直して周りを見渡した。

まず目に付いたのは俺以外にも突然召喚されたと思われる人達がいる事だ。

携帯を持っていた様な姿勢で現状を理解できず、固まってしまっている人や、目を擦って何度も見間違えていないか確認する人。

そして、俺と同じ様に椅子から落ちて涙目の人達が多数いた事に、自分だけで無かった安心感と、自分がこの中の一人と思うとなんとも言えない気持ちになっていた。

通常、このような非日常的な状況にさらされたら混乱やパニックを起こしたりするものだろう。

そして周囲にはすでに数人が動揺を隠しきれず混乱しているような症状が見られていた。

そして混乱は混乱を呼びパニックに陥る。

では何故黒野はその数人と同様に混乱せず状況把握に勤める事が出来たのだろうか？

それは意外にも単純で恥ずかしいものだった。

中学生の頃、黒野はこの様な状況に陥った時にどうすれば良いかとても真剣に考え、一人で色々な想像をし、その対策を全てノートに書き記し、イメージトレーニングを訳2年間も行っていたのだ。

・・・いわゆる中二病だった。

その為、黒野は冷静でいるわけでは無かったし、少なからず動揺もしていたが、対策は出来ていたし、過去の黒歴史が蘇り、恥ずかしくて周りの様に混乱できずにいた。

黒野は恥ずかしさや動揺を無理矢理振り払い、周りの混乱に巻き込まれてしまう前に今の状況を理解する事を最優先事項に置いた。周りのあらゆる情報を集めようと、混乱を避けるため、少し離れたところに移動し、思考する。

教会か？

いや、学校の体育館の様な広さで椅子は並べられてはいないし、正面には、十字架は無い。

だが天使の様な羽が生えた女性のガラス絵が飾っており、そこからもれてくる光は教会の様な神聖なものを感じさせている。

そして、服装が変わっていた事に今になって気づいた。

自分はジーンパンにTシャツと適当な格好だったはずが、ゆったりした短パンに布巻いたような服を着ていた。

多分この国民の服装か民族衣装なのだろう。

服装が変わったおかげでジーンパンのポケットに入っていたはずの携帯と財布が無くなった事が不安になったが、この世界ではただの金属の塊と、紙にしかないと考え、諦めた。

周囲の情報と自身の状況を整理して一つの仮定を作る。

だが、いつもの癖で眼鏡の位置を直そうとした時、眼鏡が無い事に

気づいた。

多分眼鏡は身につけていた物なので携帯や、財布のように無くなっ
てしまっていた。

・・・待て、おかしいだろ、視力が戻っている？

いや、戻っていたと言う表現は間違っているかもしれない、見え方
があり得ない。

今、俺は教会らしい場所の入り口付近に立っているのに、ここから
だいたい50m先にある向かい側のガラス絵に付いている汚れや、
傷まで見えているし。

身体能力が日本にいる時より向上しているかもしれないな。

少しの間、どれだけの能力向上が見られるか試して見ようかと考え
たが、その前に状況を理解する事を最優先にしていた事を自分に言
い聞かし、能力向上も一つの情報とした。

「やっぱり、そうだよな・・・」

答えを見つけるまでの時間はほとんどかからなかったし本当はわか
っていた。

でも、情報整理という過程を行った事で冷静になるのは正解だった。
仮定が正解だったと言う確信が得られた。

この世界は小説投稿サイト「小説家になろう」の人気小説。

「The earth without the end」の世界
だ。

第一章 01話（後書き）

誤字脱字があったらご報告お願いします。

第一章 02話（前書き）

自分の思った通りに表現が出来ない・・・。
文章力の無いのがはつきりわかりました。

それでもがんばります。

第一章 02話

異世界に来て最初にやる事は決まっている。

まず、この世界の教会からでない事には始まらない、多分ここにいてもパニックを起こした奴に巻き込まれるだけだ、まだ誰もここから出ていないみたいだがまあ教会があるってことは近くに町があるはずだ。

いきなり魔物に襲われる心配はないしどうせ出るなら早い方がいい。すでに出入り口に近い場所にいたので俺はさっさと出る事にした。

俺はドアを開けて町を見渡そうとしたらいきなりあり得ない人物がいた。

「おお一番乗りじゃないか」

「結構勇気あるじゃない、見直したわ」

「おい、なんで忠則がすでに教会の外にいる？教会以外でも召喚されているところがあるのか？」

「まあそう思うわな、まあそんなドアの前で突っ立ってたら他の奴に迷惑だ、話は歩きながら行こうぜ」

教会の階段を下りて、忠則と見慣れない女性の所まで移動する。

「そうだな、所で隣の女性は誰だ？」

「黒野君もそんな事言うの？私よ」

「いや、俺はこんな黒髪ロングの美人を忘れるなんてありえない、それとも召喚された障害で一部記憶が喪失してしまったのか？」

「だよな、俺も最初誰かと思ったぜ、ホント髪型と眼鏡が無いだけでこんなにも変わるとは思わなかったぜ」

「二人とも、恥ずかしくなるからその辺にしてよ、もう、私はあかりよ」

「髪型と眼鏡が無い・・・あかり？・・・え、あかりってあのあかりか？」

「ああそのあかりだ」

「・・・嘘だ！！」

「本当よ！！」

あかりの痛くないパンチが飛ぶ。

しかし、異世界召喚という状況より混乱してしまった。

3人で歩きながら二人から様々な事を聞いた。

2人は教会には2時間前に召喚されたらしい。

召喚された時2人は近くにいたため、混乱に巻き込まれる前に流れに乗って教会から出たのだが俺が見つからず教会の前で少しの間探していたらしく、結局周りから出遅れた形になってしまったそうだが、そのため一度ギルドやバンク、宿を探していたのだが、ギルドは先を越されて行列が出来ていても登録やクエスト受注出来る状態じゃなくなってしまったようだ。

その後バンクと宿はお金が無いため確認だけして、もしかしたら俺が教会にいるかもしれないと一度戻って見たらしい。

そしたら、誰もいなくなっただけの教会にまた同じくらいの数の日本人と思われる人たちがいたらしい。

「居たらしいって俺の事じゃないのか？」

「ううん、違うわ、黒野が来る1時間くらい前の事よ」

「って事は1時間周期で召喚されているのか」

「ついでにその数人に聞いてみたのだけど私たちの約1時間後にサイトを開いたみたいなの」

「ああそういうことか俺は8時にPCを起動したからな、ってか、

更新直後に見たのか二人とも」

「そうよ、本当は直に読んでメールで黒野に主人公は誰かネタばれしてあげようと思ったのだけどね」

「さらっと酷い事言っただけ」

「まあ結局主人公は俺らでネタばれ出来なかったただけどね」

笑いながら答える忠則

正直笑いごとではないが忠則の性格は俺とあかりの不安をかき消してくれる。

この3人で一番主人公らしいのは忠則だろう。

こいつと一緒にならこの世界でやっていきそうな気がする。

「その後は、どうしたんだ？」

「ああここにまた黒野がいるかもしれないと思って2人でさっきの場所で待っていたのよ」

「で、居なかったからまた1時間待ってこなかったら2人でどうしようかと二人で色々話していたわけよ」

「で、その1時間で何か決まったのか？」

「いや」

「いいえ」

首を振る二人

じゃあ今どこに向かっているんだよと思った俺だった。

このままただ3人で歩いていたら餓死するだけだと思った俺はまず情報を集めて出来る事からやっていこうと考え2人に提案する。

「まず、一度銀行に行ってみよう」

「でも、今俺ら金なんてないぞ」

「忠則、覚えてないのか、銀行で発行するカードは自分の証明にな

るだろ、どうせギルドは明日にでもならないと利用できないみたいだし、今のうちにカード作ってギルドで簡単に登録出来るようにしようぜ」

「あ、そういえばそうだわ、全然思いつかなかったわ」

「それと、ついでにこの町の事とか何処の国かも理解する事が必要だね、もしかしたら俺らの知っている国かもしれないし、知らなくても俺らの知っている国がどこにあるかも聞いておけば行動範囲は広がるはずだ」

「天才かお前・・・」

「良くこんな状況でそんなに頭が回るわね、私と忠則なんてこの2時間結局何もできなかったのに」

「まあすぐ2人に会えたし忠則が馬鹿だから、俺は冷静に考える事が出来たのかな」

「俺が馬鹿なのは関係あるのか？」

本当は俺の黒歴史ノートのおかげなのだがそんな事は口が裂けても言えるわけがない。

適当に忠則のせいにしておくとしよう。

数分後、銀行に着いて3人で登録とカードを発行した。

カードを発行するのに金が必要なのは、本当に便利で助かるカードを作成中様々な事を聞いた。

ここは俺達の知らない国リーディアの東都市らしい。

リーディアは東西南北の4つの都市部と中央の大都市があり、俺らの知っている国の中でも相当大きい国の一つの事が分かった。

近くの国は南にラルト国、東にデリル国その他にも中小と様々な国がある事も確認できた。

「ラルトは知らないわね、でもデリルって小説では最東端の国だったから知らないのも無理はないわ」

「そうだね、今後の目標はまずデリルに向かう必要がある」

「なんでここでは駄目なんだ？」

「デリルの情報屋の場所を知っているだろ？」

「そうよね、多分ここにも情報屋はいるでしょうけど、そう簡単に見つけられるものではないわ」

「俺達は、この世界では何より情報が必要だ、本当はまだ何も知らないに等しい、だからまず、デリルに行って様々な国の情勢を出来るだけ把握しておきたい」

「そうね、当面の目標はデリルで決定ね」

「ああそうだな、でもまず目先の問題もどうにかする必要もあるぞ」

と忠則がお腹を鳴らす。

それもそうだろう今はあれから1時間もたっているしもう9時だ。

そろそろ町は静まり返るところだろう銀行は24時間営業じゃないし出なければならぬ。

「お金が無いと何もできないわね」

「ああ俺なんか晩飯食ってないから、もう餓死できるぞ」

「晩飯食わないだけで、餓死するか馬鹿」

「お前らは大丈夫なのかよ」

「私は1日位食べなくても平気よ」

「俺はもう食った」

「畜生、俺も飯食ってから召喚されれば良かったぜ」

でも本当に困った、金が無いと宿も泊まれないだろう。

「仕方ないわ、ご飯は諦めて今日はあの教会で寝ましよう」

「いや、マズイだろ・・・」

「そうだな、俺らはまだ大丈夫だがあかりは女性だ」

「貴方達私が眼鏡と三つ編み無くなったら態度がガラッと変わるわ

ね、覚えてる？私貴方達と一緒に図書館で寝たわよ？」

「そうか・・・あかりなんだよな」

「そーいやあかりだったよ」

「納得したなら良いわ、でも何かムカつく」

あかりは俺達に痛くないパンチを食らわせて3人は教会に向かった。

第一章 03話（前書き）

まだ、このサイトの扱い方を良く分かっていない作者です。

今のところ第08話まで完成はしているのですが、様々な矛盾や誤字が無いか確認をしているため想像以上に苦勞しています。

話を書き進めていくうちに自分で矛盾を生み出してしまうため、少しずつ投稿していききたいと思います。

第一章 03話

一通り都市の重要カ所を回り10時半頃教会に到着した。
教会にはやっぱり先客がいた。

数は100人強くらいだろう、壁に寄り添っている人やすでに疲れ
て寝ている人、数人で会話している人達。

年齢はほとんど10代から20代で所々に30代以上の人たちがい
ようだ。

「早く寝ようぜ、これ以上起きていても腹が減り続けるだけだぜ」

「いや、あまり考えたくないが俺と忠則、どちらかが起きている必
要があるよ、誰かが起きていれば安全は保障される、こっちには忠
則がいるからな」

「・・・・・・・・・・」

「あ、そうだよな、俺らと同じ境遇でもこいつ等が仲間ってわけじ
ゃないからな」

「そっか・・・ごめんね、私のせいで」

「いや、どうせ俺は最初から起きているつもりでいたし、ここにい
る人達に聞きたい事が色々ある」

「なんだよ、またここでも情報収集かよ」

「ああ、この召喚されてきた関係性を調べたい、ここに召喚され
てきた人たちが全てではないからどういう条件かを知っておきたい、
他にも色々」と

「そうね、ここに全員召喚されていたら1千は簡単に超えるものね」

「そうか、毎週閲覧数が5千越えしているからな」

そう、なのにここには毎時間100人弱の人数が4時間で約400
人しか召喚されていない。

今回の「The earth without the end」

は新しい主人公が注目になっている状態だ。
たとえば1日は後2時間あるが閲覧数が10分の1に満たないのはおかしい。

「忠則とあかりは寝づらいかも知れないが、先に寝ていてくれ、俺はあまり離れない位置で聞き込みと情報交換に行ってくる」

「ああでも眠くなったら俺を起こしてくれていいから聞き込みはできないかもしれないが、2人に誰も手は出させないからな」

「そうね、忠則がいると安心だわ」

「ああ、あかりは頼んだぞ」

「おう、任せておけ」

2人は人のいない壁付近によって横になった、忠則はともかくあかりはとても疲れていたように直に寝息が聞こえた。

「じゃあ、忠則行ってくるから早く寝ろよ、修学旅行じゃないからな」

「なんだよ、ガキ扱いするなって」

「高校の修学旅行思いだせよ、お前のせいで俺の睡眠時間は滅茶苦茶だった」

「修学旅行だから仕方が無いだろ」

「忠則お前、今その修学旅行と同じ目の輝きをしているが、気づいてないのか？」

「……まあ出来るだけ早く寝るさ」

絶対寝ろよと忠則に強く言い聞かせ俺は聞き込みを開始する。

3時間たって午前1時半くらいだろうか、時計が無くて感覚でしかわからないが、午前1時は過ぎたはずなのだが、日にちが変わってから召喚されなくなってしまった。

多分この世界の法則だろう、まだわからない事ばかりだ。

だが、この3時間はとても良い情報が集まった。

ここにいる人達は俺達と同じ日本の三大都市の1つの都市の人間である事が分かった。

そのため、別の市に住んでいる佐藤兄妹は別の所に召喚されたのだろう、本当はすぐにでも探しに行きたいところだが、何処に召喚されているか全く見当がつかないので、少しの間2人で頑張ってもらうしかないだろう。

そして、この国のギルドのクエスト状況や、酒場、宿屋の金額など様々な情報は予想以上に手に入った、多分ギルドの行列で登録が出来なかったのだろう、俺に銀行でのカード発行ネタがとても有効に効いたのが良かった。

そして一番重要な情報が手に入った。

俺は召喚される人数対して村人の反応が薄いのがとても気になっていたのだ。

たとえばここは大国の都市だとしてもいきなり数百人もの身元不明者が表れてギルドや酒場、宿屋に集まったのだ、普通この状況は国が動いてもおかしくない現状はずだ。

特に都市部でこの人数になると大都市でもこの様な現象が起こらないとは限らない。

本当はこの教会で寝泊まりするのは危険なのだ。

その違和感を解消してくれたのはここ教会では珍しい40代位の柴しば田たと名乗る男だった。

柴田は、忠則とあかりと同じ時間に召喚されたらしく、まずこの世界は何処の時間軸に当てはまるのかを調べたらしい。

そのため、一番に教会を出た柴田は、ギルドや宿屋を素通りし、武器屋と防具屋、さらに酒場を中心に村人に聞き込みを始めたらしい。

「いや、ギルドなら他に行く奴が沢山いると思ってな、そんな事はあんたの様にこの教会で聞ければいいと思ったのさ」

柴田は武器屋と防具屋で戦争が終息したばかりで売れ行きが下がった事を聞いた。

そのため、戦場で亡くなった人たちが多く、住民が減少して難民や孤児がいてもおかしくないというのが剛志の予想であり納得のいくものだ。

「だが、多分それだけではないだろうな、これも憶測でしかないが、そもそもこの世界に俺達が一斉に召喚された事はこの世界には認識されていないのではないだろうか」

「認識されていないとは、そもそも私たちは異世界人でなく、この世界の住人で最初からここに存在していたという事ですか？」

「ああ、本当ならこの国に俺達はすでに捕えられてもおかしくは無いぞ」

「そうですね、この町の活気からしてもこの国が正常に機能していないとは考えられないですからね」

「そうだな、それともう一つわかった事があるのだが」

「何ですか？」

「これはただで教えるわけにはいかん、お前の事だからまあ気がつくのも時間の問題かも知れんが」

「そうですか、私は金もこれ以上の情報ありませんからね」

「うむ、まだ私も金が無いからここ付近で数日は過ごす事になろう、何かあったらここに来るといい、金かそれに見合った情報で出来る事を手伝おう」

今のところ国に拉致される心配は無くなったのが分かったので一つの不安が消えた。

柴田と別れてさらに起きている人に情報交換の会話を求めたが、こ

の時間では警戒されてしまって特に何も得られなかった。

その後、3時頃だろうか、何もしないで一人で見張りをするのは想像以上に辛い事が分かった。

限界が来てしまった俺は忠則を起こし、見張りを任せ倒れるように眠った。

第一章 03話（後書き）

この小説をお気に入り登録をしていただいております。

今のところ名前を出している人達はまた登場させるかもしれませんが、作者の筆記能力が低い事により、再登場不可になるかもしれません。

いまだに異世界らしくない展開ですが、辛抱強く見守って頂けるとありがたいです。

第一章 04話（前書き）

今回もちょっと異世界説明が多々入ります。
自分の文章力の無さにへこみそうです。

私の小説を読んでくださる読者様、本当にありがとうございます。

第一章 04話

「ほら、起きろ、黒野そろそろ行動しないと出遅れるぞ」

「そうよ、今日はギルドに行かないともう教会で泊まるのは嫌だわ」

俺は、2人に起こされて、ギルドに向かう、日の出から見てもまだ6時頃だろう、俺はまだ3時間しか寝ていない、周りの店もまだ準備中だ。

「この村にある大規模ギルドは24時間営業だろ？もう少し寝させてくれ、無理だ、何も考えられない」

「24時間営業だからこそ、出来るだけ人が少ないうちに登録とクエスト受注しようよ」

「そうだぞ、昨日は何もできなかったんだ、今日こそ冒険だ」

「冒険も何も俺らに出来る事なんてアルバイトか雑用だろ・・・」

「そうね、準備も知識もなしで森に行ったら死ぬわよ」

「そうだ、一番危ないのはそれだ、ここで死ぬと俺らの世界で死ぬかもしれない」

「ぐ・・・、なんてことだ、冒険者になるはずの俺がアルバイトなんて」

忠則が頭を押さえて絶望を表現する。

「仕方ないだろ、小説や漫画の様にそう簡単に上手くいくか、はあそれより聞いてくれ昨日手に入れた情報だ」

俺は昨日の夜手に入れた情報を眠くて上手く働かない頭を無理やり動かして説明する。

「そういや、いきなり5千人も難民が現れたらおかしいよな」

「そういう操作がされているのかしら、そうなると誰が操作したか気になるわね、世界かしら、それとも私たちをこの世界に召喚した人になるのかしら」

「ああ、それはまだ謎だな、元の世界に帰るためには必要な情報の一つだ」

「それよりも、クエスト内容だろ、今聞いた限りだと俺らの出来るものだと時給銅貨80枚くらいって完全にアルバイトじゃないか！」

ちなみにこの世界の通貨は銅貨1枚で様々なところで物価は違うが日本の10円相当。

銅100枚で銀1枚と同じ
銀100枚で金1枚と同じ

この場合、銅貨80枚なので時給800円といったところだろうか。

「仕方ないだろ、それより、戦争終結直後のおかげで人員不足で感謝するべきだ、もしかしたらそのアルバイト程度の依頼すら無くて、俺達は異世界生活3日で餓死なんて事もあり得たんだからな」

「そうね、仕事があるだけ感謝しないと、まず3人で今日中に銀30枚は必要ね」

「え、12時間以上働けって言うのか・・・」

今度は黒野が絶望を表現する。

そんなこんなでギルドに到着。

やはり終戦直後なのだろうか、昨日100人以上来たはずのギルドの依頼書数は全く減った様子は無かった。

ギルドは依頼の内容によって、ランクが振り分けられる。
初級ランクEから始まる。

依頼内容によって報酬は変わるが、E～Dランクの依頼はでも受ける事が可能だ

そして受けたランクを達成した事によって自身のランクが決まる。それ以上ランクはB↓A↓A↓Sとなる。

このギルドランクはランク上昇クエストの依頼を達成するか、一定のランクのクエストを受け続ける事によってランク上昇の権利を得る。

ランク上昇することにより依頼の危険度や報酬が上昇する。

特にSランクの人物は一桁しか存在しない。

今回の依頼書の内容はほぼ地方の村の復旧や人手の足りないところの手伝い。

俺達は出来るだけ高額で自分に見合うような依頼を探す。

「なあ、本当にアルバイトじゃねえか、それも日雇いだぜ、」

「文句言わないの、まず必要なお金はちゃんと貯めないといけないわ」

「そうだな、俺達が冒険に行くにしても、金と装備と知識の準備が無いとこの国から出ても死に行くようなものだ」

「そうだけだよ・・・」

三人は依頼の内容を見て探す。

「おお給料が高くて簡単そうなやつ見つけたぜ」

「なにになに？木材、レンガ運び・・・たー君にしか無理じゃないの、これ」

「そうか、あかりは無理でも黒野もいけるだろ？」

「無理だ、忠則お前は俺の体を見て何kgもある木材を軽々持てるとでも言うのか？」

「木材に埋もれている姿しか想像できないわね」

「それは想像出来るな」

爆笑する忠則、俺だって一応、標準以上の筋肉はあるんだ。
だが、お前がいるせいで俺は草食系男子にしか見えないだけだ。
言いたい事は色々あるがそんな事を話している場合ではないので気
持ちを抑える。

「それより、あかりは決まったのか？」

「ええ、私にも何とかなりそうなのがあったわ」

「じゃあ俺もこれでいいや」

「なんだよ、そのボロくさい、依頼書は」

「内緒だ、わざわざ見せなくても良いだろ」

受付で依頼を請け負いギルドを出る。

「じゃあ、日が沈む頃にまた此处で集合ね」

「そうだなどうせならギリギリまで働いた方が金を稼げるからな」

「おう、じゃあそれまでは各自頑張ろうな」

集合時間を決め初めての異世界アルバイトを開始する。

第一章 04話（後書き）

異世界のアルバイトが始まります。

なんか異世界らしくない・・・orz

少し無理やりですが異世界らしい展開にさせていくつもりです。

そして、次話は少し視点が変わります。

第一章 05話（前書き）

これから少しずつ皆が強くなっていきます。

そして、すでに続きが書けなくて苦悩する作者。

私の中でメンバーの能力補正はありますが、今のところ主人公達はチート能力はありません。

第一章 05話

アルバイト〜忠利side〜

納得がいかねえ、だってそうだろう？

異世界に現れた主人公は特殊能力や特技を駆使して冒険者として世界を駆け巡り魔物や盗賊を倒し、町や村、国を守り、果てには世界を守る。

そこには、愛があり涙があり、友情があるものだろう。
なのに、なのに・・・

「なぜ、異世界に来て、こんなアルバイトをしないといけないんだあ！！！！」

「うるせえ！！なに叫んでんだあ、口動かしてねえで、体動かせや馬鹿野郎！！」

「・・・すみません」

ちくしょう、ちくしょう。

今まで我慢してきたけどよう。

これじゃあ現実世界あっちでやっていた引越しのアルバイトと変わらねえじゃねえか、俺が求めたものと違う。

こんな軽い木材やレンガ運んでは積んで運んでは積んで。

どれだけ持っていけばいいんだよ。

荷台にごろごろ乗りやがって・・・

くっそ、めんどくせえ一氣に持って行ってやろうじゃねえか、これくらい。

「どおりやああああ！！！」

「おい、お前、何やってんだあ、あ、ちょっと待て、おい」

くっそ、黒野は情報が大事だとか言いやがって。
違うだろ、大事なのは勇気だろ、努力だろ、友情だろ。
異世界だぞ、夢にまで見た世界だ、それも俺の大好きな小説世界。
こんな事やってる場合じゃねえんだよおおおおお!!!

「おらあ、これでいいんだろおっさん！」

「おいおいおい、お前化けもんか、これ今日一日かけて運ぶ予定だ
つたんだぞ」

「じゃあ一日分の給料くれ」

「お、おう、まあそうだな・・・」

「よし、おっさん！他にやる事ないか？俺は金が必要なんだ、これ
からやらんといけない事があるからな」

「いや、俺だってそんなに金なんてもってねえよ、金が欲しかった
らもう一回ギルド行くしかねえな、それと給料はこれ持って行け契
約書だ、それギルドに持って行って貰いな」

「そうか、なら仕方ねえ、お金ありがとな！」

「おう、なんかしらねえが頑張れよ」

っしゃあ！

これで銀30枚なんて俺だけで稼いでやるよ。
あいつ等2人をおどろかせてやるぜ。

俺は英雄になってやるんだ！！

「ぐううう~~~~」

・・・だがその前に飯だな。

ギルドで金を手に入れ、適当に飯屋に入って一気に3人前を頼む。

「あんた、一人でそんなにも食べるんかい」

「ああ昨日の昼から何も食べてないからな」

十数分後大量の飯が運ばれてきた。

よし、やっと飯が食える、・・・あ？

なぜか向かい側で俺の飯を食おうとしているがいる。

「あんた誰だ？」

「俺か？」

「そうだよ、なんで俺の向かいに座っているんだ？それもなぜ箸も持っている」

「まあいいじゃないかそんな事、それより早く飯を食おう、飯は出来た手が一番だ」

「これは俺の飯だ」

「俺が手伝ってやるって」

「手伝いをしたいなら厨房で皿洗いでもしてこい」

俺にとって食事は聖職者の祈りに近い、それを邪魔するものは許さ
ん。

向かい側の謎の男を睨みつける

「すまない、悪かったよ、そんな怖い目で見ないでくれ、俺は喧嘩
しに来たわけじゃない、おとなしくしてるさ」

男は箸を机に置いて手を上げてもう何もしない事をアピールする。

「じゃあ、飯を食いながら聞いてくれ、俺が一人で喋るから、あん
たは喋らなくてもいい、肯定なら首を縦に、否定なら首を横に振っ
てくれ、いいかな？」

まあ飯の邪魔さえしなければ俺は全然構わないさ、俺は首を縦にふ

る。

「ありがとう、じゃあ質問に答えてくれ、少し前、大きな荷台を持ち上げて数キロ先の場所まで持っていたのは君？」

そんなに大きかったかと思いつながら、俺は首を縦にする。

「やっぱりそうか・・・じゃあ次の質問、その依頼者のおじさんに聞いたんだけど出来るだけ早急にお金が欲しいんだよね」

俺は首を縦に振りながら何を考えているかわからないこの男の事を少し考えてみたが、俺は黒野じゃないしわかるわけが無いな、そんなことより飯だ。

「それと、君は何か格闘技を習っているんじゃないか？ただ鍛えただけじゃそんな体つきにはならないはずだ」

まあ隠す事じゃない首を縦に振る。

「じゃあ、最後の質問だ、君はギルドで無くても金が手に入れば仕事を引き受けてくれるか？」

男は銀貨を数十枚机に置く。

「簡単な依頼内容は、裏道理に居る奴らの討伐。疑うならお金は前払いでいいし、今の君には受けられないギルドランクB相当の依頼だ、悪くは無いかと思うが」

「乗ったぜ」

ちようど飯を食い終わって、名前も知らない男の依頼を請け負う。

こいつが何を考えているかわからんが、内容も良いし金ももらえるならそれでいいさ。
ついに異世界らしくなってきたじゃねえかやってやるぜ!!

第一章 05話（後書き）

忠則、キャラが固定してきました。
それに書きやすい・・・。

忠則の方が主人公らしい気がしてきました。
でも黒野君も好きなので後悔はしてません、作者の為頑張ってくれ
黒野。

第一章 06話(前書き)

今回も視点が変わります。

皆が少しずつ強くなるのっていきますよ。

俺もキャラに負けないように書き続けていきます。

第一章 06話

アルバイトゝあかりsideゝ

まあなんて速さで走ってくのかしら、もう、たー君ったら。

多分、黒野の行動があまりにも慎重でずっと気持ちを抑えつけられていたのでしょうね。

黒野が来たら真っ先にギルド行って森に向かおうぜとか言っていたし、あれは冗談じゃなかったのね。

でも、たー君を抑えつけていたのは、私のせいでもあるのよね、私がいなかったら、あの二人寝ずに夜から動いていたでしょうし、私のために寝ないで守ってくれたし・・・

「はあ、このままだと私ただの足手まといじゃない・・・」

黒野も眠いとかまだ早いとか言っていた割にすぐに居なくなっちゃたし。

責任感が強くて意外と負けず嫌いだからね、彼も。

「負けてられないわ、今日この世界でお金以外の何かを手に入れないと」

私は、守られたばかりなんて、絶対嫌よ。

まずは速く目的地に着かないとね。

歩いて数十分後

「まず、目的地に到着ね、この中で医療事務のアルバイトって聞いたけど、ここが病院？」

「そうよ、貴方があかりさん？」

「ひゃあ！」

「何よ、いきなり叫んで、貴方じゃないの？あかりさんって」

「あ、はい、すみません驚いちゃって、あかりって私です」

「まあいいわ、速くして、今は一秒でも時間が惜しいの」

「は、はい！」

ここは戦場跡地だった。

私は、覚悟したつもりだった。

ここは日本じゃないし、そもそも地球ですらない。

ここでは、簡単に人が死んでしまう。

少し前まで殺し合いが長い期間にわたって行われていた。

そんな事も理解していたつもりだった。

でも、違ったそれは知識として知っているだけだった。

覚悟なんて決まっていなかったし、理解すらしていなかった。

「あかりさん！もうすっきりしたでしょ、いつまでも吐いてる場合じゃないわよ、水と布、それとこの人はもう駄目だわ、ベッドから退かして2つ隣の身元確認班の所に移動させてちょうだい」

「は、はい！すみませんでした、今から向かいます！」

そう、ここは戦場跡地。

戦場から帰って来た人達の治療室という名の遺体整理場での戦い。何十人もの怪我人が運ばれて、その場で生死の判別をしなければならない。

「あかりさん、この人はまだ大丈夫よ、治療室に運んで」

「すみません、もうベッドが足りません」

「仕方ないわ、床に布を引いて、そこに寝かせて」

「はい！」

ただ逃げ出したかった、簡単に目の前で人が死ぬの。

常に響き渡る、悲鳴や悲痛の叫び、医療班の足音。

この世界の医療は発達していない、ただ、傷を縫合して消毒し、包帯を巻くだけ。

私も、始めてみる赤と黒に染まった肌に消毒をし、包帯を巻きつける。

怪我人や瀕死者がどんどん運ばれてくる。

他の事など考える事なんて出来なかった、急速に時間が過ぎていく・

「あれは・・・」

数時間過ぎた頃、数人の白いローブを着た女性達が現れる。

「中央都市から白魔道士班やってまいりました」

白いローブの女性達の中から一人声を上げた。

「良かったわ、これで今までの倍の人数は助かるわ、こっちに来ていただけませんか」

「はい、かしこまりました、全力で取りかかります」

私の指示をしていた女性が白魔道士班を治療室につれていく。

治療室に入り数人の白魔道士が怪我人を囲むように壁近くに均等に並ぶ

「では、今から、中規模範囲魔法、フェアリーズセンチュリー精霊達の聖域を発動します」

白魔道士達の周りに魔法陣が浮かび、部屋が白い光に囲まれる。すると、ベッドになっている怪我人達の小さな傷が綺麗に塞がっていく。

衝撃的だった、絶望的だった私の世界が希望で満たされていく。

そして、白魔道士の活躍で今までの3倍の数が助かってさらに数時間があった。

「今日は終わりよ、はい、これが契約書よ、これをギルドに持って言ってお金をもらいなさい」

「すみません、明日もこの仕事をさせて頂けないでしょうか」

「あら、こんな仕事普通一日で居なくなってしまうのに、意外と根性あるのね」

「はい、それと白魔道士様に合わせて頂けないでしょうか」

「会うだけなら、私に聞かなくても良いわ、もうそろそろ治療室から出てくる頃だろうよ」

そして、治療室から今まで魔法治療を続けていた白魔道士達が出てくる。

「いきなりで、すみません、白魔道士様私にその回復魔法を教えてくださいけないでしょうか!!」

なりふりなんて構ってられない、私も強くならなきゃ。

絶対に今日の様に2人を見殺しにわさせない、絶対にそんな事はさせない。

第一章 06話（後書き）

あかりさんのキャラがいまだに固定されていない。
要望があれば今までのストーリーに障害が出ないレベルで修正します。

いまだに主要キャラの個性を生み出す事の出来ない作者ですが、これからがんばりますのでよろしくお願いします。

第一章 07話（前書き）

今回は黒野の視点です。

あ、今思ったけど、黒野視点って当たり前じゃん、主人公だし・・・。

まあたー君、あかりと続き黒野君も強くなっていくはずです。

こんなへたれ作者ですが、頑張って投稿し続けるので、読者様もが
んばって付き合っていただけると嬉しいです。

第一章 07話

アルバイトく黒野sideく

は、速え……。

やっぱり、この世界に来てある程度の肉体強化はあったみたいだな、流石に忠則だとしてもあの速さはあり得ない、100m6秒くらいだったぞ、世界新かよ。

まあ俺もちよっと走るかどれくらいの自分の能力が上がったのか気になるし。

十数分後……

「はあ、はあ、能力上昇には個人差があるのか、それとも忠則が化物なのか」

……そこまで上昇した気がしないぞ。

まあ、本当なら此処までたどり着いてなかったと思うし、上昇したんだろうな……多分。

そうだ俺は体力以外の違うものが上昇したんだな、多分そうだ、うん、そうであってくれ、マジで。

「よし、そんな訳で、目的地には着いたわけだが……」

目の前には、いかにも怪しげな雰囲気の漂う家。

やばい、ミスった、いきなりミスったしこれはマズイ。

特にこれからやりに行くのは賭けだ、アルバイトじゃない。

すでもう帰りたくなった、が、仕方ない、もうどうしようもないからな。

それに帰る家ないし……。

「お邪魔します、ギルドにある依頼を受けやって来た黒野です」

「ああん？知らんぞ、そんなもん間違えてないか？」

「いや、地図ではあっていますよ、依頼書ではここで魔法使いの実験の手伝いとの事で伺いました」

「……おまえさん、もしかして10年前の依頼書じゃねえか、それ」

「はい、その通りです」

「そりゃ、いつまでも依頼破棄しないわしも悪いが、おまえさんも頭大丈夫か？」

そりゃそうだ、誰だって10年前の依頼を受けに来ました、なんて言われたって、頭のおかしい奴か冷やかしに来た奴だろう。

けどそんな事はどうでもいい、俺がギルドで受けられるランクはE～Dの雑用と初級討伐の簡易依頼のみ、その中で一つしかなかったこの、魔法使いという単語。

俺が、これからこの世界で生きてく上で絶対に必要な戦術、今は出来るだけ早く強くならなければいけない。だからこれは賭けだった。

「すみません、本当はギルドの依頼なんて口実に過ぎないです、どうでもいいんです」

「どう言うことだ？」

「私は、どうしてもこれから、強くないといけません、ですが剣術や体術は俺は無理ですってか嫌です。」

「嫌っておい……」

「ですから、雑用でもなんでもします、俺に魔法を教えてください
！！」

「……あんたは、魔法使いになって何をするんだ？」

「俺は仲間と冒険に向かいます、その時、仲間を守るために使います、綺麗事は言いません、仲間を守るためなら、人も殺す事になっても構わないと思っています」

「ほう、殺すか・・・」

「はい、ですが、俺はまだ人も殺したことも戦場に行ったこともない、人が死ぬ恐怖、人を殺す恐怖も知らない、無知です、ですが行かなければなりません」

「なぜ、そんな事を話そうとおもったのじゃ？嘘をついたって良かったろう。」

「俺のような未熟な人間が綺麗事を並べたところで嘘なんて簡単にばれてしまう、さらに綺麗事だけでは生きていけないです、特にこの世界では」

「ふむ・・・」

正直この魔法使いと思われる老人には駆け引きなんて出来る気がしないし、最初からそんなつもりはなかった。

「・・・と言っておりますがどうしますか？お嬢様」

「・・・へ？」

「お主、ただの使用人に何を言っておるんじゃ？まあ見ていて楽しかったから良かったが」

あれ？なぜか老人の後ろの方から声が聞こえてくる

「どうします、使用人を主人と間違えるような奴ですが」

え、何これ、俺、使用人に魔法教えてくれって言っちゃったの？
・・・やばい、穴に入りたい、いや、もう元の世界に戻りたい。
何ですかこの恥ずかしさ、忠則とあかりが見ていたらもう自殺してる。

「そうじゃなあ、まあ恥ずかしい奴じゃが、さっきの会話に嘘偽りは無かったからな、合格じゃ」

そして、老人の後ろからピョコッと現れたのは魔女・・・いや、魔法少女。

「・・・えっと魔法使い様ですか？」

「お主、わらわの事をちっちゃいとか思ったのではないか？」

「いや、魔法少女？」

「魔法少女とはなんだ、私は立派な魔女じゃ」

「いやいや・・・流星にこの展開は、無いだろ・・・」

魔法使いが少女・・・「The earth without
the end」ってそんな小説だっけ？

「なんじゃ、お主、私では魔法なんて無理だとも言いたいのか？」

魔法少女は少し怒ったかをする、全く怖くない、むしろ可愛い・・・。

いや、待ってくれ、一応言っておくが俺はロリコンではない、断じてないからな。

はあ誰に言っているよ、俺・・・

「いや、こんな展開は相当な魔法使い様でしょう、もうこの巡り合わせは奇跡だ、もしかして、あの魔法使いの国ウェザンドの出身ですか？」

そう、突然現れた魔法少女が弱いわけが無い、そう逆だ、多分最強だろう。

この世界に唯一大勢の魔法使いが住む国ウエザンド。
この魔法少女さんはこの国の出身だろう。

「ほう、先日まで異世界に居たのに物知りなのじゃのう」
「はい・・・え？」

あれ？何て言ったこの人。

「何て顔をしておる、あんなに大量にこの世界に転移しよって、何をしようとしているか知らんが私の目を欺あざむけると思うなよ、そりゃあんな最上級精神操作術式は初めて見たけどのう」

・・・この賭けは大当たりだったようだ。

第一章 07話（後書き）

ちょっと黒野、キャラ崩壊してしまった気がする、が、気にしない。
少女系魔女さんは、これからどうしようか考えています。

結構複線とかフラグ構築的な事してますが、ちゃんと回収できるか
不安ですが、今の所順調に進んでいるつもりです。

第一章 08話（前書き）

今日はもう本当は投稿するつもりなかったんですけど・・・。
ちよつと良い事あったんで、載せてしまいました。

良い事とは累計PV1000ポイント／ユニーク250ポイント行
きました！！

正直これがどのくらいなのかもわかってない超初心者作者です。

もっともつと読んでもらえるように頑張りたいと思います。

第一章 08話

夕日の沈む少し前のギルド前

「おう、遅かったな、二人とも、何か顔が死んでいるが大丈夫か？」

「そうね、もう限界よ、ただ早く寝たいわ」

「ああ、その事なんだが・・・2人で宿はどうにかしてくれ、俺は住み込みでバイトに行く事になってしまった」

「あらそう、ならよかったわ、本当は私もそのつもりだったの、ちよっと私も明日も同じバイトで立て込みそうだから仕事場近くの宿屋に泊るつもりだったの」

「おいおい・・・お前ら、金はちゃんと集まるのか」

「ああそれなら何とかなりそうだ」

「そうね、でも私は後10日間は頑張らないといけないわ」

「そうか、じゃあ俺もその10日間は勝手にやらせてもらっても良いか？」

「ああ俺もなんとか10日間で終わらせてみるよ」

「「じゃあまた10日後に」」

3人は集合の日に向けて様々な思いを込めて自身の戦場に向かう

アルバイト2日目く忠則sideく

俺は今日会った名前を覚えてくれない良く分からん男に会う

「ああ、来てくれたんだ、正直昨日で居なくなってしまうかと思ったよ」

「本当はそのつもりだったさ、だが、事情が変わった、後10日俺に仕事をくれないか」

「ああ、まだ、この村の治安は良くなって無いからね」

「じゃあよろしく頼む」

名前の知らない男と握手をして非公式の契約を交わす。

この仕事は俺の力を測る事が出来る、そしてさらに強くなれる。

10日後にはこの世界で異世界最強になってやる。

2人とも待ってろよ、俺は・・・。

アルバイト2日目 黒野side

「さて、今日も始めるかの、私はやると言ったからには手加減はしないぞ」

「すみません師匠、日にちの話ですが後10日間大丈夫でしょうか」

「私は何日だって構わんど、お主の話は私を満足させてくれたから
のう」

「お金の事も修行の事も全て私の為に、ありがとうございます」

「では、これから始めるぞ、魔力の扱い方と魔法術式の組み方から
じゃ」

「はい！」

忠則なら直に強くなるだろう、このままだと俺はただ守られる立場
になってしまう。

俺の夢だったこの世界、冒険者としてこの世界を廻るんだ、俺だっ
て主人公だ。

この10日間で俺は・・・。

アルバイト2日目ゝあかりsideゝ

白魔道士の一人はあかりの前で告げる。

「では、私は5日間の間に私が出来る事を教えてあげましょう」

「ありがとうございます」

「ですが5日間だけです、後は5日間ここで実践をし続ける事になります、貴方の力があればここに運ばれてくる様々な人達が助かるでしょう」

「はい」

「ですが、逆もあり得るのです、貴方に力が無ければ、それだけ人を殺すことになります、目の前で人が死に続ける、耐えられますか？」

「耐えられないかもしれませんが、それでも私はやり遂げなければいけないのです」

「いいでしょう、私も死者が減るのは喜ばしい事です、私について来てください」

「はい！ありがとうございます」

そう、私はどんなに辛くても目を背けたくてもやり遂げないといけない。

ここで逃げ出したら私は、2人を見殺しにする事になる。
それだけは絶対にしていけない、ここで私は・・・。

「「絶対に強くなる！！！」」

3人が壮絶なアルバイトを開始して7日目。
この国最大のギルドに新しい依頼が届く。

最新依頼

【兵士募集】

- ・ 依頼内容

我が国リーディアは様々な戦争に勝利を収めた。

そしてまたこれからも勝利を収め続けなければならない。

世界を我が国によって統一するため、さらなる戦果をあげよう。

さあ立ち上がれ国民達、我が国のために戦え。

依頼者 国王レオン・リーディア・リファレイン

- ギルドランク

指定なし

●
報
酬
銀

50枚
「戦果により報酬上昇あり」

- 依賴人數制限

無し

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

それはたった一通の依頼書

だがその依頼書は異世界人にとって初めての戦争の始まりを告げた。

第一章 08話（後書き）

今回、当初ただのアルバイトだった3人が一気に強くなる形になり、作者自身も困惑しております。

次回から少しずつ物語は進展して行きます。

第一章 09話

「戦争が始まるか・・・」

集合場所のギルド前でつぶやいた。

今日は集合日の10日目、黒野はこれからについて様々な事を考えながらギルドに着くと一枚の依頼書に目を奪われた。

「柴田が言った意味がやっとわかったよ、多分この事だったんだな」

そう、今から11日前の夜、柴田と名乗る男と情報交換をしていた時に一つ俺には教えられない何かを知っていた。

「この国はもう駄目だな」

「The earth without the end」の最初物語。

主人公は戦争が頻繁に繰り返される国の貴族だった。

その主人公は治安が悪化しているのも関わらず、私利私欲のために戦争を繰り返す国王が嫌いだった。

そのため主人公は、治安維持のため、ギルド近くで様々な非公式依頼を旅人や冒険者に持ちかけ、村の復興を手助けしていた。

そして幾つかの戦争が終結し、一時の休息があった。

だが戦争は終わらなかった、まだ復興の兆しの無いこの国は自らの手で滅ぼそうとしたのだ。

主人公は政治や経済、外交様々な知識を持っていた。

だからこの国がもう終わりを告げたのもわかってしまった。

主人公はその国を見捨て、貴族の名を捨て一人の剣士ライオルと名乗り旅に出る。

そう、この国は主人公ライオルの故郷の国リーディア
そしてこの国はライオルが旅に出た後、1年足らずで滅亡する。

「あまりこの国ではゆっくり出来ないか」

「見つけたと思ったら、また何か考えてるのか、独り言なんて言っ
て」

俺がこの国について考えていると声が聞こえた。

「なんか、また大きくなって無いか忠則」

「成長期だからな」

「忠則・・・お前はいつまで成長する気だ」

忠則は俺のツツコミたいして変わらないなと笑う。

「黒野こそ服がボロボロじゃないか何があったんだ？」

「まあちよつとな、後でその話も含めてあかりが来たら話すよ」

「あらそう、じゃあ今から教えてくれない？」

後ろから10日ぶりに聞く女性の声が聞こえる。

「久しぶりだな、あかり」

「そうね、久しぶり、2人とも」

3人がそろい黒野が口を開く

「まあ、ここで話すのは色々とまずいから、まず適当な宿を探そう」

「黒野の言うとおりでな、もう日が沈むし昨日あたりからまた治安
が悪くなった気がするし、あまり夜に外にいないほうが良い」

忠則が少し警戒する。

「そうね、まず宿を探しましょう、私、早く体を洗いたいので、ここ数日働きっぱなしで何もできなかったから」

「なら良い宿を知っているよ、この国では珍しく温泉のある宿があるんだ、少し値は張るけどね」

そう言って黒野は歩きだす。

宿は少し遠いため黒野は口を開き、ギルド前で考えていた戦争の話が始める。

「そう、また戦争が始まるのね、また死人が出るわね・・・」

「それに、これはまだ、確証は無いがこの国は後1年程度で滅びるよ」

「おう、それ俺の依頼主も、言っていたぜ、もうこの国はお終いだってな」

へえ、今の時期にもうそこまで核心の持てる奴がいるのかと関心をした黒野だが、何かが引っ掛かった。

「なあ忠則、お前その依頼主の名前は何て言うんだ？」

「いや、この10日間、そいつの依頼で動いていたんだがよ、名前を聞いても教えてくれなかったんだよ」

「教えてくれないって、たー君依頼書には名前が書いてあるはずでしょ？」

あかりが疑問をぶつける。

そう、依頼書には、依頼主の名前が書いてあるはずだ。

「いやあ、あれだ、非公式の依頼って奴だ、まあこの村の悪い奴ら

退治する仕事をね」

「た、忠則・・・、お前、気付かなかったのか？」

「何が？」

「それ多分、剣士ライオルだ」

「「え?!」」

黒野はギルドで考えていた剣士ライオルの話とこの国の名前の話を
する。

「マジかよ、なんてことだ、俺はずっとライオルと一緒にいたのか・
・・」

「たー君、英雄と一緒に仕事をしていたのね」

今まで気がつかなかったショックの忠則と、それを見て笑っている
あかり、いつもと変わらない光景を見て黒野は安心するが、気を引
き締めこれからの事を話す。

忠則とあかりが黒野を見つめる。

俺達は世界に流されてはいけない。

これは俺達の物語なのだから、そう決心して黒野は告げる。

「世界は動き出した、まだ俺達には戦争を止められる力はない、俺
達には力が必要だ、まず直人と咲子と合流し、別の国でギルドラン
クAAを目指す、俺達ならやれるはずだ」

第一章 10話（前書き）

この小説をお気に入り登録してくださった読者様ありがとうございます。

皆様のおかげで諦めずに投稿し続ける事が出来ています。

今、自分の文章作成能力の低さに悶絶しながら少しずつ書き貯めを作っています。

そしてあまり確認しないで投稿しているので誤字があるかもしれませんが。

第一章 10話

宿に到着して2つ部屋を取り、各々寝る準備をする。

風呂に入ったり、飯を食ったり、体を休め、一つの部屋に3人が集まる。

「まず聞いて欲しい事が幾つかある」

黒野が口を開く、そして、10日間のアルバイトで起きた事を少しずつ話し始めた。

「この異世界召喚と大量召喚の混乱を抑える精神魔法か、相当な魔法使いの仕業なのね」

「まだ確定は出来ないが、俺の師匠はその可能性が高いと言っていたよ」

「俺らの異変が分かったって事からしても相当な魔法使いってことだよな」

「ああ色々な意味ですごい師匠だよ」

特に外見とキャラがとは言えなかった。

そこであかりが疑問をぶつける。

「でも、私達の事って話してよかったのかしら？」

「本当は黙っているつもりだったさ、でも見破られてたんだ、それに話さないと魔法を教えないって言われたからどうしようもなかったのさ」

「黒野は初代主人公の剣士より2代魔法使いの方が好きだったよな」

「じゃあ黒野はもう魔法を使えるの？」

「ああまだ基礎しかわからないけどね」

すると黒野は、目を瞑り頭の中で炎をイメージする。
まだ魔法を習って数日の黒野は体内の魔力を放出する機能が発達していない。

そのため、1つの魔法を唱えるため数十秒のはっきりとしたイメージと頭の中で魔法陣を描かなければならない。

頭の中でイメージを完成させ、魔法陣を一定の法則に沿って描く。
この世界の魔法には詠唱はいらない、魔力とイメージ、それにあった正確な魔法陣で構成される。

黒野が集中して1分経過した時、黒野の掌に自身の握りこぶし程度の炎が発せられた。

「すごい、本当に使えるのね」

「魔法こそファンタジーの定番だしな、さらに異世界に來た事を実感させられたぜ」

「でも、まだ魔法発動にこれだけの時間が掛かるんだ、実践には使えそうにない」

「まだこの世界に來て1カ月もたってないんだから、当たり前じゃない、逆にこの期間で炎や雷バンバン発動出来たらチートそのものじゃない」

「あかりの言うとおりだな、俺らにはまだ時間がある、明日俺らが魔王と戦う訳じゃないさ、無理をして倒れるなよ」

俺を心配する2人、多分相当辛そうな顔をしているのだろう。

この世界が小説の時から魔法はそう簡単に出来るものではなかったのだ。

2代の主人公の魔法使いだって、魔法習得に1週間かけて基本属性魔法を習得した。

俺は魔力の開放の仕方に戸惑って一昨日の8日目まで何もできなかった。

更に常にイメージし続ける、集中力と魔法陣の構成の演算力。

初めて小さな火種が出来た時、意識が飛びそのままぶっ倒れてしまったのを覚えている。

だがこの世界は魔法陣の基礎構成と応用の仕方さえわかれば後は魔力の開放の仕方とイメージで様々な自作魔法が可能なのだ。

「これから、毎日練習が必要だ、このくらいの魔法はタイムラグ無しで発動できないと」

「そうね、私も黒野に負けられないわね」

「なんだ？あかりも魔法を覚えたのか？」

忠則が疑問を問いかける。

「いいえ、私は魔法と少し違うわね」

そう言ってあかりも10日間の出来事を掻い摘んで話す。

戦争後の病院の悲惨さとそこで出会った白魔道士の人たち。

白魔道士の使う白魔術は魔法とは異なる所がある。

一番の違いは、魔力の使い方だ

魔法発動は自身の魔力を使うが、白魔術は自分の周りの魔力を使用する。

そのため、魔力不足や魔力の枯渇による死を気にすることなく持続的に発動する事が可能である。

だが、魔術は世界と術式を固定し、自分と世界を繋げて魔力を術式に供給し続けなければならないためその場から離れる事が出来ない。

「だから、回復は出来るけど2人には守ってもらわないといけなくなるの」

「それなら任せておけ、俺はこの10日間ただひたすら戦い続けていたからな」

「皆、アルバイトじゃないな」

3人は笑いながら確信する。

これで、冒険の準備は整ったと。

「次の問題は佐藤兄弟ね、あの2人なら大丈夫だと思うけど」

「黒野の師匠が言うには魔法範囲からいってこの国のどこかで召喚されたんだろ？」

「ああ師匠は外に出ていなければこの国の何処かにいると言っていたよ」

黒野は師匠の言葉を思い出して答える。

「じゃあ一度、また黒野の師匠に聞いてみない？」

「え？」

「おう、良いなあそれ、まだ俺も本当の魔法使いを見てないし、相当な力の持ち主なんだろ？」

あの師匠はマズイ、特に外見が、そしてその後想像される2人の俺への視線が。

何としても2人を止めないと・・・

「いや、その、なんだ？まあ良いじゃないか、これからは3人で頑張ろうじゃないか！」

「黒野、何かを隠してる」

「う・・・いやそんな事あるわけないだろ、俺達の仲じゃないか」

「黒野って初めてあった時から嘘は苦手ね」

「・・・・・・・・」

終わった、この後想像される2人の視線が俺を殺す。

絶望的な気持ちで宿のベッドで眠る黒野だった。

第一章 10話（後書き）

黒野のキャラが決まって来た・・・。
あまり嬉しくない方向になってしまったけど。

頑張れ黒野。

第一章 11話（前書き）

今、少し、スランプ中です。

まだ書き貯めはあるのですが、PC前に座ってキーボードのボタンを押せない自分が辛いです・・・。

第一章 11話

黒野の予想は大きく外れた。

「か、可愛すぎるわ・・・」

「なんだよ、あれか？これって違う小説だったのか？なんと言うカリリカル的な」

忠則まで衝撃を受けている、ってかお前それ知ってるのかよ・・・
・・・俺も知ってるけど。

「やめるんじゃ、抱きつくな、私は人形はで無いぞ」

「ヤバイよお、この子一緒に連れていきましよう」

「何を言っておるのじゃ、黒野、早くこいつをどうにかするのじゃ」

師匠があかりの腕の中で暴れている

「あかり、そろそろ離れろ、師匠が嫌がってるぞ、それに怒ると怖いからな」

「ああこのキャラは最強だろ、勝てる気がしねえ」

「あうう、持って帰りたい・・・」

あかりは諦めて師匠の手を話す。

まだあかりは抱きつき足りないのか、じろじろと師匠を見つめる。それに気づいた師匠は俺の後ろに回って服にしがみついた。

くそう、反則だろこれ、マジ師匠可愛い・・・。

俺はあかりをなだめながら話を始める。

「師匠、もう大丈夫ですよ、今日は聞きたい事があって来ました」

「そ、そうか、まあ良いじゃろう・・・」

師匠はあかりを警戒しながらピョコピョコと俺達を見渡せる離れた椅子に座る。

「で、昨日の今日で何の話なのじゃ？」

「はい、今日は、俺達の仲間を探すために、協力を貰えないかと思いまして伺いました」

忠則とあかりは俺の空気を読み取ると、姿勢を正して、俺の隣に並ぶ。

師匠は俺を見渡して、うなづく。

「良いだろう、じゃが、それに見合っただけの物は持ってきたのう？」

「はい、今回は、この国の未来についてです、それと俺達の知っている物語通りになればですが・・・」

「よかろう、話してみよ」

俺は、ライオルの話と共にこの国の終わりまでを説明する。

「そうか、また戦争か・・・」

「はい、師匠もこの戦争が本格化する前にこの国を出た方がいいでしょう」

「ああ、そのつもりじゃ、私も忙しいのじゃ、少しやらねばならない事があってのう」

そう言って師匠は椅子から降りて杖を取り、空中に魔法陣を書き始める。

「では、確かに報酬は受け取った、お主達の探している2人の名前と特徴を言うのじゃ」

「はい」

俺は佐藤兄弟の名前と、特徴を告げる。

「ふむ、わかった、では探索を開始しろ、少し待っておれ」

師匠は魔法陣を書き終わりその魔法陣を一気に拡大する、その魔法陣はすぐに家から飛び出した、魔力放出量から計算してもこの国を簡単に覆える範囲だろう、あの小さな体にどれだけの魔力があるのだろう。

「すごいわ・・・」

「何が起こっているんだ？」

あかりも魔力を感じ取れるのだろう、圧倒的な魔力放出に驚いている。

忠則は、魔力に関する知識、能力が無いため何が起こっているかわからないようだ、忠則も魔力に対して抵抗力があった方が良さだろう、黒野がそう思っていると。

「ふむ、この国の付近にはいない様じゃ・・・」

師匠が検索を終えて結果を告げる。

「そうですか・・・」

俺は佐藤兄弟がこの国にいたと考えていたので落胆する。

「だが、ここ最近までこの国にいたようじゃ、この国の北部都市に最近までいた形跡がある」

「そんなこともわかるのですか？」

あかりが驚いて質問する。

「わしにかかればな、大量の魔力と、この国の細部まで行き渡った集中力、魔法陣の構築技術が必要じゃ」

「スゴすぎです・・・」

俺とあかりには、最初の魔力放出から不可能だった、たとえば俺達にそれほどの魔力があってもこのレベルの魔力を放出し続けて制御しきるなど不可能だ。

そして一番、難しいのは集中力。

このレベルの魔法は魔力を国中に置かれている針の穴に糸を通らせ続ける様なものなのだ。

「さて、お主達もあまりゆっくりしておる場合ではないだろう？」

「そうですね、まず俺達は北部都市に向かおうと思います」

ありがとうございます、と初めてあった時と全く変わった態度の忠則とあかり、師匠の能力に圧倒されたのだろう。

「あ、忘れておった、黒野がこの10日間全く教えてくれなかった言葉があったのじゃが」

・・・へ？

「ろりこん、とはなんじゃ？」

2人の視線が俺を突き刺す。

最後の最後でやってくれましたね、師匠・・・

2人は知らなくていいですよと師匠に言って俺から距離をとる。

納得いかないのか、師匠は不満をぶつけながら3人を見送る。

俺達は北部に向かって歩き出すが、その間忠則とあかりの犯罪者を見る様な眼が死ぬほどつらかったのは言うまでもない。

第一章 11話（後書き）

一応言っておきます、黒野が主人公です。

多分、これからちゃんと強くなります、主人公らしくなるはずです。

師匠こと魔法少女系魔女さんは最強でした。

名前とか色々な事は後々、違う所で登場したとき明かされるはずですよ。

第一章 12話（前書き）

お気に入り件数11人、PV2500アクセス、ユニーク500人達
成しました。

読者の皆さま本当にありがとうございます。

今日はもう1話投稿させていただきます。

これから飽きずに読んでやってください。

第一章 12話

「やゝつと北部に到着ね、この国って本当に広いのね」

「そうだな、早く馬に乗れるようにならないと他の国に行けないな」

あかりが背伸びをしながら声を出す。

それもそうだ、俺達は歩きながらだが東部都市から北部都市まで、3日間もかかったのだ。

俺達は東部のギルドで受けた配達依頼を北部ギルドに完了報告をする。

「まずは、何処に行ってみる？」

「そうだな、まず教会か酒場だな、もしかしたら2人を知っている人がいるかもしれない」

俺達はギルドで酒場と教会の場所を聞いてギルドから近い酒場を目指す。

移動中、何回か不審な動きを見せる人間が俺達を見ている。

「この都市は治安が悪いな・・・」

「そうね、多分私達の荷物も狙ってるわ、気御つけた方が良いわね」

「そうね、剣士ライオルがどれだけ都市に貢献していたのか見てわかるぜ」

忠則が言うとおりだ、東部都市に居た時より数倍、不審な人間や、ガラの悪い奴が多い。

更に盗賊らしい集団も見つけた。

「これじゃあ、2人ともこの国から居なくなるのも無理は無いわ・・・」

・」

「でも、おかしくないか？」

「ん？なんでだ？」

「いや、治安が悪いからこの都市から出るのはわかるが、ここ数日間だけでこの国から出るのはおかしい」

そうだ、都市から出るのなら納得だが、わざわざこの国からでなくとも、比較的治安の良い東部都市に移ればいいのだ。

あの二人ならそれ位の情報と、行動に出るはずだ。

「そうね、10日も満たない日にちで国を出る準備はできないわ」
「ああ、そういうことか、じゃあ早く探さないとまずいんじゃないか？」

「まずは酒場で俺達と同じ召喚された人間がいるかもしれない、2人を探すのはそれからだ」

3人で酒場に到着する。

「うう、酒臭いわ、気持ち悪い・・・」

「初めて酒場に入ったな、ちよつとこれはキツイね」

俺とあかりは酒の匂いと雰囲気にのまれてしまった。

酒は嫌いじゃないが、この雰囲気はちよつと息苦しいな・・・。

「じゃあ2人とも外で待っていてくれ、俺はもう東部での喧嘩仲裁でこの手の店はなれているからな」

「すまないな、ちよつと頼む」

「お願いね、私もこれは長く居たくないわ」

聞き込みは忠則に任せ俺とあかりは酒場を出る。

俺も酒は嫌いじゃないが、店全体に充満した酒の匂いと、酒場の雰囲気にはすぐに酔ってしまいそうだった。

「忠則がいて助かったよ」

「そうね、私と黒野は酒場より図書館の方がいいわね」

あかりは酒場から出て深呼吸をする。

この世界の空気がこんなにも美味しく綺麗だったのかとこの時になって初めて気づく。

「はあ、それにしても心配だわ」

「そうだね、この国から他の国までは歩いて行ける距離じゃないからね」

この国から他の国まで、馬を使っても最短で10日以上掛かる。

その距離を徒歩で準備もなく到着出来るはずが無い。

正直、この都市の治安から言って悪い想像しか出来ない。

数分後、忠則が一人の男性を連れて酒場から出てくる。

「すまん、遅れた、結構いたんだが、怖がられてついて来てくれなかったんだ」

「まあ俺もいきなり知らない2m近い男と一緒に来てくれなんて言うてきたら、絶対についていけないからな」

「そうね、でも良く来てくれたわね、ありがとう」

あかりは忠則の連れてきた男性にお礼を言う。

男はあかりの笑顔に酒に酔った顔を更に赤くする。

正直、この世界のあかりは美人の部類に入るから無理は無いだろう。

「それで、いきなりだけど聞きたい事があるの」

あかりは、俺と忠則の二人より自分が聞いた方がいいと思ったのだろう。

酒場から連れてきた男に質問をする。

「ああ何でも聞いてくれ、同じ日本人だ、助け合おうじゃないか」
「ありがとう、同じ日本人として嬉しく思うわ」

美人な女性に褒められてとても嬉しそうだ、男性は酒の勢いもあって、元気に胸を張る。

「私、今探している人がいるの、兄妹なんだけどね、大学生の男性と高校生の女の子なんだけど」

「いやあ、俺は見えてないなあ、この都市は結構な人数が召喚されたからな」

「え？どれくらいの人数が召喚されたの？」

「ああここでは2000人近く召喚されたらしいぜ、教会が3つもあるからな、1つの教会に3日かけて600人以上召喚されたよ、俺もその中の1人だから間違っちゃいないと思うが」

約2000人か、数からするとやはりこの国で全て召喚されたのだろう。

だが、今問題なのはそれじゃない、2000人も召喚されたらたとえば精神操作魔法を使っても問題が起らないはずが無い。

俺の考えを察したのかあかりはまた口を開く。

「でも2000人ってたとえこの都市でもいきなり抱えきれないんじゃないの？」

「ああそうさ、この都市は大手のギルドが2つあったが、一つのギルドに1000人も抱え込めるはずがねえ、だから、半数位が、他

の都市か、教会で寝泊まりをしていたぜ」

「国の外を出る人はいなかったの？」

「俺の知る限りじゃ居ないな、流石に準備なしに森や草原に出る馬鹿はいないだろ、この世界には魔物が沢山いるからな、誰だって死にたくは無いさ」

誰かにそそのかされた事もないらしい、だがじゃあなぜ2人は国の外に出たのだ？

考えたくは無い1つの悪い予感が頭をよぎる。

「じゃあ、半数の教会に寝泊まりしていた人達はまだ、教会に居るの？」

「いや、それがここ最近一気に減ったらしいんだ、まだ数人は宿に泊まる為の金を使いたくないって利用している奴がいるらしいんだが、それでも2桁もないはずだ」

「減ったって・・・、何処に行ったかわかる？」

「いや、詳しくはわからないが良い噂は聞かないな、中央都市の騎士につかまって無理やり兵士にされて戦争に駆り出されるとか、奴隷商人に捕まって他の国に売りに出されるとかだな」

「そんな・・・」

あかりが男性の話を聞いて項垂れる、あかりも想像していたのだろうショックを隠せなかった。

悪い予感が当たってしまったみたいだ、今はまだ予想だが佐藤兄弟は、ここに召喚されて、ギルドで仕事依頼を受けられず、教会で過ごしていた所を奴隷商人グループに捕まってしまったのだろう。

あかりは無理やり笑顔を作って男性にお礼を言う。

見ていて辛かったが、この場はどうしようもない、俺と忠則も辛い内容だった。

男は、また聞きたい事があれば此処に来てくれ、と言って酒場に戻る。

俺達はこの後も酒場で、他に2人探して聞いてみたが答えは同じような内容だった。

俺達3人は暗い気持ちで宿屋に泊る。

その後、各自明日の準備をして3人で1つの部屋に集まり作戦会議をする。

「マズイ事になったよ・・・」

「ああ、よりによって奴隷商人か、異世界に来ていきなり奴隷問題に手を出すことになるわね」

「そうね、これは難易度の高い冒険になるわね」

俺達は諦めていなかった。

既に冒険の準備を始めている俺達は、不安こそあるものの、覚悟を決めていた。

黒野は忠則とあかりの2人に口を開く

「まず、ここ最近奴隷商人が何処に向かったのか聞き込みを開始し、確認でき次第、出来るだけの装備とその他の準備をしよう」

黒野は、一度息を吸い直し、更に告げる

「さあ、俺達の仲間を救いに行こう」

第一章 12話（後書き）

今回は少し長めでした。

そして、ちゃんと確認してません・・・。

後で矛盾が出てきそうで少し怖いです。

矛盾や、変な所、誤字などありましたら、報告お願いします。

そして、暇でしたら、感想も書いていってけると嬉しいです。

第一章 13話（前書き）

今、悩んでいます。

小説って、ちゃんと細部まで設定していた方が良いでしょうね。

勢いで投稿した面があるため、その弊害が結構来ています。何とか修正を加えてまず、第一章を目指したいと思っています。

第一章 13話

俺達の聞き込みは想像以上に早く終わった、この世界には俺達の知らない奴隷育成が行われる国があったらしい、この小説の主人公は奴隷だった事は無いので、この国は掲載されなかったのだろう。

奴隷育成の国、レイドのスレイブタウン。

その名の通り、奴隷の町だ。

大抵の奴隷商人は一度スレイブタウンに捕まえた奴隷を持っていき、集団で奴隷として調教させ、また他の国に売りさばく。

この世界は奴隷制度があるため、誰も批判や、不満を口にはしない。異世界では良くある制度だが、俺達3人はこれを受け入れる事は出来ない。

「スレイブタウンね・・・」

「胸糞悪い町だな」

「ああこの世界の闇の部分だな」

作戦を発表した次の日、聞き込みを開始した、1時間後すぐに集まって話をする。

正直あまり嬉しくない内容だが、目的地が一か所なのが分かり、1つ問題が解決する。

「だが、問題はまだ沢山ある、相手は奴隷商人だ、移動中警戒は緩めないだろう、数百人の奴隷を抱えているのだ、相当固い守りだろう」

「そうね、私達3人じゃ返り討ちにあうのが目に見えているわね・・・」

「そうだな、俺一人じゃ数十人も相手出来ないからな」

回復担当のあかりとまだ戦力にならない俺は、戦闘は忠則一人に任せるしかない。

それだと、たとえ東部都市のガラの悪い奴や、盗賊まがいの奴らを退治した忠則でも、奴隷商人相手では、太刀打ち出来ないだろう、俺は、自分の無能さが悔しくてたまらない。

「誰かの協力が必要になるかもしれないな」

俺は、自分の無能さに嘆いている場合じゃないと自身に言い聞かせ、頭を働かせる。

今、俺が出来る事をやらなければならない、ただそれだけだ。

「ギルドに依頼するのはどうだ？」

「いや、ギルドでは集まらないだろう、それに奴隷商人からの奴隷救出何て依頼は難易度が高くて俺らじゃ報酬が払えない」

「そうね、その依頼ならランクA位が妥当よね」

ランクAの依頼なら、最低でも一人金3枚程度必要になるだろう。少なく見積もっても4人は必要になる、金12枚は俺らには払う事は出来ないだろう。

そこで俺は思い出す。

「そういえば、忠則とあかりって、どれくらいの金額を持っているんだ」

「あ、忘れていたのね、てっきり自分で稼いだお金は自分で使っているのかとっていたわ」

「ああそれ自体は構わないが、今俺等がどれだけの資金を持っているか気になってね」

そう言って俺達は宿でお金を公開し合う。

「俺は金1枚と銀12枚、それと銅が数枚だよ」

「私は、銀103枚ね、銅は無いわ」

俺とあかりは金を机に置いて3人に見せる。

それを見て忠則はニヤニヤと笑っている。

「なに気持ち悪い顔してるんだ、早く見せろよ、忠則」

「見て驚くなよ、俺は2人と違ってずっとしっかり働いていたからな」

「な、私だってずっと働いていたわよ、働いてないのは黒野だけよ」
「それじゃ俺はニートみたいに聞こえるじゃないか・・・」

まあそんな事はどうでもいいと忠則が俺の話を無視する。

どうしてもよくないと反論しようとした時、忠則の持っていた金額に驚いた。

「金23枚に銀185枚・・・」

「貴族ってどれだけ金持ちなんだよ・・・」

10日で245万って、たとえ非公式でもこの金額は破格だろう。

「まあ最後の金10枚は、途中の戦争宣告で、もうこれから仕事の必要はなくなったと言っ、て、お礼にくれたんだが」

「いやそれでも、金13枚って日給10万以上じゃないか」

「ああ5人分の働きをしてくれるって言って相当貰ったぜ」

流石、初代主人公剣士ライオルだなと思った黒野とあかりは輝かし

い金貨と銀貨の数を見て手を上げて降参を表現する。

「どうだ、すげえだろ？ どうする、これだけあれば、ギルドで人を雇えるぜ」

そこで俺は考える。

予想以上の金がある事によって選択肢が増えた。

「いや、これなら、ギルドに頼む必要はない、少し、賭けの要素はあるがこれなら全員を助けられる」

「全員って、どうするのよ、黒野？」

「今だから出来る作戦だ、まず資金を底上げする、スレイブタウンの途中にある俺達の知っているデリルに向かい、大会に出場する」

「ああそういや、ライオルもその大会で優勝して一気に名を上げたからな」

「そこで、行われる公式賭博に、忠則を指名し、賭けられるだけ金額を掛ける」

「え、それって・・・」

あかりが困惑する、その通りだ、俺達はこれから起こる歴史を変えるのだ。

「そうだ、剣士ライオルを倒してもらう、出来るよな、忠則」

「・・・本当か？」

「ああ、俺は勝てると信じてる」

俺は、忠則の問いに真剣に答える。

「・・・そうか、ライオルを」

「そうね、私たちは、剣士ライオル以上に強くないといけないわ」

「ああ、俺達は今まで以上の物語を作っていくんだ」

忠則が、身震いをし、決意を固める。

「ああやってやろうじゃないか、倒してやるよ、ライオルを、絶対に勝ってやる」

忠則の言葉と共に俺等は大会に向けて準備を始める。

第一章 13話（後書き）

大会が始まります。

そして、名前の出てきたライオルとの戦いです。

完全に忠則のターンですが、メインの主人公は黒野です。
本当です・・・頑張れ黒野。

第一章 14話（前書き）

今さらですけど、小説を書くのって難しいですね。
作家側に立って本当に実感しました。

いま、超スランプ中です。

まだ、書き貯めありますけど1週間持たないです・・・
最低でも第一章は毎日更新していきたいのですが。
なんとかこの危機を打破したいと思います。

第一章 14話

俺達はデリルに向かう宣言をしてリーディアを旅立ち14日目の夜。俺達三人は、リーディアで忠則の武器と防具を出来るだけ金を惜しみなく使って揃えていた。

「忠則、もうすぐデリルに到着予定だがそんなデカイ大剣扱えるのか？」

「ああ本当はこれよりも一回り大きいのが良かったんだが」

忠則は1mはある剣を振りながら答える。

忠則が剣を振るたびに俺とあかりに心地よい風が当たる。

「もうそろそろ、他の剣と同じように振り回せるようになって来たな」

「たー君って本当に規格外だわ・・・」

あかりが、忠則の馬鹿力に呆れながら答える。

当初、馬にうまく乗る事が出来なくて2日間位は徒歩と変わらない距離しか進めなかった俺達は、この14日間で馬を乗りこなす事が出来るようになった。

さらに旅の途中、低級魔物のウルフ達に遭遇したが、忠則の大剣一振りで一掃するという何とも初めての冒険とは言えない乗り越え方をした。

そして3人は問題なくこの日まで旅を終える事が出来た。

そのため俺とあかりは動きやすい適度な装備と安物の小さな杖を装備しているが全く使う機会が無く、安心と物足りなさで妙な気持ちだった。

「まあこの世界は危険な森や砂漠はある程度分かっているし、そんな場所は、馬すら近寄らないからな」

「そうね、小説内でも国と国の間の草原や大地は比較的に低級魔族しかない事が多かったわ」

俺達は、小説内の地図や、危険区域はある程度頭に入っているため、いきなりドラゴンやデーモン等の上級魔族に遭遇する危険性は低い。

「さあそろそろ、食料も尽きてきたし、予定では明日には到着する予定だよ」

「じゃあ、そろそろ寝ましょう、日本では夜型なのにこの世界に来てから規則正しい生活になったわ」

「そうだね、じゃあそろそろ2人ともテントに戻って、火を消すよ」

そう言って俺は2人がテントに戻ったのを確認してテントを囲むように地面に描いた魔法陣の炎を最小化し、自分のテントに戻る前に日課になった特訓を始める。

俺はこの14日間で魔法の制御は向上した。

簡易魔法陣構築も杖を数回振るだけで外部に描く事が出来るようになったし、魔力放出もスムーズに行えるようになり、身体に魔力があるという認識が常に出来る様になった。

そして一番の成功はイメージする力だ、イメージとは想像力とそれを信じる力だ。

俺はこの世界の魔法の練習で、この問題がとても苦しかった、イメージしているつもりが、魔力を注いでも脳内部や外部に描かれた魔法陣は全く反応を見せない。

それは、この旅を始めた当初も何度も起こった障害だった。

イメージは常に出来ていた、だがそれを信じきれていなかったのだ、これをクリアするには、地球という魔法の無い世界では、魔法を信じると言うのは、小学生の低学年までだ。

その固定概念を打ち砕くのはとても難しかった。

馬に乗っている間、常に火、水、風の基本魔法をイメージし続けていた。

寝る前は外に出て世界と繋がっているという、事を実際に身体と脳に実感させた。

夜の特訓は効果があった。

身体の魔力が、世界が放つ魔力と繋がっていたのだ。

この時、魔力がどのように世界に影響を及ぼしているのか理論は証明できなくても、身体が理解したのだ。

それからは、魔力の量と魔法陣とイメージが完全に一致した。

まだ、魔力放出量と魔法陣の構築技術や応用術の面において改善するべき点と問題点は様々あるが、これは俺にとって最大の一步だった。

「これならいける・・・」

核心はあった、いまだに、基本魔法の火、水、風の三種しか使用できないが、後1ヶ月程度あれば、土、雷の中級魔法は扱えるだろう。そしていつものように夜の特訓を終えてテントに戻り眠りについた。

朝起きて、3人は馬に乗り昼ごろに目的地デリルに到着する。

「やっと着いたな、早く美味しい飯を食いたい、流石に森の果物と

干し肉には飽きたぜ」

「そうね、私も早く身体を洗いたいわ」

「じゃあまず、宿を探して解散しよう、俺は少しやっておきたい事があるから」

そう言っただけは適当な宿を探し、荷物を置いて解散する。

俺は、まず奴隷商人の行方を探った。

忠則には酒場で聞いておいてくれと頼んだので、俺はこの国の大手ギルドから聞き込みを開始した。

俺の予想は的中していた。

奴隷商人は一昨日に、リーディアでこの国の大会目的の連中を安値で大勢引き連れてこの国にやって来ていた。

だがそれらしい集団が見えない、多分、奴隷商人をこの国の協力者が匿っているのだろう。

俺の予想が正しければ奴隷商人は、大会までこの国に滞在しているだろう。

この国の大会は知名度が高い、ランクAまでの上限があるもののこの大会で毎年大物の新人が大量に排出される。

そのため、大会が終わるまで、ギルドのメンバーや旅人、冒険者はこの国を出る事は無い。

「一応、いつこの国を発つかかわかるように手を打っておく必要があるな」

俺はギルドに奴隷商人らしき集団がいたら報告するようという簡易依頼を申し込む。

流石に、500人近い集団を隠れて引き連れるのは不可能だ。

「よし、これで大会に打ち込めるな、これからは忠則には頑張ってもらわないといけない」

正直、自分がその舞台に立てたらどれだけ嬉しいだろうか考えたが、これは俺の役目ではないと切り替える。

俺は俺の物語を最高の形で描いていけばいいのだ。

「よし、俺も早く宿に戻って特訓しないといけない」

自分の可能性を信じて黒野は宿に戻る。

第一章 14話（後書き）

黒野君に成長の兆しです。

そして忠則君が規格外の強さを発揮しています。

主人公じゃない忠則君チートっぽくなってしまいました。

それでもめげない黒野君を応援してやってください。

第一章 15話（前書き）

今日は遅くなってしまいました。

毎日更新は大変ですね。

だけど頑張ります。

第一章 15話

大会の開始は俺達がデリルに着いてから3日後だった。

結構ギリギリだったなと思いつながら大会に向けて準備をする。

準備と言ったところで、今回出場するのは、忠則だけなのだが、これから出場する有力候補は調べてないといけない。

まず問題はライオル。

今の所、俺は実際に見た事が無いから外見自体はわかっていない。

だが、その能力や強さだけははっきりと理解している。

だがこれは実際に見た事ある忠則の方が理解しているだろう、これは俺が介入する所ではないだろう。

「実際、わからないのは俺等と同じ召喚された人達だな」

そうなのだ、俺がこのデリルに来て2日目なのだが、確実に日本人と思われる人間が数人確認できた。

俺等と同じ、大会を目的としているのは明らかだった。

本当の問題はこっちだ、忠則の能力向上を見る限り、他の日本人も何かに対して能力向上されている可能性がある。

そして、この国に訪れている日本人は、まだ召喚されて1ヶ月も経過していないのにこの世界に溶け込み、様々な装備を手に入れている。

正直驚きだった、見る限り、この国も一人で来ていて、この世界の時系列と現状を把握しているようだった。

「まあ明日は予選だけだからな、明日までに出来るだけ手を打っておいた方がいいか・・・」

俺は、この国に来た日本人を見つけては、武器の特徴装備の有無を1人ずつメモしていった。

「まあ忠則の事だ、こんなことしなくてもやってくれるかもしれないな」

俺は適当に情報収集をやめて宿に帰っていった。

この世界の忠則は最強だ。

大会予選〜忠則 side〜

大会前日は、ただひたすら飯を食って、ひたすら剣を振って、ひたすら寝た。

これは俺の日本での生活に似ているな。

俺は毎日を精一杯生きていた。

そりゃ、勇者が世界を旅する物語にはどんなものでも憧れをもっていたさ。

漫画や、ゲーム、小説、アニメ。

全てをエンディングまで到達したわけじゃねえ。

いや、ほとんど最後までやった事が無いんだ、それは、最後が嫌いな訳じゃねえ。

ただ、途中で気づいてしまった、これは俺の物語じゃねえって。だから、俺は毎日全力で生きていた、勉強はあまり得意ではなかったが、落ちこぼれはカッコよくないとの理由で受験も頑張ったぜ。他にも部活や、習い事に打ち込んだ、子供の頃から強くなりたかった願望のおかげで柔道や、剣道、様々な格闘技に足を出していた。

だが、どれも俺の求めていた物語じゃなかった。

親から、後輩から、先生から、師匠から、コーチから、様々の期待

が俺に疑問を生じさせたんだ。

<俺は誰かが作った物語なんじゃないか？>

毎回そんな言葉が生まれる。

そんな事はないだろうさ、頭ではわかっているんだ、だが様々な大会が近付くにつれその気持ちが高くなる、この大会は、俺達が大会と言うステージで役者として出場しているんじゃないか、ってな。その後はもう駄目だ、観客が俺を応援するのが苦痛になってくる。大会を終えると完全にやる気を無くなってしまう。

だから俺は、様々なものに縛られている自分が苦痛で仕方なかった。

その苦痛を忘れられたのは黒野が誘ってくれた、毎週2日行われる『物語同好会』だった。

「The earth without the end」と言う小説は高校生の頃、黒野が教えてくれていたし、俺の好きな冒険物語だった。

この集まりは、皆の意思で集まっていたし、それには強制力など無かった。

ただその小説が好きと言うだけの集まり、仲間だった。

仲間が此処に集まりたい理由、意思で集まっていた、それが俺を苦痛から解放した。

そしてこの世界だ、俺は日本でのあらゆる生活から解放された。

それも今は全員ではないが仲間も一緒なんだぜ、俺は最強だ。

自分の意思で仲間と、世界を駆け巡るんだ。

仲間が俺は勝てると信じてくれている。

俺は俺の意思で仲間の信頼を答えたいんだ。

それがたとえ、この世界で未来に英雄と呼ばれる人間だとしてもな。

「今年も始まりましたデリル国最大の大会、デリル武術競技大会の開催です！！」

何処からか司会の声が聞こえる、周りはとても騒がしかった。

だが、忠則は周りに対して何の反応も示さなかった。

緊張で怖気ついているわけではなかった。

集中をしていたのだ、周りの喧騒を完全に遮断していた。

忠則は大会の経験は、この世界と元の世界の人達より数倍の経験があった。

そのため、このような試合開始直前の準備は完璧だった。

周りの雰囲気にもまれてはいけない、緊張してはいけない、冷静でいなければいけない。

予選のルールは単純なものだった。

8グループに分かれてグループの中で最後の一人になるまで負けなければ良い。

場外、戦闘不能、降参、相手を殺した場合、負け、ただそれだけのシンプルなルール。

今回の大会は、忠則達と同じように日本から来た人達が加わり、小説の規模より1.5倍くらいの人数になっていた。

忠則はスタッフの言うとおりに会場に入った。

会場の喧騒はピークに達していた。

忠則は周りを見渡していた、人数は50人程度。

そして身長が高く1m以上もある大剣を持っている忠則は警戒されていた。

だが忠則は特に気にしてはいなかった、身長的事で注目されるのは

慣れていたのだ。

忠則はただ、イメージをしていた。

身体が出来る動作、その速さ、その動きによる隙の防ぎ方。

様々な想定を生み出しては攻略していった。

そして司会が開始を告げる。

「始め！！」

それは一瞬だった。

開始と同時に忠則をしとめようと数人が忠則を囲むように10人が攻撃を開始したのだ。

だが、攻撃は届く事は無かった。

居るはずの場所にその人物はいなかったのだ。

忠則は剣を握らず、目の前にいた一人が攻撃の構えを開始する瞬間に跳んだのだ。

周囲の人間は忠則の剣を警戒していた為、大剣を背負ったままの忠則を構える前に仕留めようとしていた人間は跳んだ忠則を目で追いきる事は出来なかった。

跳んだ忠則は目の前の敵めがけて拳を放った。

目の前にいる忠則に対応しきれない敵はそのままカウンターを食らって10メートル先の場外まで跳んでいく。

囲んでいたはずの一人が消えていたのに気付いた時には忠則は次の行動に移っていた。

相手に攻撃の隙を与えないように数人の前に剣を握る動作と一緒に走り出した。

3歩で敵の目の前に着いた忠則は鞘を収めたままの大剣を片手で右から左へと振る。

その動作は流れる様に全てが完成された動きだった。

現状を把握しきれないまま大剣に巻き込まれて4人が同じ方向に消えていった。

残った5人が大剣を振りきった隙を突くように攻撃をする。

忠則はそれを避けるようにテンポ良く一步後ろに下がって片足を頭上まで上げる。

剣を振りきってしまった目の前の剣士にそのまま足を振り落とす。そのまま頭から地面にたたき落とされた剣士は気絶する。

さらに、気絶した剣士を見て動揺した残りの4人を見て忠則は振り切った腕を今度は逆に振る。

先ほどとは逆の方向に4人は消えていった。

それは開始約15秒の出来事だった。

それを見ていた数人は武器を捨て降参をアピールした。

残った戦士たちは全員忠則を狙った。

忠則は、剣を振り、技を掛け、投げ飛ばし、数々の戦士を薙ぎ払った。

その光景は5分間続いた。

山積みにされた戦士の上に立った忠則は最後の一人を叩き落とし大剣を天に上げた。

そして巻き上がる観客の歓声の中、忠則の予選は終了した。

第一章 15話（後書き）

大会が始まりました。

今回は完全に忠則のターンです。
次回も忠則のターンです。

だけど、黒野君が主人公です。
本当です。絶対です。

第一章 16話（前書き）

昨日は、リアルでの問題で遅くなってしまったため早く投稿します。
そして何とかスランプを打破しました。

ただどあんまり出来は良くないかもしれないです・・・

でも第二章までの道のりは決まりましたので、何とか毎日更新を続けたいと思います。

更に、お気に入り小説に登録してくださった読者様、本当にありがとうございます。
とございます、これを糧に更新を頑張っていきたいと思っています。

第一章 16話

黒野は昔、忠則がボクシングの高校大会を見に行った時があった。その時の忠則は別人だった、俺の前で見せる表情とはまるで逆だった。

相手のグローブが忠則に届く前からその表情は辛そうだった、何かに抗っているような、縛られているような辛そうな顔はその大会の間続いた。

その大会の成績はとても良いものだったが、忠則の表情は変わらなかった。

その事を聞いただと、忠則は笑いながらこう答えていた。

「俺は作られた世界の主人公じゃないって思っちゃったんだよ」

その時の忠則は、いつもの中二病混じりの冗談とは違った。

心の悲鳴や苦痛を隠すような悲しい苦笑이었다。

俺はこの大会が始まる前にその場面を思い出した、それが唯一の不安だった。

だが、その不安は一瞬にして消えた。

忠則が舞台に立った時の表情は高校の時のあの暗い顔を打ち消した。

その表情は俺を震え上がらせた、いつもと違う表情の忠則、だが、

その表情はあの時の苦しさとは違った。

その目は研ぎ澄まされていた、身体から放たれた闘士は俺の知っている忠則とは別人だった。

そして、確信した、忠則は自分の舞台の上に立つ世界に出会ったのだと。

その舞台の主人公は今までの努力や感情を全て表現していたように

見えた。

見ていた観客を圧倒させた試合は既に芸術だった。

俺達は忠則を迎えに行った、忠則は子供のように自慢げに笑っていた。

忠則は何回か攻撃を受けて切り傷が多数あったがあかりの簡易回復魔術のリペアで全て治った。

「それにしてもたー君はどれだけ強いよ・・・」

「俺は最強だぜ、それより、俺は一番最初の試合だったんだ、他の奴らも見えてみようぜ」

忠則は、既に他の試合を気にしていた。

俺達は忠則と一緒に観戦席へと向かった。

他の試合は、1つを除いて全て似たような試合だった。

剣術や武術の入り混じる様々な戦いだったが、忠則の試合を見た後だと、レベルが一段下がったようだった。

だが、その試合は違った、それはやはりライオルと名乗る剣士だった。

ライオルの攻撃は早さだった。

小説の通り、皆が剣を振り上げていた時には数回切り付けていた。

それは電光石火という言葉が当てはまった。

全ての身体の動きに無駄が無かった、足を前に出す動作、剣を突き出す動作、身体を伸ばす動作、全てが洗練されていた。

そう、既にライオルの剣術は天才の領域に達していた。

だがなぜ、成人も迎えていないライオルがそこまでの剣術を身に着けていたのか？

それは自身の嫌いな国の戦争だった、貴族は戦争に対して騎士として戦場に出て指揮をとらなければならない。

だがライオルは指揮をとらなかった、親の反対を押し切り自身が出陣する戦争で常に前線で戦い続けていたのだ。

だから、このような大会は常に死線を切り抜けてきたライオルには遊びでしかなかった。

自分以外の全ての攻撃が隙を作るだけの動作にしか見えていなかったのだ。

ただその隙を突けば良いだけのライオルは次々に敵を切り倒していった。

それは、見るものを圧倒した、ただ一人だけ時間の経過速度が違うようだった。

敵は剣を振りおろしきる前に切り崩されてしまう。

数の多さは何の利点にすらなかった、攻撃後に無駄な動きがなかったのだ、川の流れの如く敵を崩しながら動き続ける、次第に周りはライオルの攻撃から逃げる様に距離をとった。

だがそれもこの戦いを放棄しているだけだった。

既に30人程度戦闘不能にしたライオルは、逃げる敵は追わなかった。

既に勝敗は決していたからだ。

ついに38人目を切り崩したライオルは逃げている相手に告げる。

「さあ武器を捨てろ、お前らは此处で倒れている奴らより弱いうえに腰ぬけだ、さあ負けを認めろ」

ライオルは冷たく言い放った、それは最終宣告だった、その目は戦争を思い出しているのだろうか、冷酷なまでのその視線は、相手を震え上がらせ武器を握る力さえ奪った。

その一瞬あたりは静まり返った、ライオル以外の人間が同時に武

器を落としたのだ。

そしてその光景に気がついた司会が勝者を告げると同時に爆発的な歓声が会場を覆った。

「小説と実際の映像じゃやっぱり迫力が違うわね・・・」

「やはり、剣士ライオルだね、この時点で此処まで強いなんてね」

「いや、これくらい強くないと後の英雄にはならないだろうぜ」

忠則はライオルの試合を見て臆することなく逆に戦う時を待ち望んでいるような表情さえ見えた。

黒野はライオルの能力に驚きはしていたが、不安は無かった、それは戦術や、得手不得手の問題ではなかった、ただ仲間を信じていた。忠則は俺達に約束を破った事は無かった、冗談や嘘はついてしたが、約束はどんな事も守った。

そう、忠則は約束をしたのだ、黒野とあかりに勝つと宣言した。だから俺はたとえ相手が忠則よりどれだけ強くとも勝てると信じた。

「まあ明日は決勝前の準備運動だ、退屈かもしれんな」

忠則は笑っている、俺もあかりもつられて笑っていた。

この時、物語の主人公は忠則だった。

第一章 16話（後書き）

小説内の主人公、ライオルの内容を入れました。
そのため、次回にトーナメントは持ち越しです。

まだまだ続きますので、飽きずに作者に付き合ってやってください。
よろしく願います。

第一章 17話（前書き）

書き貯めがちよつと少なくなってきました。
早く書かないと追いついてしまいます・・・。

何とか一章の区切りは見えましたので、早く二章の構想を完成させないといけません。

第一章 17話

次の日、予想の通り、忠則とライオルが圧倒的強さだった。2人は準決勝まで無傷で勝ち上がった。

予定していた時間より2時間近くも早く終わってしまったトーナメント式の大会は。

観客の声を聞いて急遽、そのまま決勝戦が行われることになった。

それは俺にとってとても都合のいい形だった。

出来るだけ大会は早く終わって欲しかったのだ、俺達の一番の目的は大会で優勝する事ではない。

大会の賞金50金と賭け金で巻き上げられるはずの20金を手に入れた奴隷商人と交渉する事だった。

奴隷商人の行動がいまだにはっきりと確認できない今では出来るだけ早く大会を終えて、奴隷商人とのコンタクトを取るのが今回の勝負なのだ。

準決勝が終わって25分後、決勝開始5分前の忠則と会話を交わす。

「準備運動は出来たかな？ たー君」

「ああ今、俺のコンディションはオールマックスだぜ」

「頭の方はあまり良くないみたいだな」

三人で笑い合う。

俺とあかりはもう勝敗に着いてや応援の言葉は言わなかった。ただ、忠則を見つめた。

「じゃあ行ってくるぜ」

忠則は大剣を背負って決勝の舞台に乗り込む。

（ライオル side）

当初は驚いた、デリルに着くと見覚えのある男が仲間を連れて話していた。

その時、この大会は一筋縄ではいかなないと直感した。

そして勘は的中した、予選では圧倒的な存在感を放ち、全ての対戦相手をねじ伏せた。

男は、私が依頼を求めた時の雰囲気とはまるで違った。

その姿はまるでを自分の意思を手に入れた狂戦士バーサーカーだった。

私はその時全身が震えた、この男と戦える歓喜と恐怖。

その混ざり合った感情は押さえきれぬ事が出来ず予選では身体が勝手に動き注目を浴びてしまった。

いまだ私は未熟だな、と思いながらも心の高ぶりは落ち着きを取り戻す事が出来なかった。

そして急遽早まった決勝戦。

私は、あの男と奇妙な運命を感じながら、今出せる全ての力を出そうと心に決め決勝の舞台に向かった。

大会の雰囲気はこれ以上ないと思われるほど高潮していた。

決勝進出者の2人が舞台の上に上がる。

2人は周りの喧騒とは別の世界に居る様だった。

2人はお互いに礼をし合う。

それはとても神秘的なものに見えた。

これから行われる戦いに全力を出せると言うお互いの感謝だった。そしてお互いに攻撃の構えを始め、司会の開始の声が響き渡る。

「初め!!」

動いたのは同時だった、だが、やはりライオルの速さは忠則を凌駕した。

だが、忠則もそれはわかっていた、ライオルとの距離を秒速単位で感覚を図る。

まだ数メートルある距離で忠則は大剣の鞘を全力でライオルめがけて投げたのだ。

ライオルは目の前に飛んできた鞘に動揺したが直に起動修正して間一髪でよける。

だがそれは忠則の作戦だった、鞘を避けたライオルに一気に飛び、近づいた。

一瞬のすきを突かれたライオルは直ちに攻撃を防ごうとするが向かってきたのが剣ではなく拳だった、剣の刃を向けていなかったライオルは持っていた剣と一緒に数メートル吹き飛んだ。

ライオルは空中で冷静さと体制を整える。

今、完全に忠則の雰囲気には吞まれていると感じたライオルは自分のダメージを確認しながら相手の攻撃に備える。

忠則は、ライオルが直に冷静さを取り戻したことに對し、相手の強さを更に実感すると同時に笑みがこぼれる。

身体が勝手に動いていた、全身が早く戦いたいと叫んでいた。これからの作戦はもうなかった、本当は先制攻撃からの連続コンボを繰り出すつもりが、既に回避されてしまったからだ。

そう、後はどちらかが倒れるまでの力比べ、ライオルに向かい全力で剣を振る。

忠則の大剣を避けてライオルが隙を見つけ切りつけるそれを守らず拳や足をライオル目がけて叩きつける。

その戦闘は10分以上続いた。

忠則は全身に血流の絶えない切り傷。

ライオルは足や腹部の骨が砕けていた。

どちらも立っているのが不思議だった、だが、2人に苦痛の表情は無く笑っていた。

忠則は、英雄と戦える喜びを、ライオルは全力で攻撃を受けとめる相手に喜びを。

そして、その時は来た。

ライオルは、折れた脚を引きずりながら速度の変わらない剣を振る。忠則は既に大剣を捨てて、血が噴き出す事など目もくれず拳に力を込めて全力で殴る。

ライオルの剣は忠則の腕をそれて肩に剣が突き刺さる。

だが、もう痛みは既に限界を超えていた忠則はその剣が突き刺さった腕をライオルの顎めがけて拳を当てた。

ライオルの剣が忠則の肩から抜け血が噴き出した。

だが、忠則は倒れなかった、大きな足を震わせながら全力で身体を支え切っていた。

そして忠則に剣を刺したまま手を離し、ライオルは軽快に笑いなが

ら気絶した。

歓声の鳴り止まない中、大会が終了した。

第一章 17話（後書き）

これで忠則ターンは終了です。

これから少しずつ本当の主人公君が頑張ってくれると思います。

それと、何とか恋愛要素入れたいと思っている作者です。

あかりさんと少女系魔女さんはでは無理なので、途中で現れる新たな重要キャラをヒロインに仕立て上げたいと思います。

第一章 18話（前書き）

少しずつ執筆スピードが遅くなってきている気がします。
大学も休みだし大丈夫ですが。

思うどおりに文章が成り立たないと辛いですね。
ですが何とか頑張っていきます。

第一章 18話

忠則の勝利が確定した瞬間、あかりが走り出した。黒野はあかりを追って、大会の治療室に向かう。

そこには、気絶したライオルと血だらけの忠則が居た。

大会の医療班は、簡易白魔術を発動しながら、傷口を少しずつ塞ぐ。

「どいてください！私がこの二人の治療を担当します」

あかりは声を張り上げて治療班を部屋の外に追いやる。その声と表情は鬼気迫るものがあつた。

「中級指定回復術式、一精霊達の息吹（ブレス オブ スピリッツ）発動します」

その時、この空間の魔力の密度が急速に上がった。

魔力があかりの周りを取り囲み描かれた魔法陣が白く光る。

空間全てが明るく照らされるその光は、忠則とライオルに静かに振りかかる。

その幻想的な風景は5分くらい経過しただろうか。

光が全ての怪我を覆って完治した。

気絶中のライオルの隣の忠則がベッドから起き上がる。

その時起き上がったと同時にカウンターパンチをあかりが食らわした。

「もう二度とあんな怪我しないでよ、心配したんだから」

あかりは重症だった忠則を本当に心配していた。

起き上がることの出来なかった忠則は、心配掛けて悪かったと寝ながらあかりに謝る。

あかりは忠則の謝罪にうなずき、怪我は治ったが、血は足りない筈だからと言って、食べ物を買に行った。

「どうだ、これで俺が英雄だぜ」

「何を言ってる、まだ一步目だ、それだけで満足していたら、一瞬で隣の奴に持ってかれるぞ」

俺と忠則は2人で笑った。

「やったぜ、黒野」

「ああ流石だ、忠則」

俺と忠則は腕を組み勝利を喜びあった。

次の日、大量の飯を食って、宿で爆睡をした忠則は、大会前以上に元気になっていた。

人間離れした忠則を見て俺とあかりはため息をついて次の行動の話をする。

「奴隷商人から人質を全て解放させる」

「まあこれだけあれば、確実に出来るわね」

あかりは目の前に集まった金93枚を見て答える。

「いや、使うのは金3枚だけだ。」

「え?」

「おいおい、それはいくらなんでも難しくないか？」

忠則は俺の言葉に驚いて答える。

「まあ交渉は俺に任せてくれ、何とかなるはずだ」

「なんとかって、本当に大丈夫なの？」

あかりは不安を隠さず、答える。

「まあこれは最小限の金額だからね、でも絶対金10枚までには抑えるさ」

「なんでそんなに抑える必要があるんだ？金はあるんだぜ、出来るだけ安全策をとった方が良いだろ」

忠則が疑問を問いかける。

俺は簡潔に問いに答えた。

「金は、今一番必要なものさ、これを使って俺達はスレイブタウンを手に入れる」

そして、俺は2人にこの計画の内容を説明した。

この世界の歴史を更に塗り変える計画を。

そして、3日後、ついに奴隷商人が動き出した。

奴隷商人は、大きな貨物馬車を十台連立させて動かしていた。

1つの馬車に10人程度のっていた。

それを何回かに分けて拉致した日本人をスレイブタウンに送っていく寸法だ。

奴隸商人は、大会後決勝戦に出場した2人を雇うつもりだったが、2人とも行方が分からず、交渉すら出来なかった。

そのため、数人の大会出場者を引き連れてデリルを出発する事になった。

不満が、残るが、何故かAランク以上の人間を雇える人がいなかった。

だが、ランクAAは、依頼料が高額なため、直に諦めた。

ランクAとAAの違いは相当なものだ、AAランクの人間を1人でAランク10人分の金額を有するからだ。

そして奴隸商人は、急いでいた、荷物が人間だからだ。

それも400人ともなると食料にかかる金が多いため、出来るだけ迅速に事を進めないといけない、それに捕まえた数人が食料の不足で死にかけていた。

デリルからスレイブタウンまで馬車では5日もかかるが食料は3日分しか用意していなかったのだ。

だが、商人は捕まえた人間の死には興味が無かった、別に死んでも良いのだ。

数日飯を食わないだけで餓死するような奴は奴隸として生きていけず、調教過程でしんでしまうのだ。

だから、商人は、出来るだけ金を使わないように素早く事を収めるために必死だった。

・・・目の前にその男が現れるまでは。

第一章 18話（後書き）

大会後の内容はちょっと物足りないかもしれませんが、
ここら辺ちょうどスランプ気味だったんです。

・・・言い訳です、すみません。

ちゃんと書き続けるんで見続けてやってください。
感想評価お待ちしております。

第一章 19話（前書き）

納得のいく出来ではなかったですが投稿させていただきます。
誤字があるかもしれません・・・
見つけましたら報告ください。

もうそろそろ第一章が終わると思います。

第一章 19話

デリルを出発して2日目、奴隷商人の前にその男は現れた。

「すみません、貴方は奴隷商人でよろしいですか？」

「何者だ？私は急いでおるのだ、そこに居ては馬車が通れないではないか退かぬか」

「いや、馬車を動かされては困ります、貴方は一人でスレイブタウンに帰って頂かなければいけないのです」

その男は馬車の前で堂々と奴隷商人にそう告げた。

「なんだ、お主、これ以上ふざけた事を言っておると叩き切るぞ」

そう言って雇った剣士達に攻撃態勢の指示をとる。

男は奴隷商人の護衛に剣を突き付けられた。

「さあわかっただろう、早くどくのだ」

「わかりました、出来れば気持ちのいい交渉にしたかったのですが」

そういうと男は手を上げた。

すると地面に魔法陣が浮かび護衛が吹き飛んだ。

「くそ、魔法使いか、だがこちらには30人も護衛が居るのだ、たった一人で何が出来る」

「何を言っているのですか、私は、1人じゃありません」

男がそう言うと、もう1人大剣を持った剣士が現れた。

「な！お前は・・・」

奴隷商人の前に現れたのは先日大会で優勝者だった。

「では、話を続けます、貴方が手に入れた、約400人引き取らせていただきます」

「な、どうしてそれを知っているのだ、こいつ等の仲間なのか？」

「はい、そうです・・・この交渉が決裂した時何が起こるかももうお分かりでしょう」

死を免れるため、奴隷商人は、手を上げ降参を表明し、男の持っていた、契約書にサインを書いた。

私は、日本に居た頃は中学教師だった。

特に熱心に生徒と接していたわけでもなかった。

だから、私は、生徒には、好かれても嫌われてもいないどうでも良い教師としての位置付けだったろう。

だがそんな私でも、この世界に召喚された時は、職業病だろうか、同じ教会に召喚された中学生と高校生は気になってしまった。

やはり、高校生はアルバイト経験があったのだろうか、他人と接する能力と、ある程度の社会知識があったため、他の社会人、大学生位の人達と同様、上手くこの世界に馴染もうとしていた。

そして、やはり問題は中学生だった。

まだ、大人びているとはいえ自分でお金を稼ぐという事や、他者との関わり合い場数の少ない子供達はやはり上手くこの世界に適応できていなかった。

私自身は、ギルドでの依頼受付が出来なかったが、富裕層の大人達

を通して、上手く家庭教師の様な職を手に入れる事が出来た。

家庭教師と言う職を通して、この世界の情勢や、どの時間軸に当てはまるかという情報を手に入れ、早くこの国を出ないといけないと思う中、やはりまだ、教会で寝泊まりをする子供達が気になっていた。

私は数日間、この世界の生徒の家に泊まってまた一度教会に戻って来た。

状況はやはり酷くなっていた、人数は約300人弱程度、いまだにこの教会を出ていない子供達もいる様だった。

だが、その中で気になる人物がいた。

大学生くらいの男性と高校生くらいの女性。

多分、兄妹だろうか、2人は、お互いにいがみ合いながら教会の子供達にどこから持ってきたのか沢山の食料を子供達に分け与えていた。

その兄弟は、子供達に何度も話しかけていた、男は独特な喋り方で男の子の相手を、女は明るく元気に女の子を、それはこの教会の唯一の光だった。

その光景を見て、私は毎晩、この教会で寝泊まりする事にした。

次の日もその兄弟は食料を持ってきていた。

子供達はその姿を見ると笑顔をとみ戻しつつあったが、やはり30人分の食料には届かず、体力のありそうな子供達を上手く使って弱っている人達優先的に与えていた。

さらに2人は子供達に話し続けた、この世界の事や、どうすれば仕事が出来るか。

その話を聞いて、少しずつ、この教会を出ようと言う子供たちが現れてきた。

だが、それは無残にも最悪な結果に終わった。

その夜は、異様な雰囲気だった、子供達もその夜は少しザワザワと落ち着きが無かった。

まず、初めに気がついたのはやはり兄妹だった。

外に数人の怪しげな影を見つけた2人はすぐに子供達を出入り口近くに呼び集めた。

2人は、素早く扉を開き外に出て動ける子供たちから外に逃がした。いきなり走り出した、子供達に気がついた複数の男たちはすぐに集まり捕えようと襲いかかった。

兄妹は男達に抵抗したが、武器を持っていなかったため、子供達を庇って簡単に捕えられてしまった。

私は、身体が動かなかった、それに今までただの傍観者が子供を助けるなんて。

と言う思いが心の中に渦巻いていた。

子供達が逃げ惑う中、私は潔く捕まってしまった……。

2人のおかげで助かった子供達は約50人程度、残りの250人近い人数が檻の様な馬車に揺られ続け、体力と精神が徐々に削られていった。

数日の馬車の中、十分な食料もないまま、何処かの大きな体育館の様な場所に運ばれた。

そこには教会の時以上の人数が捕えられていた。

そこは地獄でしかなかった。

憔悴しきって倒れているものや、目が虚ろなものなどが居た。

兄妹も流石に表情に疲れが見えてきていた。

そして、数日後、100人程度連れて行かれ、皆が恐怖や諦めの表情が覆い尽くすようになった。

皆が絶望の中、扉が開いた。
それは光だった。

「落ち着いて聞いてくれ、私たちは皆を助けにきた」

そう、男が口を開いた。

途端に周りがざわつき始めた。

そして一人が声を上げた。

「先輩！」

それは今まで子供達を励まし続けた妹の声だ。

その声は震え、顔は涙を浮かべていた。

妹の涙は、励まされてきた子供達に助かったと言う確信が生まれた。

「今まで良く頑張ったわね」

妹は泣き出した。

兄も顔を下に向けている。

その時、私は思った。

なぜ私はこの2人の様に子供達の助けになれなかったのか。

なぜ私はこの2人の様に子供達を励ます事が出来なかったのか。

なぜ私はこの2人の様に子供達の希望になれなかったのか。

そう、あの2人は特別では無いのだ。

何処にでもいるただの兄妹なのだ。

私はこの時やっとその事に気がついたのだ。

妹は扉の前の女性に抱きついた。

兄もそれにつられて駆け寄る。

「皆、聞いてくれ、もうすぐ、先に連れられた者たちが戻ってくるその間に聞いて欲しい事がある」

そう最初に言葉を発した男がまた口を開いた。

「今から、食料を皆に配る、だがそれは今日だけだ、明日からは自分の手で金を稼ぎ生なければならない」

皆は静かに聞いていた。

「ここは日本では無いのだ、何もしないで食べ物や、寝る場所は手に入らない、ならばどうすれば良いか？答えは簡単だ、自分でこの世界に適応し、自分で生きていかなければならない、出来なければ、またこの状況が待っているだけだ、今度は助けが来ると思うな、奴隷としてこの世界で一生を過ごす事になる」

男の言葉は厳しい内容だった。

だが、それ以上に私達を思っていてくれた。

「今、この街では大手ギルドが3つもある、もう、言い訳は出来ない、自分の力を信じる、諦める事は死に直結するのだ」

そこで言葉は終わる。

子供達はその言葉を深く受け止めていた。

もう二度とこの様な状況に陥りたく無いだろう。

皆、目に生きる希望を取り戻していった。

そして次々に食事が配られた。

子供達は涙を流しながら食べていた。

開放された喜びと生きる喜びを噛み締めていたのだ。

「皆、食べながら聞いてくれ、これは一つの提案だ」

また、男は口を開いた。

「私は、君たちを拉致した国を許さない、そこでこれから半年かけて準備をする」

そして皆を見渡しながら声放つ。

「奴隷育成国、レイドのスレイブタウンを手に入れる」

その男の言葉は、核心だった、絶対に出来ると言う自身に満ち溢れた言葉だった。

そして私は思ったのだ、私は、こんなことをしている場合ではなかったのだと、自分より若い者がここまでこの世界で生きる事に真剣になっているのに、自分は何なのだと。

そして私は決心した。

私は、この世界で生きる意味を探そうと、自分を見つけようと。

「では、半年後、自分に勝ち、強さを手に入れた者はここに集まってくれ、その時、私達は、この世界を変える者になる！」

この時、この世界の歴史が大きく移り変わる瞬間だった。

第一章 19話（後書き）

何とか第一章を綺麗に終われないかを試行錯誤しています。
第二章も大まかな構成が出来ましたのでこれから頑張っていき
ます。

感想、評価お待ちしております。

第一章 20話（前書き）

本当は、当初ここで第一章完結するはずでした。
ですが、しっかり終わって無いのでこのまま進めたいと思います。

第一章 20話

俺は奴隷商人から被害者を解放し、半年後、強くなった者たちはこの場所に集まる事を約束し、その場所から離れた。

そして佐藤兄妹はあの子達を見守りたいとの理由で半年後に落ち合う事になった。

「結局、このメンバーになったわね」

「そうだな、これから俺達はどうする？」

忠則がこれからについて聞く。

「目標は変わらない、まずギルドランクAAを目指す、だが、この国以外の方が良いな、まず次の国を何処にするか決めよう」

「この国から近いのはレイドとリーディアとテイルアと小国が何個かあるわね」

「まあレイドとリーディアは今行かないほう良いし、テイルアがいいだろうな」

忠則がそう言って俺は頷く。

「そうだな、あの国は特に何もないが平和な国だしな、次はテイルアに決定だ」

俺は忠則の意見に賛成して準備をし、テイルアに向かう。

テイルアまでの道のりは馬で5日間、俺は新しい魔術の修行を始めた。

この世界に来て約一ヶ月、基礎魔法はタイムラグ0で発動出来るよ

うになった。

だが、基礎魔法はやはり基礎なのだ、俺はまだ応用も出来なければ正確な制御が出来なかった。

さらに、忠則の強さに焦りもあった。

今になって自分も日本で体を鍛えておけば良かった何て事を考えてしまった自分がいた。

だが、今更悔やんでもしょうが無いと自分に言い聞かせ、新しく中級魔法の練習に取り掛かる。

中級魔法は土と雷だ、この魔法は基礎魔法より魔力の量が10倍程度必要で、制御が難しい。

そのため、魔法使いの3分の2がこの魔法を使う事が出来ないのだ。俺はギルドランクAAに昇格する為には最低でもこの魔法を使いこなす必要があった。

「お願いだ、ちゃんと発動してくれよ」

そう1人でつぶやいて練習を始めた。

そして5日後、テイルアに到着し、宿を探して荷物を置く。

「早速ギルド見つけて依頼受けに行こうぜ」

「ちよっとは休憩させてよね、この5日間、馬に乗り続けて疲れているのよ」

あかりはベッドに座り動けない事をアピールする。

「じゃあ、黒野も疲れているようだし、俺が適当に依頼を貰ってく
るぜ、此処で待っててくれ」

「「え！」」

忠則は、俺達が口を開く前位に宿から出ていってしまった。

「大丈夫かしら・・・」

「いや、今回は死を覚悟する必要があるかも・・・」

そして、俺の予想は的中した。

忠則は数十分後笑顔で戻って来た。

「良い依頼見つけたぜ、ランク制限なしランクA制度ありだってよ
お」

「何て都合のいい依頼なのよ・・・」

あかりは忠則の言葉にため息を吐く。

「それで？どんな依頼内容なんだ？」

「ここから、数十km先にある未開の森の調査だ」

元気よく放った言葉で俺とあかりは疲れが増した。

「それって、小説で、強い魔物が居た場所じゃなかった？」

「おう、そいつらを適当に倒して、魔物の一部を持っていけばいい
そうだ」

そして、依頼達成に向けて準備を始める事になった。

森での魔物討伐は思った以上に簡単だった。

忠則が強すぎたのだ、流石ライオルに勝っただけであった。

俺が、遠距離魔法を放ち、怯んだところを叩き切る。

時々あかりが回復をする、そのローテーションで1週間続き国に戻った。

「ランクB飛ばしてランクAなんて、チート主人公じゃない」

「ああこれじゃあ半年も要らなかったかもしれないな」

そんな事を俺とあかりは話していた。

だがそんな簡単にランクAAに昇格は出来なかった。

この差は、忠則でも乗り越えるのが難しい壁だったのだ。

「昇格条件が厳しすぎるぜ」

忠則さえそんな言葉を吐いていた。

「最低でも上級魔物の巣窟の殲滅だそうよ」

「最高は最上級魔物のドラゴンの討伐・・・」

そして、俺達の半年は、ランクAAに昇格するために修行と様々な依頼を達成させた。

第一章 20話（後書き）

次から一気に時間が進んじゃいます。
皆強くなってくれると嬉しいですね。

自分ももっと文章力に強くならないと。

評価、感想お待ちしておりますw

第一章 21話（前書き）

お気に入り小説に登録していただいてる皆様。
評価していただいてる皆様。
本当にありがとうございます。

これからも毎日投稿する励みになります。

第一章 21話

「久しぶりに戻って来たわね」

「ああデリルには数日しか居なかったが懐かしく感じるな」

デリルの門を抜けた後、あかりと忠則が話していた。

そう、俺達は半年の修行の末、この地に戻って来た。

街に到着すると2人の男女が目の前に現れた。

「お帰りなさい、先輩達」

「また一層強くなったみたいですね、英雄にでもなるつもりですか？」

それは佐藤兄妹だった。

2人も成長していた、咲子はもう子供らしさも感じなくなっていた。

「ただいま、2人も大変だったでしょ？」

「いえ、先輩達に比べれば楽なものです、時折皆と遊んでいたりましたから」

「皆？」

「まあこんな所で話していても仕方ないですよ、もう皆集まっています、早く行きましょう」

「え、何処に行くんだよ」

「皆を助けてくれた場所ですよ、もう一週間も前から何時来るか待っていたんですから」

そして、連れられて来たのは半年前、拉致された子供達が絶望に染まった顔をしていた場所だった。

だが、半年を掛け、その表情は絶望から希望、歓喜の表情に変わって

いた。

その数は200人近くいた。

俺達が、その中に入ると大きな歓声が上がった。

「皆、この時の為に苦しい鍛錬を続けたんです」

「全て、私の舎弟です」

そう言って自慢している兄も相当な鍛錬をしたのだろう、身体に数々の傷跡が見えた。

俺達は驚きを隠せなかった、俺の予想では多くても10分の1の50人程度だろうと踏んでいたのだ。

だが予想の4倍の人数が俺達の前に居た。

「皆、先輩達に感謝しているの、あの時に掛けてくれた言葉で生きなければならぬって」

「でもなんでこんな人数が、これは予想以上だ」

「それはこの人のおかげよ」

そう咲子が言って、俺達より何歳か年上の男が現れた。

「お久しぶりです、と言いたいところですが、初めましてですね」

「あなたは？」

「私は、日本で教師をしていた、ひらたまさとし平田正敏ともうします、正敏と及びください」

「正敏さん、なんで敬語なのでしょう？ 私達の方が年下ですよ」

「いえ、私は皆様とこの兄妹に助けられたのです、私に生きる意味を再確認させてくれたのです」

そう言ってその正敏と名乗る男は話を続ける。

「そのお礼と言ってはなんですが、何とかこの子供達をまとめ、出来る事を学ばせ、この国に貢献しながら、鍛錬を続けました」

「そうですか、貴方が、この人数を」

「はい、学校では考えられない人数ですが、何とかまとめ上げましたよ」

正敏は、やり甲斐がありましたと笑いながら答える。

だが、この人数をまとめ指揮するのは尋常では出来ないだろう。

この男のおかげで俺達はスレイブタウン攻略に大きく前進をした。やはり、あの時、全ての人間を助けて良かったと再確認出来た。

「さて、黒野様、皆この時の為に頑張って来ました、これからの事をお話してください」

そう正敏が俺に言う、俺は気合を入れて前に立ち声を上げた。

「皆、良く私達の言葉を聞いてくれた、感謝する、これから私達はスレイブタウンのある国レイドに向かう、だが今回は戦争ではない、私達は皆に死んでもらいたくない、だから内部から破壊していく」

俺はそこで言葉を区切り息継ぎをする。

その間皆、軍隊のように静かに俺の言葉を待っていた。

「まず、レイドに向かい、俺達のギルドを立ち上げる、皆は、そのギルドに専属加入してもらう、その後、私がギルドに様々な依頼を設けるのでそれを達成させてほしい、そして時期が来た時、またその時が来たらこのような形で報告する以上だ」

俺はそう言葉を言いきると正敏は俺の隣に立ち、更に声を上げた。

「遂に私達を助けて頂いた方達に恩返しをする時が来たのだ、この半年間、死に物狂いで生きて鍛え上げてきた力を発揮しようではないか！」

[illegible]

それは、鍛え上げられた軍隊の様な統一された声だった。

その声はこの半年間、どれだけの努力を重ねたのか分からないほど成長していた。

こうして、半年に渡る計画を実行する時が決まった。

第一章 21話（後書き）

半年間、3人がどんな特訓をしたのかはまだ先の話になると思います。

色々考えているんですが、どうやって話に組み込むか・・・。

何とか綺麗にまとめられたらいいですけど、やっぱり難しいですね。

第一章 22話（前書き）

第一章が終わらない・・・。
終わり方がつかめません。

今日のうちに第一章を描き終わらせたいです。
難しいかな・・・。

第一章 22話

まず、先にレイドに着いた3人は都市に行き新規ギルドの設立許可を取りに行った。

この国レイドは王国だ、レイド国の王クレマンは、特に強欲だった、冷酷でもなく、どちらかと言えば優しくおだやかな人物だった。ではなぜこのような国になってしまったのか？

それは20年前に遡る。

レイドの国のクレマンが王になり3年後の事だった。

その時のレイドは、裕福な暮らしもなく、国民も決して楽ではなかったが、戦争や大きな事件や事故もない平和な国だった。

さらにその年はクレマンの子供が生まれた事もあって賑わっていた。

ある日一人の男がレイドにやって来た。

戦争で、流れ込んできた難民や孤児を奴隷にしたいという許可を取りに来たのだ。

その時のクレマンは実際に難民や孤児の問題に頭を悩ませていた為、そのまま生き倒れになってしまうよりは良いと考え許可をした。

だが、その考えが甘かったのだ。

男の奴隷は相当なものだった、調教は約3ヵ月もかけた。

奴隷と言うものを教え込み、様々な貴族に売りさばいたのだ。

そして男は、戦争をしている国から様々な難民、孤児を連れてきてそのシステムを拡大していった。

クレマンが、危険と判断した時には3年がたっていた。

3年で、その奴隷会社は、国の町の一部を呑み込んでいたのだ。

情報操作で少しずつ拡大していたその奴隷会社は、流通ルートの拡大、別の国の貴族との交渉で、既にクレマン一人で対処できるレベルでは無い大きさになってしまった。

だが、クレマンはこれ以上拡大させたくなかった、このままではこの国自体が呑み込まれてしまうのは目に見えていたのだ。

クレマンは、男に交渉をした。

この国にこれ以上の拡大をさせない事、奴隷にも人権を与える事。だが、そんな事を無条件で男は引き受ける訳が無かった。

男は条件を突き付けてきた。

国はこの会社は一切干渉をしない事、レイドの政治の一部に介入できる事。

これは、間接的にレイドと奴隷会社が手を結ぶと同じ意味合いだった。

クレマンは、拒否した、レイドが奴隷の国になったのと変わらないのだ、それでは意味が無い。

クレマンと男の交渉は平行線をたどった。

そしてその時男が言った。

「まあこの条件が飲めないのなら、私はこの国を呑み込んで貴方の娘さんを頂くだけです、今、リーディアで大規模な戦争が起こっているのです、難民は減りません、私の会社はまだまだ大きくなりますよ」

それは脅しだった。

だが、リーディアの戦争事情を知っていたクレマンはその言葉は正確だろう。

このままだとこの国は10年も満たない間に呑み込まれてしまう、

そして娘を取られる訳にはいかなかった。
そして、その後17年間、スレイブタウンとして街の1部を取られ、
奴隷の国とされた。

「まず、国王のクレマンを味方にしなければならない」

黒野は口を開いて、2人に告げた。

「でも、流石に国の一つのギルドが王に謁見を求めるのは難しい事
よ」

「そうだな、流石に実績の無いギルドだと、無理があるな」

あかり、忠則の2人はそう返すと黒野はそれに答える。

「だから、もうすぐ集まるあの子供達に実績を積ませる」

「どう言う事だ？」

「まず、この国の景気回復に努める内容依頼と、表向きはこの国の
警備と言う名で、奴隷商人から奴隷を連れてこれないようにする」

「そう、上手くいくかしら、奴隷会社はこの国と手を結んでいるの
よ」

「ああ上手くいかなくても良いさ、まず俺達が奴隷会社を潰そうと
している事を国に認識させればいい、そうすればクレマンの方から
このギルドに依頼が来るだろう」

そして、俺達は国の都市部に今まで半年間貯めた資金の一部を使っ
てギルドを設立した。

ギルドを設立して1週間後、俺達を合わせて208人の専属ギルド

メンバーが入った。

子供達の依頼消化率はすごい早さだった、子供達のギルドランクは120人がランクBで85人がランクAだった。

一番すごいのは団結率だった、基本的に5人のグループに分かれていた。

自分の1人のミスで周り4人に迷惑がかかるという責任は子供達に重くのしかかったが、それ以上に子供達を成長させた。

そして一つわかった事があった。

この世界は成長に対して能力の上昇が著しいのだ。

だから日本ですでに成長していた忠則はこの世界に来てすでにライオルに並ぶ強さを手に入れていたのだ。

成長の早い子供達は目に見える能力上昇にさらに強くなりたいという欲求が生まれた。

それは凄まじいものだった、どんどん速くなる自分や強くなる自分を実感する子供達はグループ内やグループ同士で競い合う様になった、依頼内容の難易度や完了スピード、評価。

時には模擬戦をやって順位をつけたりもした。

その成長はランクAの戦士と1人で渡り合える所までになった。

その人数が約200人もいるのだ。

黒野達のギルドの評価は一気に上がった。

そして奴隷商人達の妨害も予想以上に出来た。

これは子供達の今までの恨みや奴隷を自分達のように助けたいという思いが此処まで動かしたのだろう。

そうしてギルド結成から3ヶ月がたったある日、一通の手紙が届いた。

そしてそれを見た黒野はつぶやいた。

「よし、遂にこの時が来たな」

王からの城への招待状だった。

第一章 22話（後書き）

第一章を終えたら少しでも日常的な物を描いて第二章に進めたいと思います。

日常って自分に書けるのかな・・・。

第一章 23話（前書き）

大学が春休みに入ったので、何とか書き貯めを増やそうと奮闘中です。

全く進んでないですけど・・・。

ですが、何とか毎日投稿は続けたいので頑張ります！

読者の皆さん、何とかこれからもお付き合いよろしくお願いします。

第一章 23話

「お初目にかかります、副ギルドマスターの黒野と申します」

俺は大きな会場の何段か上に大きな椅子に座っている男にお辞儀をした。

「私はギルドマスターを此処に呼んだつもりだったんだが？」

「申し訳ございません、ギルドマスターは力や能力こそありますが、礼儀と言う物を知らないものでして勝手ながら私が変わりに来させていただきました」

男はその様子を見てまあ良いだろうとうなずく。

「で、お主は我がこの城に読んだ意味を分かっておるのかの？」

「はい、そうなる様に今まで事を進めていましたので」

「最初から私の協力を求めていたわけだな？」

「はい、あれは国が後ろ盾しております、そのため、あれを潰すには国の許可が必要です」

「そうか、そこまで知っているわけだな、ではお主は我に何を求めているのか？」

やっこの質問が来たなと思った黒野は直に口を開いた。

「はい、それは、私のギルドを、この国直属の騎士にさせて頂きたい、そしてそれ相応の身分も」

「いや、それは難しい、国民は現れたばかりのギルドを簡単に騎士にさせるのは納得がいかないだろう、一度身分をやって問題があった前例があるしな」

まあこんなに簡単に許可をもらえるわけがないだろう、と思っていた黒野は、考えていた言葉を並べる。

「では、一ヶ月後まずこの国の経済を目に見える成長を約束します、その時は国民も私達に納得をして頂けるでしょう」

「ふむ、一カ月か、ずいぶんと短期間だが良いのか？」

「いえ、既にこの3ヶ月で準備は出来ています、後一カ月もあればこの国は変わりますよ、そうすれば、奴隷の売買で国を潤す必要もなく、孤児院を建てる事も可能になるはずです」

俺は王の目を見つめながら言った。

王はその確信めいた目を見て、分かったとうなずいた。

「では、また一ヶ月後に会おうではないか、状況によっては、この国がお主達の後ろ盾になろう」

「ありがとうございます、では一ヶ月後を楽しみにしていただきます」

一ヶ月後のレイドの繁栄は王のクレマンが思っていた以上だった。まず、奴隷商人しか使わない奴隷流通ルートが他の商人が渡るようになり、様々なものが手に入るようになり、レイドの特産物も他国に流れるようになった。

そして、治安が一気に良くなったのだ。

盗賊や、ガラの悪い奴らはスレイブタウンを除いてほとんど居なくなってしまった。

さらに、ギルドとは別に半年前助けた多数の女子陣が街の活性化に努めた。

女の子たちは、この世界には無い様々な和菓子や洋菓子を作った。そのお菓子の人気はレイドの最大の収益になったのだ。

レイドには大量のお金流れ込んできた、事により街は活性化し、お金の巡りが良くなった。

黒野達のギルドによって経済効果は2倍以上まで膨れ上がった。そのためすぐにクレマンは黒野をまた城に呼んだ。

「ここまで、良くなるとは思わなかったぞ」

「ありがとうございます、私の部下は若干年齢が低いですが、とても優秀なのです」

「では、お主のギルドを国直属の騎士に迎えよう」

そう言うと王クレマンは契約書にサインし黒野の前に出した。

「だが、その前に聞きたい事がある」

「为什么呢？」

「なぜこの国を助けようとする、あれは一筋縄ではいかないのだぞ」

「いえ、最初は国を助けるつもりはありませんでしたよ、私達は、あれを潰すことだけを考えていましたから、その結果この国が助かるだけなのです」

「なぜそこまで執着するのじゃ？」

クレマンの言葉に黒野は冷酷な笑顔で答えた。

「私の仲間を奴隷にしようと企てたのです、それは私達を怒らせるのに十分な行為です」

クレマンは、そうかと呟いて黒野の笑みを見て唾を吞んだ。

黒野は凄まじい憎悪を隠して笑っていた。

「ではこれで私は、国の弊害になっている奴隷会社を、私達の権限で始末させていただきます」

「そうか・・・、くれぐれも国民には被害を出さないようにするのだぞ」

「ご忠告ありがとうございます、王」

そう言って黒野は王にお辞儀をして城を出ていった。

「大丈夫なのかしらお父様」

黒野が出ていった後、遠くから見ていた綺麗なドレスを身に纏った女性が王に質問をする。

「ああ、レイラか、あの男はやってくれるだろう、だが、不安なのはこの後だろう、この国の味方になってくれるのなら大きな利益だが・・・」

「でも、私はそんな悪い人には見えなかったわよ、あの社長より100倍ましだわ」

レイラと言われた女性は社長の顔を思い出したのか嫌な表情をして、自分の部屋に戻っていった。

「そうだな、あの社長が娘の婿にならないのなら、これ以上喜ばしい事は無いだろう」

クレマンはこの国の不安要素が消える安心と、どう変わっていくかわからない不安を感じながら今後のギルドの対処に着いて追われていた。

そして、遂にスレイブタウン殲滅に向けて、黒野達の率いるギルド

が動き出した。

第一章 23話（後書き）

あまり、納得のいかない出来なのです。

そしてこれからの展開をどうしようか考える毎日。
第二章は予想以上に難しいです・・・。

第一章 24話（前書き）

何とか番外編的なものを書き上げようと奮闘中です。

正直第一章の終りまでの話は自分の中でイメージと違う出来になってしまいました。

まあ自分の中で一章の終わりだけは満足できたので良かったかなと自己満足野郎になってしまった作者です。

ですが、めげずにこれからもお付き合いお願いします！

第一章 24話

クレマンから国直属の騎士に任命され1週間後。
遂に黒野達は動き出した。

「私は数日前、奴隷会社に一通の撤退命令通知をだした、これは無条件撤退ではあるが、撤退したものの身分や生活を保障するものだ」
黒野はギルドに集まった騎士となったギルド専属メンバーの前で大きく宣言する。

「その結果、撤退数は4割、基本的に生活上仕方なくこの会社に勤めていたものは既に居ない、残るものは私達に敵対するものだけだ」
メンバーは力強く黒野を見つめていた、黒野の言葉を聞き逃さないように一つ一つをしっかりと頭に入れていた。

「全て条件は整った、これから私たちはスレイブタウンにある奴隷会社を殲滅する！」

黒野が宣言すると、今まで待ち望んでいたメンバーが、大きく声を上げた。

その様子を見て黒野は言葉を更に付け加える。

「だが、良いか、これは復讐じゃない、救出だ、今まで奴隷として扱われていた人達への希望になるのだ、決して恨みや憎悪で動いてはいけない、俺達は救出者なのだ」

メンバー達はちゃんと黒野の言葉を聞いていた、自分は助けるのだ、

いつか自分が助けてもらった時のように、自分達が今度は助ける番なのだと。

その事を再確認したメンバーは言葉を止めた黒野の後に大歓声を上げた。

日が真上に上がった頃、黒野は門の前に現れた。

スレイブタウンの門で黒野は門番の2人に挨拶をする。

「今日、この街にある奴隷会社を摘発し、活動停止を宣言しに来ました、潔くこの門を開き投稿してください」

「貴様が、馬鹿な事を抜かす輩か、お前達のせいで従業員の人数が一気に減ったのだ、この始末どう付けてくれる」

「話を聞かない人ですね、まあその始末を付けに来たんですよ、早く門を開けてください」

そう、黒野が言うと同番が槍を突き付けて黒野に威嚇をする。

「それ以上減らず口をたたくな、もう良い、こいつを牢屋につれていくぞ」

「早くその金属製の槍を話した方が良いですよ」

「この状況で良くそんな口を利けるな、お前はもう奴隷決定だな」

「もう、この国で奴隷は作らせない」

奴隷という言葉聞いた黒野はスイッチの入ったように怒りをあらわにした。

黒野は突き付けられた槍を手で押さえ、その槍を止めるように魔法陣を描いた。

「な、こいつ魔法使いか！」

門番が魔法陣に気がついた時には遅かった、槍にはスタンガンレベルの電流が既に流れていた。

門番の男2人は気絶して門の横に倒れた。

「はあ、結局門が開かなかったの？」

「すまない、ちょっと冷静に対処できなかった」

あかりが少し後ろから現れてため息をついた。

「まあ開かないなら仕方ねえ、俺がぶち破いてやるよ」

「本当は音がデカイからそれは止めたかったんだけどな」

「黒野がちゃんと門を開けてくれないからいけないのよ」

あかりが俺に不満をぶつけるとドガンと大きな音と共に門が壊れた。

「よっしゃ、一発でぶっ壊せたぜ！」

「いつ見ても、たー君は規格外よね」

そう、門は木製だが忠則の身長の3倍もある大きな門だったのだ。

忠則の大剣は、大会時より更に大きく頑丈な物になっていた、もう黒野は持ち上げる事すら不可能なその大剣は美しく存在感を放っていた。

「さて、門を壊したのはいいがやはり、待っていたようだぜ」

「そのようだね、メンバーが来るのは後10分後位だから、その間に戦意喪失させておこう」

門を壊した無効に警備には多すぎる人数の武装した集団が勢ぞろい

していた。

その人数は門の周りだけで300はいるだろうか、黒野はその姿を見ると戦闘準備を始めた。

「忠則、3分時間をくれ、それでこの人数なら何とかなる」

「いや、これだけなら5分位楽勝だぜ」

そんな事を2人で話していると大量の弓矢が飛んできた。

「やべ、俺達を生かす気ねえぞこれ」

「危ないわ、離れてて、天使の翼」
エンジェルウイング

そう言うところからは白い羽を俺達の頭上に広げた。

あかりは、回復魔術以外に防御魔術も覚えていた。

その防御力は最大でドラゴンの息吹すら防ぐレベルまで成長していた。

「ありがとな、あかり、後は俺に任せろ」

弓を受けきった羽は消え、忠則は走り出した。

忠則の速さは、大会時のライオルを超えていた、この半年間、全ての攻撃に入る動作を一から鍛え直したのだ、時にはライオルの動きを真似て、更にそれに磨きをかけた。

そして、更に、魔物を一撃で仕留めるため、様々な剣技を覚え、それにアレンジを加えた。

忠則は様々な技や動きを覚えるのは慣れていた、だが新しい技を作るとなると話は別だった。

「まだ、この技は形になってねえ」

忠則は様々な角度からの攻撃を避け次々と敵を切り崩していく。剣技は忠則を急速に強くさせた、忠則は様々な剣士から技を盗み、自分が必要なものだけを厳選した。更に自分なりの動きを加え、新しい技として忠則の体に刻んだ。

「閃光・・・」

それは初めて忠則が実践で使えるようになったオリジナル技。

地面を爆発的な力で蹴り、地面から少し離れた所を飛び、数m先の敵を瞬時に切りつける。

走る動作の無いその動きは低空飛行する燕の様な速さで敵を切りつける。

大きな身体が目にも止まらぬ速さで動き瞬時に切りつけられる。

敵はひたすら忠則の動きに翻弄されていた。

「よし、出来た、忠則今すぐ離れるんだ」

「了解だ！」

忠則は一気に後ろに跳んだ。

忠則に気を取られていた武装していた集団は大きな魔法陣を作り上げていた男に気がついた。

「あれはマズイ、逃げろ！！」

一人が叫んだときには全体に根を張るように電撃が集団を襲った。その後、倒れた集団は、立ちあがる事無く麻痺して動けなくなっていた。

「さて、ここの処理は任せるか」

「そうね、私はここで待っているのは後はよろしく」

「ああ子供達に早く来ないと何も出来ないぞって言っておいてくれ」
そう言って忠則と黒野は工場へ走り出した。

第一章 24話（後書き）

今回は修業後の3人の力を発揮したという形になりました。
そろそろ、皆強さがすごい事になって来ました。

第一章 25話（前書き）

番外編難しいです・・・。

早く書き上げないと第二章に進めない。

書き貯めが危なくなってきました。

何とか頑張っていきたいと思います！

第一章 25話

黒野と忠則は奴隷会社に入り襲いかかってくるものを気絶させていった。

黒野は基礎魔法の3種を使って気絶させていたが納得が行っていなかった。

さらに言えば全く満足のいかない様子だった。

それは、修行を初めてから半年間の時に遡る。

黒野は、中級魔法を初めて2ヶ月、遂に習得が出来なかった。

全く、電気や地面を扱う事が出来なかったのだ。

そうそれは、黒野に魔力の量が少ない事を意味していた。

黒野はその時、絶望した、中級魔法すら発動出来ない魔力ではギルドランクAは到底叶わないのだ、基礎魔法の一つを極めるにしても魔力が無いのは致命的だった。

火、水、風の3種最大魔法を使用するには中級魔法を使用できない自分には全く扱えるものではないのだ。

黒野は諦めなかった、黒野は自分の魔力について調べ始めた。

魔力の量と魔力の許容量、魔力の流れや放出量。

自身の中の魔力を隅々まで調べ上げた。

その中で一つ大きな問題が発覚した、魔力が体内に溜まらなかった。そのため、黒野の中に入るはずの大量の魔力が、自然に流れ出てしまっていたのだ。

黒野の魔力の許容量はこの世界でも多い部類だった。

だが、体内に入っている魔力はその10分の1にも満たなかった。

黒野は、原因を探した、様々な書物を読んで、魔法学を調べ直したが1週間がたっても分かる事は無かった。

そして黒野は原因を突き止めるのを諦めた。
だが、全てを諦めたわけではなかった。

黒野は、まず、あかりに魔術の理論を教えてもらい習得した。
更に魔力のコントロールに全てを費やし1ヶ月かけて魔力を体内に
一時的に留める事に成功したのだ。

黒野は、魔術を利用して魔力を集め、体内に一時的に貯蔵する。
その後、体内から放出しきる前に魔力を使用するのだ。

それによって、一時的に黒野は中級魔法を発動する事が出来るよう
になったのだ。

今、黒野はその方法を利用して、電撃を放ったのだ。

それでも黒野はあまり表情はすぐれない、この方法には様々なデメ
リットがあるのだ。

まず、魔術による魔力補充は相当な精神力が削られるのだ。

魔力のコントロールと魔術の調整。

この二つを常に意識し続け、体内に魔力を貯め続けなければいけな
い。

そして魔術試行中の時間が最大の欠点だった。

魔術はその場で無防備な状態で立っていなければならない。

あかりのように防御魔術を試行するには更に魔力を身体に補充する
時間が必要になるので、帰って負担になるのだ。

そのため、魔術による魔力補充中の約3分間、黒野は守る物が無い
無防備な状況が絶対に生まれてしまう。

それは魔法使いには致命的な欠点だった。

そう、黒野は様々な魔法は使えるようになったが、魔法使いとして
は一人前になれていなかったのだ。

黒野は、ギルドの結成から様々な練習を重ね、魔力補充を5分から
3分に時間を減らす事は出来たが、これ以上の省略は今の現状では
不可能な所まで来てしまった。

そして、魔法使いとして一人前になれなかった黒野は半年間の修行の末ギルドランクAAを手に入れる事は出来ていなかった。

「くそ、これじゃ駄目なんだよ・・・」

黒野は風で襲いかかる従業員を吹き飛ばしながら呟いた。

異世界に来てから、俺は何度も壁に阻まれていた。

だがこの壁はとても丈夫で果てしない高さに見えた。

あかりと忠則は能力を認められランクAAを手に入れていたのだ。

俺は2人の昇格を喜んだが、とても苦しかった。

何故、自分だけがここまで才能が無いのか。

欠陥が生まれたのか、一人前にはなる事が出来ないのか。

常に反復練習や、特訓は欠かさずやっていたし、様々な勉強もした。だが、あかりの白魔術や忠則の剣技のように光り輝くものが一つもなかった。

「おい、それ以上やると死んじゃうぞ」

黒野は忠則の声で目が覚めた。

黒野が掴んでいた作業員は風で切り刻まれて息をするのすら苦しそうにしていた。

「すまない、考え事をしていたんだ・・・」

「まあ、それなら良いんだが・・・そろそろ社長室に着くぞ」

黒野と忠則は様々な扉をたたき壊し社長室らしき部屋に突入した。

「なんかイメージと違うねえか？」

忠則は目の前にいた男を指さし言った。

その通りだろう、目の前の社長と書かれた札が机に置いていなければ誰もこの人間を社長とは思わないだろう。」

「ひいひい！本当に来てしまったあ！」

目の前の男は太っていて何故か怯えていた。

「おい、あんた社長か？」

「い、い、いや、えっと・・・」

「ハッキリしろや」

「ひいひい！ごめんなさい私が社長です！」

既に黒野と忠則はやる気が無かった。

「忠則・・・なあもう良いよな」

「ああ、めんどくせえ、やってくれ」

黒野は社長を気絶させ転がしながら城へと運んで言った。
こうして、一応はスレイブタウンの一軒は落着いたのだった。

第一章 25話（後書き）

次回で第一章が終了です。

いまだに伏線がちゃんと回収できるか心配です・・・。

黒野が結構苦悩してますが、色々主人公らしさを発揮するはずなので、黒野をもう少しの間応援してあげてください。

そして作者の応援もよろしくお願いします（笑）

第一章 26話（前書き）

今回で第一章が終わります。

様々な複線を残しちゃっていますが、第二章から少しずつ解き明かしていく予定です。

今、書き貯めがほとんど残って無いため急いで書き上げているのですが、全然進みません・・・。

第二章までは毎日投稿を続けるつもりでしたが、このままだと言間に合わないかもしれません・・・。

読者の皆様のが見て頂き、お気に入り登録や評価までして頂き本当に感謝しております、そのおかげで今まで何とか毎日投稿を続けております。

まだまだ完結までの道のりは遠いですが、これからもお付き合いよろしく願います。

第一章 26話

結論から言うとスレイブタウンは崩壊した。

俺達は気絶したデブ社長を転がしながら運び、王に確認を取り、牢屋にぶち込んだ。

スレイブタウンは様々な横領や、詐欺を繰り返していた事が発覚。まあ調べるまでもなく、会社に落ちている資料が全てそれを証明した。

残っていた従業員は全て盗賊の出や無法者ばかりで中には指名手配者すらいた。

そのため従業員の8割は社長同様牢屋行き。

残り2割は身分の低い奴隷上がりの者で国とギルドが保護した。

そしてスレイブタウンの社長は5年前位に変わっていた。

前社長はスレイブタウンを国が掲げた限度ギリギリまで発展させ、様々な所で金を作り、今の社長と変わり消えていった、その後を記した資料は全くなく、名前すら偽名を使い分けハッキリとしたものは出てこなかった。

結局分かったのは前社長は金を手に入れ興味をなくしたこのスレイブタウンを適当なものに手渡し放棄したと言う事だけだった。

問題は奴隷だった、まだ親や家のある者は元いた国や街に返したが、大半は親も家もない難民だった。

更に調教され出荷寸前の奴隷は感情をほとんど失っていた。

奴隷制度の無い日本で生まれた俺達はその姿を見た時、歯を食いしばって何かに耐えた。

様々な感情が芽生えた、もしかしたら自分もこの様な姿になっていたのかもしれない恐怖、その姿にならなくて良かったという安堵。だが、その表情をこの子達の前ではいけないと、自分の何かが訴えた。

そして、ギルドは資金を全て解放された奴隷を引き取るために費やすことになった。

だが、悲しみ、苦しみだけではなかった。

会社は早急に整理され、我が忠則率いるギルドの住処となった。

そして今まで苦しめられていた国の人々に感謝をされ、一気に国中にギルドの名前が広がり、レイド国の騎士としてこのギルドは認められた。

そして、従業員と言う名の指名手配犯を捕まえた騎士達数人がランクAに上昇、国からの特別報酬を手にした。
そして、更に特別ゲストも現れた。

「はあはあ、すみません遅れました・・・」

「全くだ、私が居ながらこんなにも時間が掛かるとは」

「うるさいわ！馬鹿兄、もう喋るな、あんたのせいでこんなにも時間が掛かったんでしょ」

デリルで別れた佐藤兄弟が久しぶりに私達の所に現れたのだ。

メイド服を着た女性を連れて。

「まあお二人ともそれ位にしてください、このままだと私のご主人様が分からずじまいです」

「そ、そうよね、こんな奴を相手にしてる暇は無いわ、先輩達遅れてすみませんでした！何とかメイド長を連れて帰る事が出来ました！」

「いえ、私はただの旅人メイドですわ、メイド長などとても・・・」

そうして、ギルドに小説内の伝説のメイド長がやって来たのだ。

それから1週間が経過し、今でも大きな会社をギルド本部として内装工事と再建設作業が行われている中、ギルドメンバーは王にパーティーを招待された。

「やべえ、スーツじゃねえよこれ、タキシードって奴か、それに初めて本物の城って奴に入ったぜ」

「そうね、わたしもこんなドレス初めて着たわ、こんなにも動き辛いのね」

「俺はこの城は3度目だがこんな服は初めてだな、完全に着せられてる感がある」

俺と忠則とあかりは慣れない服装に戸惑いながら、レイド国の城で歓迎パーティーに参加していた。

他のメンバーは騎士として参加しているため、統一された国の騎士としての装備を渡され、重装備を外し、マントを羽織って動きやすい格好をしていた。

その姿は、皆年齢が低く、背も高くないため、とても騎士とは思えない可愛らしい集団だった。

その可愛らしい集団は初めての城と、様々な食事に驚き、とても犯罪者を捕まえた者とは思えないほど目がキラキラと輝く子供だった。

子供の騎士達以外にも、貴族と思われる者たちが居た。

貴族は150人程度、完全に2つのグループに分かれていた。

1つは、あまり裕福で無さそうな貴族、この人たちは、このパーティーを喜んで参加していた、多分、スレイブタウンによって土地や資産を取られていたのだろう。

もう1つは、その逆だ、スレイブタウンにより、富を得ていたものだろう。

会社の資料により様々な貴族たちが犯罪に手を染めていた事が発覚し、捕まったが、全てではなかったのだろう、上手く情報を滅却し、難を逃れた者達だろう。

「まだ、この国の問題は解決していないな・・・」

俺はそう呟いて、これからの事について色々考えていた。

そして、考えがまとまらず数分が経った頃、王の椅子のある大きな部屋の前から王が登場した。

「我が城に着て頂きありがとう、堅苦しい挨拶は必要ないだろう今日は大いに楽しんでくれ」

王は城の中に居る者達へ聞こえるようにそう言い放ち待機していたメイド達が一斉に動き出した。

音楽家達が演奏を開始した。

音楽はこの城全体を覆い、パーティーの開始を告げる鐘の音のように招かれた者達を盛り上げた。

忠則は騎士の子供たちと一緒に豪華な食事の方に消えていった。

そして、消えた忠則をあかりと二人で見送りメイドに飲み物を貰い今までの事を話していた。

だが、数分後、あかりは顔を少し赤く染めていた。

「おい・・・あかり、それお酒じゃないか？」

「え、あら本当だわあ」

「なぜ、飲んで確認するんだ？既に飲んでいるのに・・・」

「そうよねあなんでかしら」

あかりは酒が強くない。

まあ悪酔いはしない筈だがあまり酔った人間と関わり合いたくわない……。

すると、少し離れた所から同世代と思われる貴族の男性が現れた。

男はあかりに用事があるようだった、まあ今のあかりは三つ編みでもなければ丸メガネでも無い、美人と呼ばれる人種だった。

男性に声をかけられても文句の無い人物だ。

更に程よく酔ったあかりは顔を赤く染め良い感じに男たちを誘っていた。

俺は貴族の男性に快くあかりを譲った。

男性は俺の行動を見てありがとうとアイコンタクトをくれた。

せいぜい会話が成り立つように頑張ってくれと心で応援して俺は裏庭と呼ぶには問題があるのではないかと思う豪華な庭園に出た。

大きな月が小さな噴水に浮かんで城から音楽が聞こえてくる。

子供達が食事を奪い合っているのが聞こえるのが少し変だが、それすらも静かに流れるように感じた、俺は噴水近くのベンチに座り、残っていたシャンパンをゆっくりと飲んでいた。

俺はパーティーをあまり楽しめていなかった、理由は分かり切っていた、自分だけ2人より劣っていると言う現実には押しつぶされてしまわない様に必死に自分と戦っていた。

それは様々な自分をただ抑えつけるようにここ数カ月何とか耐える事が出来ていた。

でも、それはもう限界に近付いているのも自分で分かっていた。

「ちくしょう……」

俺は一人噴水の前で涙を流し、様々な感情を表に出した。

「なぜ、俺には力が無い・・・、俺はこの世界では英雄にはなれないのか・・・」

嗚咽を繰り返しながら言葉を発した。

「貴方は既にこの国の英雄ですよ？なぜそんなに悲しんでいるのですか？」

気が付くと噴水の向こうに女性の姿が居た。

俺は驚いて無い顔を隠すため噴水に顔を突っ込んだ。

「噴水の水は綺麗では無いですよ、お水が欲しいなら私が持って来ましょうか？」

女性は驚きも笑いもせず黒野の行動にそう言った。

「見たのか？」

「ええ私、男性がこんな風に泣いているのは初めて見ました」

女性は俺の問いに答える。

俺は、様々な感情で冷静さを完全に失っていた。

そして俺は女性の前で涙を見せた事が恥ずかしくなりその場から逃げようとした。

だがそれをその女性はさせてくれなかった。

「逃げないで、今見た事は誰にも言わない、約束するわ」

女性は黒野の手を掴んで離さなかった。

黒野は女性の手を振りほどく事すら出来ないくらい混乱していた。だが、今までの混乱は彼女と目があつた時に全て消えた。

いや、消えたと言うのは少し誤りがあるかもしれない、それは感情の上書きだった。

噴水越しに見ていたその女性は今、月明りに照らされて黒野の目の前にあった。

「ねえ、私は貴方と話をしたいの、貴方と言う人間を知りたいの」

黒野はその女性が何を言っているかは分かっていたいなかった。

女性の姿、表情、声、全てに魅入られていた。

そう、これは黒野が異世界に来て初めて生まれた感情だった。

第一章 26話（後書き）

第一章終了です、次から番外編を数話投稿して第二章に移りたいと思います。

一応、この様な終わり方をしたので、タグに恋愛を追加しました。作者の力で恋愛要素を加える事が出来るか心配ですが頑張っていきたいと思っています。

それと、作者はあまりハーレム要素が好きではありませんのであまりキャラは増やさない予定です。

何とか様々な内容を混ぜながら物語を進めていきたいと思っています。

一部キャラの口調を修正させていただきました。

キャラのイメージを崩してしまい申し訳ございません。

番外章「メイド編上」(前書き)

第二章に向けて頑張っています。

本当は、この話は1話で終了するつもりだったのですが、文字数が多くなったのと、書き貯めがとも少なくなったため2話構成にさせて頂きました。

何とか毎日更新を続けていきたいと思えます。

番外章くメイド編上く

私は、さすらいの旅人メイド。

名前はまだ無い。

名前はご主人様に付けて頂くのだ。

この時は私は普通のメイドとして一生を過ごすつもりでいました。
あの方達に会うまでは……。

私は、数年間様々なメイドとしてのノウハウを学び、見習いメイドとして大きなお屋敷に数年間修行し、更にメイドとして必要な様々な技を学ぶためこの世界をめぐる旅を続けておりました。

その旅はメイドとしてご主人様を守る為の技や、侵入者を屋敷に入れないための様々なトラップの仕掛け方や退治方法を手に入れました。

さらに、シノビと呼ばれる者から足の運びから移動手段や気配の消し方を学び、忍術と呼ばれる魔法に似た技も少し学びました。
さらに旅を続け様々な図書館を廻り知識を手に入れて、メイドになる為の様々な技術を身に付けた私は今度は主を探す旅を始めたのです。

色々な国をめぐり、様々な屋敷を訪ねたが何故か断られる毎日だったのです。

ですがメイド服と様々な武器を装備したこの姿ではやはり主は怯えてしまうのでしょうか……。

私は断られ続ける毎日に、メイドとしての自信を失いつつありました。

だが、その時2人の男女が私を探しているという情報が私の耳に入ったのです。

私はさすらいの旅人メイド、なぜ私の事を知っているのかは分からなかったが、まあ私を探しているのなら出向いてやった方が良いでしょうと思ったのです。

私は、探している2人の男女に会うため、ギルドに向かい自分がここに居る事を自由に書き込める掲示板に記入しギルド内で過ごしました。

2人は急いでやって来ました。

何故か2人は常に言い争いをしておりました、私はらちが明かないと2人に近付き私から自己紹介を始めたのです。

「貴方様達が私をお探していたのですか？」

「え？ あ！ はいそうです、すみませんこちらからご挨拶をしなければいけないのに！」

2人は兄妹の様に見えた、兄妹は私を探している理由と依頼を持にかけていきた。

「私をメイド長にですか・・・？」

「はい、ぜひ我がギルドの専属メイドになって頂けないでしょうか！」

私は困惑しました、今までメイドとして全く興味を示してくれなかった私を今、わざわざ遠いデリルと言う国から訪ねてきたという事なのです。

一度もそんな国には行っていないのになぜ私の事を知ったのでしょうか？

でも、私をここまで探してきたのだ、一度行ってみるのも良いでしょうと思ったのです。

「はい、では一度私の主となるかもしれない人を見せて頂きましょう」

「ありがとうございます！では過ぎに準備しますね！」

妹と思われる女の子が私にお礼を言って急いで走り出して行きました。

それからは、馬で移動して、2人は毎日、飽きないのか常に口喧嘩が絶えませんでした。

最初はいつもうるさい兄妹だなと思っていたのだけど、数日間この兄妹と過ごすうちにこれはこれで仲が良いと言う事なのだろうと思うようになったのです。

兄妹の口喧嘩が心地良い音楽に聞こえる頃デリルではなく、レイドと言う国に到着しました。

レイドは奴隷を売っている国として有名で、私も知っているような国でした。

ですが私はメイドとは対照的な従者の給与もなければ意思や権利も持つ事の許されない奴隷制度そのものが気に入っておりませんでした。

「私の主となるものは、奴隷を雇っているのですか？」

私は、奴隷と一緒に仕事をしたくは無かったし、奴隷を雇っている者を主として認めたくはありませんでした。

「いえ、奴隷は雇ってはいませんよ、私達のギルドは奴隷制度を一切認めておりません」

「ではなぜ、この国にギルドを構えているのですか？ここは奴隷会社のある国としてとても有名な所ではありませんか」

私の疑問は的を射ているはずでした、この国は誰でも知っている奴隷の国、その国で奴隷を認めていないなんて、おかしいのではない

でしょうか？

「結構時間が掛かってしまったし、もう先輩たちは終わらせてくれただろう」

「そうね、メイド長さん、その疑問は私達のギルドで答えますよ」

兄妹は、レイドに着くと国の騎士の服装をした少年に話を聞いてその少年と移動した。

少年に案内された私は目を疑いました。

「遂に着きました、私も始めてみますが、ここが私達のギルドの拠点です」

女の子はどう見てもギルドの拠点には見えない大きな工場を見て私に言った。

「ここに私の勤め先になるのですか？」

「はい、まだ改装工事や整理をしなければなりませんが、ここが貴方の勤め先のお屋敷になります」

「大きなお屋敷ですね・・・お掃除し甲斐がありそうです・・・」

正直、戸惑いでどうすれば良いかわからない私は変な感想を言う事しか出来ませんでした。

「さて、そんなゆっくりしてる場合ではないぞ、妹よ、早く行こうではないか」

「な、いきなり走り出すんじゃないわよ！馬鹿兄」

一気に走りだす兄妹、早く久しぶりに会える私の主となる者に会いたいのでしよう。

この兄妹に慕われている者なら私のご主人様として認めても良いのではないかと思ひ、兄妹の方向に走り出しました。

「はあはあ、すみません遅れました・・・」

「全くだ、私が居ながらこんなにも時間が掛かるとは」

「うるさいわ！馬鹿兄、もう喋るな、あんたのせいでこんなにも時間が掛かったんでしょ」

工場に近いお屋敷に入るとすぐに口喧嘩を始める兄妹。

私は、未来のご主人様が早く気になったので兄妹の間に立って言葉を遮る。

「まあお二人ともそれ位にしてください、このままだと私のご主人様が分からずじまいです」

「そ、そうよね、こんな奴を相手にしてる暇は無いわ、先輩達遅れてすみませんでした！何とかメイド長を連れて帰る事が出来ました！」

「いえ、私はただの旅人メイドですわ、メイド長などとても・・・」

こうして私は主となる者に会うことになったのです。

番外章「メイド編上」(後書き)

メイドさんの話ですが、個性が生かせてないです・・・
皆さんはどうやって個性を生み出しているのでしょうか？

というか、女性の気持ちなんて全く分からない作者は難しすぎるな問題です。

番外章（メイド編下）

「私はさすらいの旅人メイドです、名前はまだありません、主となるものに付けて貰いたいと思っております」

「はい、俺達はある理由であなたの事を知っております、貴方を呼んだのは俺です」

3人の中の大きく無い方の男が私に話しけてきました。

「自己紹介が先ですね、私は黒野迅です、そこに居る大きな男は田中忠則、その隣の女性が宮本あかりです、一応、私達が貴方の主になりますが、ギルドマスターの忠則がここの主だと思ってくださって結構です」

「そうですね、この大きな方が、ギルドマスターですね」

その大きな男は私の体重以上の重さがあるだろう大きな大剣を軽々背負っている、相当な手誰なのでしょう。

だが、私はまだこの3人を主に決めたわけではありません、ある疑問を解決しない事には私は決心がつかないでしょう。

「ご主人様になるかもしれない方に申し訳ないのですが質問を一つしてよろしいですか？」

「ああ、多分何故この国に私達がギルドを設けたということでしょうか」

「はい、近いですね、ここは奴隷の国だったはずですが、さすが私が佐藤兄妹の話を聞く限り、このギルドは奴隷を全く許容しないと言っていました、これは矛盾にはなりませんか？」

この質問に私は納得のいく答えが返ってこなければ残念ながら3人

を主と言う事は認められないだろうと考えました、だがそんな迷いは直に打ち破られたのです。

「そうですね、その疑問は正解です、奴隷制度を許容しない私達のギルドがこの国にあるのは不自然ですよ、ですが、それはここ最近で覆されました、ここは奴隷の国では無くなったのです」

「奴隷の国では無いとは？」

「はい、まずこの私達のギルドの拠点となる場所は、つい先日まで奴隷会社でした」

「!!!!」

今、この男はなんと言った？ 奴隷会社だった？ この国は奴隷会社がある事によって機能していた国ではなかったのでは？

「驚くのは無理が無いでしょう、私達は貴方を佐藤兄妹に探して貰っている間に様々な政策をこの国で行い、奴隷会社に頼ることなくこの国を機能させることを成功させました」

「私を探している間に？」

「はい、約4カ月の間に政策を開始して、更に奴隷会社を摘発する事を成功させたのです」

「では、もうここは奴隷を商売にする国ではありません、さらに言えば奴隷を受け付けない国になったと言えるでしょう」

私は想像以上の答えに驚きを隠せませんでした、何処の国にだって奴隷制度を快く思わない人間はいましたが、それを言葉にするのも何も行動を起こすという事をした人は私が知る限り誰一人しりませんが、この男はそれを有言実行したのでした、私はこの男性と、このギルドに興味を持ち始めていた。

「この話を聞いてもうお分かりでしょうが、私達のギルドはまだ発

展途上で拠点もこの有り様です、貴方がお仕えする様な場所にはなっております、ですが、この拠点を出来るだけ早く改装工事を終えて、この場所をギルドの拠点と騎士達の寢床として利用したいと思っております、そのためには貴方の力が必要なのです」

男性は一気に説明をして、私にお願いをしたのです。

「私は、この拠点が本格的に機能するまでの間何をすればいいのでしょうか？」

「貴方がこのギルドに仕えて頂けるのでしたら、まずして頂きたい事があります、まずこのギルドが機能するまでの間、この国の城のメイドとして仕えて頂きたいのです、そして、私達が引き取った全ての奴隷にメイドとしての素質があるかの選別、そして教育をしてほしいのです」

その男は、私をどれだけ評価しているのでしょうか、この話を聞く限り、私をメイドという者として以上の期待をしているのではないのでしょうか、それにこの国の城にまで通じていたと言う言葉まであったのです、私は既にこのギルドに引き付けられていました、このギルドがどのようにこの国を発展させるのでしょうか、更に私の主となるものがどれだけの力を持っているのでしょうか。

私が、そんな事を考えていると男が言葉を続けていました。

「どうでしょう、私達のギルドにメイドとして仕えてはくたさらないでしょうか？」

そしてその言葉を聞いて私は決心し、その問いに答えました。

「では、ギルドマスターの忠則様、私に名前を付けて頂けないでしょうか？」

「おう、もう既にあんたの名前は決まっているぜ、メイドと言えばマリアだ！」

「マリアですか、良い名前ですではご主人様これから私はこの国のメイドとして少しの間使えさせていただきます」

そして、私はこのギルドのメイド長としてこれから起きる様々な出来事を目撃することになるのです。

番外章くメイド編下く（後書き）

もう少しの間だけ番外編が続きます。

番外章くレイラ編上く（前書き）

もう少しだけ番外章を続けさせていただくことになりました。

少し今日は投稿時間が遅れてしまいましたが、何とか毎日投稿は続けます。

第二章のイメージは完全につかめましたので後は作者の文章力がそれを表現できるかだけです。

読者の皆様、これからよろしく願います。

番外章くレイラ編上く

私は、この国、レイドの王クレマンの娘レイラと申します。

何不自由なく暮らしてはいましたが、あまりいい思い出は無く、幼少期はずっと城の中で暮らしていましたのです。

私が物心ついた時には奴隷の国としてこの国は有名になっていました。

当時私は奴隷という意味を全く知りませんでした。

でも、成長するにつれ奴隷という意味やこの国の情勢、様々な事が分かる様になって、私はこんな醜い国に生まれてしまったのかと絶望する時もあったのです。

私は両親に何度も何故この国は奴隷を扱っているのか質問していました。

両親はその問いにはいつも苦しそうな顔をしてハッキリとした答えは返ってくる事は無かった事を覚えております。

王として父様は何度か奴隷会社の社長と様々な交渉を重ねていたのは私が政治や情勢について勉強を始めた時に知りました。

いつも真剣に相手に訴えていた父様をいつも巧みな言葉使いで苦しめるその社長がとても嫌いだったのです。

その社長はいつも静かな笑みを浮かべていた、その表情は私に不快感しか与えていなかったし、父様に対する巧みに使う言葉や声は耳を押さえたくくなりました。

私が14歳の頃、父様は私の為に10年以上もかけて会社と交渉を続けている事を知ったのです。

何度も交渉をし、何度も失敗し疲れを見せる父様を見ていた私は母様と一緒に、もうこれ以上無理な交渉に疲れ切っていた父様を頑張

らせたくなくて、奴隷会社との交渉をやめさせたのです。

父様は、最後の交渉で何とか曖昧だった向上発展の規定を正確に決め、それ以上の国への侵略を止めることに成功し、疲れきった顔に少しの安堵を見せていました。

それからの私は、この国は奴隷会社によってどれだけの影響があるのかを様々視点から調べることにしたのです。

国の姫としての視点から、国民の視点、貴族の視点、時には奴隷会社に視察しその視点からも調べました。

私は様々な事を知りました、この私の住んでいる国は奴隷会社によって成り立っている事、他国に奴隷の国として知られている事、奴隷がどのように売買されているかなど、知れば知るほど気分が悪くなっていたのでした。

そして数年がたったある日、私は奴隷会社の様々な違法性を調べようと独自に奴隷会社を調べていた時、奴隷になる筈の大量の人間が輸送中に奪われた話を聞いた、その数は約400人、そんな人数を開放して隣国のデリルで難民だったものを更生させたという事でした。

私はその時、奴隷を快く思っていない人がその者達を助けたのだと思ひ、助かった人達への安堵と奴隷会社による損害でこの国はどれだけの被害が出るのかと言う不安があったのです。

その不安で、私がこの国にどれだけ奴隷会社が国に影響を及ぼすかわかっていた事に再確認にして、気分が悪くなってしまったのでした。

結局被害による影響は最小で収まり、奴隷会社はいつものように機能している毎日が続いていたのです。

それから半年がたった後、この国にギルド新設要請が届きました。

この国は、ギルドが一つありませんでした。

私の所にもその情報が入り、こんな奴隷商売が主な国に何故ギルドを新設するのか疑問だったので、一度詳細を調べる事にしましたのです。新設者のギルドマスターは田中忠則。

忠則と言う男の事を調べてみるとデリルの大会で優勝した男性でした、出身国や何処の民族か全く分からず謎ばかりでした。

副ギルドマスターの黒野迅と言う男も忠則と言う男性も同様、全く情報がつかめませんでした。

そして、私は半年前の大会と、その後に起きた奴隷解放事件に何故か関連性があるのではと思わずには居られませんでした。

私は、謎の多いギルドに一般人に変装し忍んで視察を開始したのです。

そこで見たのは別の世界でした。

そのギルドは私の想像とは違ったのです。

私はギルドというものは自分の戦歴などを豪語するものや、様々な武器やアイテムを自慢するものや、一人一人独特な雰囲気を持った怖いイメージを持っていました。

でもそれを完全に裏切ってくれました。

まず目に入ったのが私より少し背の低い少年と少女達でした。

最初は来た場所を間違えてしまったと思いました。

ですが、受付には依頼受付というギルドの立て札や掲示板に表示されている依頼内容の広告を見つけギルドに居る事を確認出たのです。

少年少女達はギルドメンバーでした。

少し大きめな様々な防具や武器を装備して、グループを形成し作戦や何かの会話をしていたり、次の依頼は何にするかを考えていたりしていました。

一つ私の知っている国民と違う事はその目でした。

その目は輝いていました、ですが子供独特の好奇心から出る輝きだけとは違ったのです。

その目は好奇心だけでなく、そこには強い意志や決意という思いが込められていたのです。

この時、私は初めて見たその者達の目で何故か全身が震えあがったのです。

私の知っている国民は、いつも生きることには必死でした。

国民は毎日を必死に生きてはいましたが希望など無く、目は輝いてはいませんでした。

私は思いました、何故こんなに真剣にそして希望を持って生きていられるのだろうか。

それは私が興味を持たずにはいられない場所になっていました。

このギルドはこの国を変えてくれるのではないか、そんな思いすら巡って来たのでした。

私はその後、何度もこのギルドを訪れるようになりました。

そして、私は知ることになったのです。

これからこの国が変わっていく歴史を垣間見ることになったのです。

番外章くレイラ編上く（後書き）

国のお姫様視点の物語でございます。

女性視点は難しいのです。

女性の気持ちは全く分からない作者ですが、どうか見捨てないでください。

番外章〜レイラ編中〜（前書き）

文字数が多くなったため上中下の3構成にさせて頂きました。
今、全力で第二章を進めております。

番外章くレイラ編中く

私はその日も奴隷会社を見向きもしないでギルドに向かったのです。

ギルドの周辺の国民が活気づいて来ているのが目に見えて分かりました。

このギルドはこの国を変えてくれるのではないかという事まで考えていました。

でも、それ位このギルドには魅力や、温かさがあり、私をとっても安心させてくれました。

この1ヶ月、十数回もここを訪れて分かった事があります。

このギルドは基本的にこの国の警備や見周りなど様々な治安維持をほぼ無償に近い形で行っているのです。

そのため、この街付近には怪しい人物や不審者などを見かける事が無くなって、国民に安心が生まれていたのです。

そして、協力者と思われるギルドのメンバーと同様に少女達が様々な食材で新しい食べ物を創作しては街で売っていたのです。

商売の許可も得ているこのギルドの商店は口伝えで直に人気を呼んでいました。

そしてその創作料理や創作菓子はこの国の飲食店に国の名物料理として売り出さないと様々な提案を行っておりました。

飲食店は少女達の提案に乗って、すぐにレシピを公開してこの国で採れる農作物を利用した創作料理を名物として発表して、いつの間にかこの国に訪れるようになった商人に興味を持たせる事に成功させていたのです。

ギルドを新設してたった1ヶ月の間で、既にこの街の顔になっていたのです。

私は何故ここまでこの国を良くしようとしているのか分かりませんでした。

それを調べるためにいつものようにギルドの中に入って観察を続けることにしました。

その日のギルドは少し雰囲気が変わりました。

いつもより活気があって、そわそわしている姿があったのです。

私は、受付にいつもいる平田という男に話しかけました。

「今日はいつもと少し様子が違いますか？」

「あ、この頃いつも来てくださっている方ですね、はい、今日は久しぶりに私達の恩人が返ってくるのです」

「恩人？」

「はい、私達のギルドマスター達です」

私が平田さんと会話をした時ちょうど扉が開きました。

すると、ギルド内にいた数人の少年少女達が歓声で迎え入れたのです。

そして、受付の平田もちよっと失礼と私に声をかけその者達に向かつて行きました。

「お帰りなさい、お疲れ様です」

平田は帰って来た3人に深々とお辞儀をして3人を迎え入れていました。

周りの者達も迎え入れる言葉で3人を歓迎していたのです。

そしてその3人は皆の歓迎に笑顔で答えていました。

3人は、服装がボロボロで身体に疲労が見えましたが本当の笑みを皆に浮かべていました。

そして、その中の大きな男が大きく叫んだのです。

「我がギルドの皆、聞いてくれ、今日俺達はギルドランクA Aの採集依頼を成功させた！報酬も手に入ったこれで今日は宴会をするぞ！」

待ってましたと少年達は男の声に負けない声で歓声を上げていました。

それからは何処からか料理や果物、飲み物が次から次へと運ばれてきていました、ギルドの者達や街の者まで集まったの大宴会、それは私が初めて見た国民の最高の笑顔でした。

3人はギルドの皆に囲まれて様々な冒険の話や、私の知らない言葉や内容を子供たちに話をしたり、少年達と大食い競争をしていたり、魔法について語っていたりしていました。

その姿は私が見てみたかった国民の笑顔だったのです。

私はこの時ギルドが本当に好きになってしまったのでした。

それから、何度もギルドに訪れては、少年や少女達の話聞いた、時には話したりして身分や顔は隠していましたがギルドに馴染んでいきました。

そして2ヵ月が経った時です、私がギルドに行くのが楽しくて奴隷会社の事を忘れていた頃、城に一人の男性を招待する話が持ち上がっていました。

「お父様、誰を招き入れるのですか？」

私は、久しぶりの貴族と奴隷会社の幹部社員以外の訪問に私は興味を持ってお父様に質問したのでした。

何気なく聞いた私にお父様の答えは驚くものでした。

「ああ3ヶ月位前に建設されたギルドが、奴隷会社の妨害行為を行

っているらしい、何を企んでいるかわからんが、上手く利用すればこの国に良い未来が待っているかもしれないのだ、そのためには一度ギルドの人間と話をしないといけないと思っただけ」

私は知らなかったのです、ギルドの温かさに埋もれて楽しい時間に身を任せている間、その裏ではこの国の一番の問題である奴隷会社に喧嘩を売っていた事を全く分らなかったのです。

私は今の現状がどれ位の影響があるのか全く分からずお父様に聞くしかなかった。

「お父様、それはどれくらいの被害なのでしょう・・・」

「レイラ、お前はそのギルドに行っていないなかったのか？本当は私がお前にギルドの状況を聞きたかったのだが、まあ良い、損害のレベルは会社の売り上げを4割も低下させているのだ」

「4割ですか！」

お父様の言葉に私は絶句した、あのギルドは少年少女達と数人の若い大人しか居ない新人の集まりの様なギルドだと思っていた私は、ギルドの能力や政治に影響を及ぼすほどの知略があったとは思っていませんでした。

私はその時、初めてギルドの所属している者達の能力や影響力に恐怖を覚えたのです。

そしてその日私はギルド訪問を取りやめ、お父様とギルドの代表者との会話を聞くことにしたのでした。

番外章くレイラ編中く（後書き）

この頃、しっかり確認しておりません。

誤字脱字がありましたら報告ください、急いで修正させていただきます。

番外章くレイラ編下く（前書き）

長い間番外章を引っ張ってしまつて申し訳ございません。
これで最後になります。

今、頑張つて第二章を執筆中ですが、なかなか進みません・・・
ですが何とか毎日投稿は続けたいと思つておりますので、読者の皆様
お付き合いをお願いいたします。

番外章くレイラ編下く

私は、いつも嫌いな社長や社員が来るときに隠れていた、柱の陰で私側からしか見えない場所でお父様を見ていました。

お父様はいつものように王の椅子に座り、お父様が呼んだギルドの一人を待っていました。

その男性は直にやって来ました。

時間より少し早めにやってきた男性は大きなギルドマスターでは無く、魔法使いらしいローブを身にまとった男性でした。

「お初目にかかります、副ギルドマスターの黒野と申します」

その男性は前、一度だけギルドで会ったことのある3人組の一人だったのです。

私は、最初からあの大きな男性が来るとは思っていなかったのですが、驚きはしなかったのですが、問題はその後でした。

黒野という男はここにギルドを作った理由を明かしたのです。最初からこの国の奴隷会社を潰すつもりだったのです。

そのために我が国の王に会うため、間接的に奴隷会社を攻撃し国に認識させていたと言う事でした。

そして黒野という男性は、国直属の騎士になりたいと要求し、騎士として国の問題になっている奴隷会社を殲滅すると言ったのです。騎士としてなら、ある程度、国の為として独自の考えで動く事が出来るのです。

それなら、国が奴隷会社と決めた条約違反にもならず、合法的に殲滅する事が出来るのでした。

私はお父様と黒野という男性の2人の会話を驚きながらも静かに聞いておりました。

お父様は、1ヶ月後に国の目に見える繁栄を条件として今回の対談は終わりました。

お父様は、半信半疑で条件を呑んでおりましたが、私は、それが可能な事を分かっておりました。

黒野という男性は全て計画通りに進んでいるのだろうか、ギルド結成から半年も経たずにお父様との対談をするほどまでに成長し、更に後1ヶ月で騎士にまでなろうとしていたのです。

私は、黒野という男性の考えが全く分かりませんでした。

奴隷会社の殲滅は私やお父様、更には国民の願いでもありました、このような形で無くなるのなら願っても無い事です、何が目的か分からないあの男性の事を考えると不安が少し残ったのです。

お父様との対談から数日後、ギルドに行くと様々な事が変わっていました。

まず、いつも不在だったギルドマスターの忠則、副ギルドマスターのあかり、黒野の3名がギルドで様々な作業に追われていました。

ギルドマスターは、数十人の少年戦士達を集め、警備、警護、などの指示を行い、国の治安を守る為に説明、行動を起こしていました。副ギルドマスターの女性、あかりは、ギルドに入る女性メンバーを集め、売り子や調理担当、レシピの作成、様々な国の発展になる私も始めてみる様々な料理を創作し、国の名物として売る計画を実行していました。

もう一人の副ギルドマスター黒野は、何か良く分からない道具を作っていたり、この国とその周りの地図を机いっぱい広げ、受付の平田と数人で様々な議論を交わし、何かを決めていたり、他国から来た商人をギルドに呼び様々な交渉を行っておりました。

その様子を見て、私は確信しました、この人達はこの国を本当に良くしようと思っているのだと、未だに何故ここまでしてくれているのか分かりませんが不安は消えていました。

1ヶ月後、お父様は驚きを隠しきれていませんでした。

たった1ヶ月で国の活気が変わり、盗難被害や傷害事件の報告が1割以下に減ったりしたのです。

直にお父様はまた黒野さん呼びました。

そしてお父様は、黒野さんを騎士として歓迎したのでした。

その時、私の疑問を代わりにお父様が聞いてくれました。

「なぜこの国を助けようとする、あれは一筋縄ではいかないのだぞ」

「いえ、最初は国を助けるつもりはありませんでしたよ、私達は、あれを潰すことだけを考えていましたから、その結果この国が助かるだけなのです」

「なぜそこまで執着するのじゃ？」

黒野さんは笑っていましたが私は初めてこのギルドに恐怖を覚えたのです。

「私の仲間を奴隷にしようと企てたのです、それは私達を怒らせるのに十分な行為です」

その笑顔には、不の感情が渦巻いていました。

そして、奴隷会社のあり方一つでこの国すら潰されてしまう可能性があった事に私は身体が震えあがったのです。

「大丈夫なのかしらお父様」

私は、黒野さんの笑顔に戸惑い、黒野さんが居なくなっただけお父様

にそう言ったのです。

「ああ、レイラか、あの男はやってくれるだろう、だが、不安なのはこの後だろう、この国の味方になってくれるのなら大きな利益だが・・・」

お父様は私の言葉に少し勘違いをして答えていた。

「でも、私はそんな悪い人には見えなかったわよ、あの社長より100倍ましだわ」

私は、何故か黒野さんの肩を持っていたのでした。

そして、社長の事を思い出して気分が悪くなり、自室に戻ったのです。

そして、国がギルドを騎士として認め、たった数日後に、この国が望んでいた、奴隷会社の崩壊が実現したのでした。

奴隷会社の崩壊は、国民を湧かせました、一気に新しく出来た騎士を称賛し、国の生きる象徴になったのです、奴隷会社で起こった様々な問題も速やかに解決に向け騎士として動き出していました。

その動きは既に準備されていた様な行動力で事が大きくなる前に次々と処理して言ったのです。

私は、未だに顔と姿と身分を隠していましたがギルドの何人かと仲良くなっておりました。

ですが、いつも忙しいギルドマスター達の3人とは挨拶すら交わした事がありませんでした、私は同年代だと思われるあの3人組と話したい、仲良くなりたいという思いが強くなっておりました。

あの3人は、とても仲間思いで、絆を大切にしていました。

今思うと、珍しくは無いですが、全員が髪と目が黒く、同じ民族なのだと思ったのです。

私は、仲間の為に立ちあがり、奴隷になる者達を助け、更にそのような被害をもう起させない為にここまでやる事が出来る力に、私とは違う何かを持っているのではないかと思ったのです。

そして更に数日が経ち、城で歓迎パーティーが開かれることになりました。

いつも苦手な人達の集まり好きになれなかったパーティーですが、今回だけは違いました。

騎士としてマントを羽織った見知った少年少女達がいて私を楽しくさせました。

お父様の簡単に言葉にパーティーが初まったのです。

様々な料理が運ばれ、音楽が響き、少年達の笑い声でいつもと違うパーティーでした。

私は、ここで、知り合いの少年少女に招待を明かして、驚きながらも私を快く受け入れ、私を歓迎してくれたのです。

受付の平田さんとも会話をし、苦手な貴族の人達と離れ、楽しい時間を過ごしていました。

そして、久しぶりに沢山の会話をし、沢山笑い、少し疲れてしまった私は裏庭に出て少し風に当ろうと思ったのでした。

・・・そこには先客がいました。

最初は蹲っているので誰かわかりませんでした。

気分が悪くなったのかと思い近づくと、聞いた事のある声でした。

その声は弱々しく、嗚咽混じりに呟くのでした。

月の照らされた噴水で自分の弱さを嘆くその男性は、ただの人間で

した。

私達を救った英雄は、ただの人間でした、特別な力など無く、ただ仲間の為に頑張ってきた人間でした。

私は胸が熱くなりました、仲間の為に奴隷商人と戦い、ギルドを作り奴隷会社に立ち向かいお父様とも怯まず対談し、騎士として勝ち続けたこの男性は私と全く変わらない、自分の弱さを隠し、強くあり続けようとする普通の人間だったのです。

私は、勝手に話しかけていました。

男性は驚きを隠せず涙を隠すために噴水に顔を埋め、顔を洗っていました。

ただ話を続けたかった私は突然現れた私に混乱している男性に静かに話しかけていました。

その男性は混乱して逃げ出そうとしていました。

私は反射的に男性の手を掴みました、初めてお父様以外の手を私から掴んだのです。

「ねえ、私は貴方と話をしたいの、貴方と言う人間を知りたいの」

それが、私の本当の物語の始まりでした。

番外章〜レイラ編下〜（後書き）

多分、分かって頂いたと思いますが、一生の最終話の黒野君の相手でしたという話です。

予想以上に長くなってしまいましたがこれで番外章は終わります。第二章もお付き合いよろしくお願いいたします。

それと、レイラさんの口調を少し修正させていただきました。執筆中イメージが変わってしまい性格の修正と共に口調も修正しました。

大変申し訳ございません。

第二章 01話（前書き）

第二章が始まりました。

そして、良く分からなかった章管理も何とか使用出来ました。

最初の方は、ゆっくりと展開していきたいと思います。

久しぶりの主人公視点での始まりです。

・・・一応言っておきますが主人公は黒野君です。

第二章 01話

俺は朝、ベッドから跳び起きた。

そしてとても焦っていた、目が覚めてすぐに状況を整理する事が出来なかった。

別にお酒を飲み過ぎて昨日の記憶が無いとか、見知らぬ女性が隣で寝ているわけでもなかったがそれと同じくらいの動揺で心臓の鼓動がおかしかった。

まあ理由は分かっていた。

昨日、裏庭で起きた出来事が理由だ。

名前も、何処の娘かもわからない女性に話しかけられ、大学生にもなって動揺し、さらに一目惚れだ、完全にどうしようもない。

あれで、俺の苦悩が一気に吹き飛んでしまった。

別に問題が解決したわけではなかったし、解決に向けて光が差ししてきた訳でも無い。

だけど、自然と苦痛が和らいでしまった。

俺は、自分が強さを求めて焦っていたのだ。

もう少し冷静に考え少しずつ答えを探せばいいと思ったのだ。

俺は、ベッドから抜け出し、支度をして新しく出来た自室から出た。

ここは、俺達のギルド兼騎士団の寢床だ。

未だに良く分からない道具や、知らない書類など、檻の様な部屋が幾つかあったが、そこは各自自分でリフォームすると言う事で解決した。

いまは、檻を外し、木材で壁とドアを作ったり、いろいろな書類や道具を処分したり様々な作業が騎士たちで行われていた。

俺とあかりと忠則は、幹部の部屋を貰ったため、そのまま使う事が出来た。

黒野は昔社長が使っていた部屋を使っていた。

社長の使用していた物は、微妙に悪趣味で、無駄に金をかけていた物で全て売って、新しい家具を買い直し、残った金は工場の改築工事に使った。

お金の管理は全て受付を任せている平田にやってもらっている。

平田は、お金の管理、ギルドの事務、騎士たちの統制を任せていた。お金は毎週自分が確認する事にはしていたが、ギルドと騎士たちの事は全て任せているので、本当にやってくれていた。

今、平田が居なくなったらこのギルドは直に崩壊の危機に直面するだろう。

俺は平田に挨拶し、これからの事を話し始める。

「おはよう、いつも早いね」

「黒野君、おはようございます、毎日依頼は届きますからね、時間はいくらあっても足りませんよ」

「もうすぐ最強のメイドさんがギルドの受付と、業務管理の手伝いをしてくれる予定だ、もう少しの間、頑張ってください」

「マリアさんですね、小説だとレリアンという名前でしたが、なんで変えたのでしょうか？」

「まあそれは忠則が決めたので何とも・・・」

平田はあの漫画とアニメを知らなかったのか。

まあそんな理由で付けられたなんて平田にもマリアにも言わないほうが良いだろう。

そんな事を思いながら黒野は平田と会話を続ける。

「今の所、改装工事はどれくらい進んでいる？」

「日が昇ってから沈むまでの間休まず働いてくれるので予想以上の進み具合ですよ、この国の人達は私達をととても歓迎してくれております」

「そうか、この国に拠点を置くのは不安だったが、正解だったな」

「はい、今では皆、街の人達と仲良くやっておりますよ」

毎日順番国の警備をして安全を守る騎士たちは今では見周りに行くたびに挨拶や声をかけられるようになったらしい、見周りを楽しみにしている者も出てきたようだ。

俺は、様々な事務作業と計画で見周りをしていないので忠則の話を聞いているだけだった。

忠則はこの国の様々な奴隷会社に付いていた盗賊や、暴力団を沢山潰して行ったらしい。

忠則はデリルでの優勝した事もあり、ギルドマスターとしてとても有名になっていた。

あかりも、この国では美人の白魔道士として有名になり、ギルドの一部に診療所を作り医者として活躍するようになった。

今の悩みは恋の病と言いよってくる馬鹿な男性の対処だそうだ。

「この世界に来て、初めて平和を実感したな」

「そうですね、もうすぐこの世界に来て1年が経ちますが、色々ありました」

「俺は生きてるだけで奇跡に近い事もしたので、充実しすぎた1年間ですよ」

特に忠則とあかりで修行の3ヶ月間は苦しかった。

忠則の強さに着いて行くのが精いっぱいだった俺は毎日傷だらけで、あかりが居なかったら1ヶ月で死んでいたところだった。

そんな地獄の半年を遂げて、自分の居場所を手に入れた事は本当にうれしい事だった。

「もう、この世界で生きていく事は可能になりましたが、これからどうでしょう」

「そうだな、まず、このギルドの改装工事を終わらせギルドらしい

形にし、他の召喚された者達を呼んでみるのも良いかもしれない多分この世界に訪れた者は5000人位だったはずだ、様々な国を巡っているはずだ、出来ればその国の情報や、知識が欲しい、それが日本に帰れる方法が見つかるかもしれない」

「そうですね、この1年間生きることには必死だった私達は日本に帰る方法を探すことすれ出来ませんでした、もうそろそろそのためにも動かなければいけないですね」

そう俺達は元の世界に戻る方法探さなければならぬ、小説の中では説明されていない内容を自分たちで探しだし、それを実行しなければいけないのだ。

まだ、俺達は第一歩を踏み出したに過ぎない。

俺は気合を入れ直し、これからの目標を立てようとした。その時、一人の訪問者が現れた。

「黒野さん、レイラさんがお見えになりました！」

騎士の一人が俺を呼んでいた。

「・・・レイラって誰だ？」

「え？レイラさんですよ、この国のお姫様ですよ」

「何故、俺を呼んでいるんだ？一度も会った事は無いはずなのだが・・・」

「まあお姫様がお見えになっているのですから黒野さん」

「そうだな、でも何故忠則でなく俺なのだろう・・・」

そしてギルドの応接間になる所に俺は行くと、固まった。目の前のレイラと名乗る女性はちょうど昨日見たあの女性だったのだ。

「おはようございます、黒野さん、今日からこの騎士団の観察官としてこのギルドにお邪魔させていただくレイラと申します、これからよろしく願います」

「・・・・あ、はい、願います」

俺は、少しでも日本に戻るのが遅くなるなと思ったのだった。

第二章 01話（後書き）

マリアと言う名前のネタですが一応説明させていただきます。

週刊少年サンデーに掲載されている漫画「ハヤテのごとく！」に登場するメイドさんの名前から取っております。

ですが、作者はこの漫画を1巻しか読んでいないと言う事実……。

恋愛物の展開ですが、作者は表現できるかどうか……
そして、強くなる様な感じの無い主人公。

作者もこれからの展開に不安ですが執筆は続いております。
読者様も温かく見守ってやってください。

よろしくお願いします。

第二章 02話（前書き）

二章に突入しましたが、書き貯めが危ない・・・。
ですが、何とか頑張っていきます。

第二章 02話

「えっと、またお会いしましたね・・・」

「はい、着てしました」

俺は異世界に來た時の事より動揺していた。

今、俺は昨日初めて出会ったはずの女性と対談室で二人きりになっていた。

・・・なぜこうなったのだ？

昨日から俺は頭が混乱してばかりだった。

自分の弱さに挫けそうになったり、その弱さを女性に見られたり、更にその女性に一目ぼれしたり、その次の日にはその女性と2人きりだったり。

そしてその女性はこの国のお姫様でした。

俺にどうしろというのだ、この世界は。

金髪のポニーテールの少し背の低いこのお姫様は俺の心を揺さぶる笑顔を向け話しかける。

「どうしました？黒野さん」

「・・・あ！いや、昨日会った方がお姫様だったとは思いませんでしたので」

「そうでしょうか、城に私が居ても何も可笑しくはありませんよ？」

「ああそうですね、失礼しました」

「そんな、謝らなくても良いですよ」

くそ、これは異世界召喚時と同じくらい超展開過ぎる。

未だに落ち付けずに酷い会話になっているじゃないか。

この年になって女性と会話すらないなんて・・・

一度、業務モードになろう、そうしないとやっていけない。

俺は一度深呼吸をして、頭を切り替える。

「それで、国のお姫様がなぜこのギルドの観察官に？」

「お姫様なんて・・・レイラと呼び捨てで呼んでください」

「いえ、私達はこの国の騎士なのです、呼び捨てなんて出来ません」
「どうしてもですか・・・？」

止めてくれ女性の上目使いほど危険な物は無い・・・

俺を萌え殺す気かこのお姫様は。

お姫様は俺が呼び捨てにするまでその状態をやめない意思があった。
俺は決心し、名前を呼ぶ。

「では・・・レイラ、何故観察官に？」

俺は真っ赤になった顔を伏せ質問を続ける。

レイラは、笑顔になり、質問に答えた。

「私は、このギルドが新設された時から目を付けていたのです、変装し何度もギルドに訪れていたのですよ、もう数人と仲良くなっております」

「そうだったのですか、とても行動力のあるんですね」

「はい、私はお父様をお願いして、様々な事を決行しているのですよ」

レイラは予想以上に活発な娘なようだ、王も振り回しているのかと思った。

「では、今回も私達を監視しに来たのですか？」

「いえ、監視なんてしませんし、観察官というのは建前です」

「では、どう言う目的なのでしょう？」

「それは、昨日も言ったとおりです、貴方の事を知りたいんです！」
俺は何も返す事が出来なかった、多分顔がトマトとかリンゴのよう
になっていただろう。

レイラは俺の顔を見て自分の言った言葉に気がつく。

「あ、いや、すみません・・・えっとそういう意味じゃなくて、私
は・・・」

「あ、はい、えっと言いたい事は分かりました、でも言葉には気を
つけてくださいね」

「はい・・・」

お互い、微妙な空気が流れた所に良い感じに扉が開いた。

「お姫様が居るって聞いたんだが、一応俺も挨拶しておこうと思っ
てな」

ナイスタイミングだ！忠則、俺は心の声で叫び忠則を紹介した。

「こちら、この国のお姫様、レイラさんだ」

「初めましてになりますね、私はレイラと申します、どうぞレイラ
と呼んでください」

「おう、レイラな、よろしく」

忠則は普通に手を伸ばし握手を求める。

何て羨ましい事を簡単にしやがるんだこいつ、いや、俺がヘタレな
だけなのだが・・・

そんな事を思いながら俺は忠則に続き握手を求めた。

忠則の力を借りて握手をするレイラの手はとても小さく綺麗だった。
そして、握手を交わし、忠則が話し始めた。

「えっと、レイラが観察官なんだってな、なら部屋を決め無いといけないな、俺はこれから巡回に行かないといけないから黒野、幹部の部屋どっか片付けてやれよ」

「え、私の部屋ですか？」

「おう、結構この会社良い暮らししてる奴が居てな、お姫様でも悪くない暮らし出来る部屋が会ったはずだ」

「おい、忠則それは流石に・・・」

「いえ、黒野さんよろしくお願いします」

こうして俺達は国のお姫様レイラとギルドでの生活が始まった。

第二章 02話（後書き）

えっところ数話をのんびりした時間軸で進めていきたいと思っています。
ゆったりとした感じですが、飽きずに見てやってください。

感想評価、お待ちしております。

第二章 03話

レイラの部屋は、あかりの部屋の隣にした。

この日は荷物を持ってくると言っていてそこで別れた。

「やばい、全くこれからの事に着いて考えられない・・・」

俺は一人部屋に戻り呟いた。

なぜこんな急展開過ぎるんだ、何だよ、お姫様と一つ屋根の下で・・・

完全に動揺しまくっている、明日までにこの状況を打破しないといけない。

すると、ドアの向こう側からノックをする音が聞こえた。

「いいぞ、入ってくれ」

誰かも聞かずに部屋に招き入れる。

ドアが開くとあかりがテンション高めで俺に近付いてきた。

「ねえお姫様がこのギルドで生活するんだってね、これはラノベ的展開ね、佐藤兄君もテンション上がったよ」

「あかりもテンション上がったるな」

「あれ？黒野はなんかテンション低めだけど、どうしたの？」

「いや、何でもない・・・」

さすがにレイラに惚れていて何も考えられないなんて言えるわけが無い。

でも2人は無駄に感が良いのだ、気付かれるのも時間の問題かもしれない・・・

俺はこれ以上考えてはいけなと頭から無理やり振り切ろうと、適当に話を変える。

「そう言えば、テンションの高い佐藤兄妹の事だが・・・」

「テンションが高いのは兄だけよ？妹さんは兄を見ていつものように気持ち悪がっているわ、本当に仲が良いわよね」

「まあ色々言っているながら結構いつも一緒にいるしな、まあそれは良いんだが、今2人は何しているんだ？」

「うーん、この頃は、騎士ちゃん達と一緒に遊んだり、お城に居るメイドのマリアさんと色んな話していたり、特に役割もないし、色々やってるみたいよ」

「そうか・・・あの二人って一樣戦闘技術とかはあるんだよね？」

「ええあのメイドさん連れてくるだけの力はあるわね、結構メイドさんの居た国の道のりは険しいはずだったから、佐藤兄弟も私達と同じように頑張っていたはずよ」

「そうか、そうだよな・・・」

俺はレイラの事は全く解決していないが、これからについて少しずつ考えをまとめていく。

「ありがとう、あかり、ちょっと佐藤兄妹に会ってくる」

「そう、何かまた新しい事を考えたのね、どうせ佐藤兄妹も暇を持て余していただろうし、何かをさせた方が2人も喜ぶと思うわ」

そう言ってあかりは立ち上がり部屋を出てドアの場所で手を振って自分の部屋に戻っていった。

俺は、あかりが部屋に戻った後、佐藤兄妹の部屋に向かった。

2人の部屋は隣同士で、妹の咲子を先に呼んで兄の部屋に来るようお願いした。

「黒野さん・・・何故兄の部屋なんですか、この部屋は気持ち悪いです」

「気持ち悪いだと、俺はまだ、何もこの部屋に手を加えていないし、隣の部屋であるお前の部屋と全く変わらないではないか」

「あんたが居るだけで気持ち悪いのよ、馬鹿兄」

「な！・・・お前はいつ私にデレる時期が来るのだ、私はそろそろ耐えられないぞ」

「いつまで経ったってあんたになんかデレる訳無いわよ、馬鹿じゃない」

2人は部屋で出会うと直に口喧嘩を始める、あかりの言うとおり本当に仲の良い兄妹だと思う俺は、このままだと話が全く進まないと思ひ2人の口喧嘩を遮る。

「まあその辺にしてくれ、先に聞いて欲しい事があるんだ」

「そうね、こんな兄と話している時間なんてもったいないわ」

「まあ私もツンツンしてる妹もそろそろ見飽きた、黒野先輩、話してください」

兄妹は何とか俺の話を聞いてくれるようになってくれた。

また兄妹が喧嘩を始める前に俺は直に口を開いた。

「直にではないが、これから君達二人は少しの間様々な国を巡ってもらいたい」

「え？冒険をすればいいのでしょうか？」

「まあ簡単に言えばそう言う事だ、でも国に着いたら3つしてほしい事があるんだ」

俺は今日考えていた事を再確認し、言葉が続ける。

「1つ目は、その国に居る俺達と同じ召喚された日本人を探して、俺達の事を話してほしい、そして俺達に興味がある人に来てもらいたいんだ、出来れば人は選んで欲しい。2つ目は小説での英雄や、伝説を探してほしい、今の時期はまだ成長過程にある者達だからこの世界では有名になっていないから、コンタクトは取りやすい筈だ、何とか俺達の事を話して協力体制を取ってほしい、仲間や協力者は多い方が良い。3つ目は前の2つを遠距離でも報告できる手段を見つけて、定期的にこちらに報告をして欲しいんだ、出来ればこちらからも伝達出来る方法が良いんだ」

俺の話を静かに聞いていた兄妹は口を開いた。

「黒野さん、これはどれ位の期間行えばいいのでしょうか？」

「ああそれは私も気になる所だな」

「一応、半年間から1年間位の期間二人には行動してほしい」

俺がそう言うのと兄妹は少しの間考えていた。

「やはりやっと平和に暮らせるのにわざわざこの国を出るのは嫌か？」

俺が厳しい顔を見てそう聞くと直に口を開いた。

「いえ黒野さん、半年以上この兄と一緒に居るのが嫌なだけで全然良いですよ」

「はい、私も何お問題ありません、うるさい妹の戯言を聞き流すのが辛いですから」

「な、戯言ですって！あんたが私を怒らしているんでしょ」

「ほら、また声を荒げるではないか、もう少し私に対してお淑やか出来ないのか」

「……そうか、では2人共やってくれるか？」

俺は口喧嘩が収集がつかなくなる前に2人に確認する。

「はい、黒野さんのお願いを断るなんてする訳無いですよ」

「俺も問題は無いです、そして妹よ、では何故私の願いは断るんだ」

「うるさい馬鹿兄、あんたのお願いなんて聞く訳ないでしょ、変なコスプレ衣装を着させようとするし」

「な、コスプレではないぞ、この世界の女戦士の装備を着てみて欲しいと言っただけではないか」

「はあ？ あんな防御する面積の少ないのが装備な訳ないでしょ、この世界に約一年間居るけど、あんな装備している女性の戦士なんて見た事が無いわ」

「いや、まだこの世界に来てたった1年だ、そういう装備を着ている女性は居るはずだ」

「じゃあ言いなさいよ、馬鹿兄、あれはちゃんとした防具屋で買ったって言うの？」

「……黙秘権を行使する」

「なによそれ！！」

兄妹はいつものように言い争いが止まる見込みが無いと判断し、俺は2人に言葉を告げて部屋を出る。

「じゃあ、この任務よろしくな、出発準備と出発時期は2人に任せるよ」

2人が聞いているか分からないが、俺はそう言って兄妹の口喧嘩が響き渡る部屋から立ち去った。

「よし、これで一つ新たな情報が入ってくるはずだ」

俺は独り言と一緒に気合を入れた。
そして一番の難題に直面する。

「さて、明日からどうやってこの異世界で過ごせばいいのだろう」

この世界の問題を解決するために頑張ってはいるが、俺の問題は全く解決する見込みが無い俺だった・・・。

第二章 03話（後書き）

佐藤兄妹のキャラ、動きやすいです。

次回の番外編は佐藤兄妹を題材にしようかな・・・

今、これから起こる展開を軽めにしようか。シリアスにしようか考えております。

そして、書き貯めが全然溜まらない作者、毎日焦りながら全力で書きあげております。

週刊誌の漫画家さんはこんな気分なんだろうか何て思いながら頑張ってキーボードを打ち続けておりますので、これからこの小説を楽しみに待って頂けるとありがたいです。

感想、評価もお待ちしております。

第二章 04話（前書き）

いま、第二章のサブタイトルの通りにストーリーになるように絶賛執筆中です。

執筆に時間が掛かるのに、アルバイトと言う最も時間を取られる敵が作者を襲います、大学生にとってお金は死活問題ですが、毎日バイトと執筆しかしてない・・・

ちょっとこんな生活で良いのだろうかと思ってしまう作者です。

そして、大学が本格的に始まる前に書き貯めを沢山作っておかないと毎日投稿が出来ないと言う危機的状況だった事に今更気が付いた作者は自分の出来る限りの能力をフル活動して書き上げたいのですが、日に日に減っていくと言う現象に追い付いていきません・・・。

長々とまえがきを書きましたが、こんな作者の言葉は無視して、本文を読んじゃってください、この頃、前書きと後書きを書き過ぎではないかと思う作者でした。

第二章 04話

次の日の朝、忠則にベッドから布団ごと引っ張り起こされた。

「・・・痛いぞ、忠則」

「何、間拔けな格好してるんだ、早く起きろよな、黒野」

「これはお前が布団を引っ張ったからだろ、そして俺は男に起されたくない、せめてあかりにしてくれ」

「そんな事はどうでもいいさ、そんな格好でお姫様に会うつもりか」
「邪魔だ、どけ、忠則、今から準備をする」

俺は忠則の言葉に跳び起き一気に準備を始める為、忠則を部屋から追い出した。

今は何時だろうか、まだそんなに遅くない時間のはずだ。

窓を開けるとまだ日が昇って間もない、なぜこんなに早く起きなければならぬのだ。

顔を洗い、寝癖を直し、ローブに着替え、俺は急いでギルドのホールに向かった。

ホールには、ギルドのメンバーと、その関係者が既に9割以上も集まって居た。

俺は、全くこの事を知らされていなかった為、忠則に聞いた。

「なぜ、こんなに朝早くから集まっているんだ？」

「ああ皆、昼から業務だからな、朝か夜にならないと集まらないからな、お姫様を正式に迎え入れるなら、皆で集まったほうがいいだろう？」

「・・・それは、忠則が考えたのか？」

「おう、やっぱり歓迎は必要だろ？」

「そうか、そうだよな、駄目だな、俺、そこまで考えて無かった」

「まあ昨日の夜思いつきで起きてる奴らに言って回ったからな、黒野は結構早く寝てたし伝わらなかったというわけだ」

俺は、忠則の歓迎会企画で起されたメンバーは、眠そうな者もいるが、基本的にお祭り騒ぎや楽しい事が好きな者達なので嫌な顔をせずにはホールを飾り付けをしたり、いろんな企画を立てたりしていた。

「皆祭り好きなんだ、こう言う楽しいイベントは多い方が良いんだぜ」

「忠則もたまには良い事思いつくんだな、見直したよ」

「たまにはかよ・・・まあ良いけどよ、それより、平田から少し経費貰ったけどいいよな」

「ああ良いよ、後で忠則の報酬から減らしておくから」

「くそ、ひでえな黒野は、また俺だけ特別な依頼受けなきゃいけないんじゃないかねえか」

俺と忠則はそんな馬鹿な会話をしていると、ホールには多分全てのメンバーが集まっていた。

ホールにはまだ、朝だと言うのに、テーブルが何個も並べられ、その上に果物や、飲み物、朝食とは思えない大量の食事が並んでいた。そして、日本で吹奏楽部でもやっていたのだろうか、数人のグループがこの世界の楽器を演奏するためにチューニングをしていた。

少しづつ歓迎会の雰囲気が良い感じに高まってきた所に、何も知らないレイラがギルドにやってくる。

「朝早くすみません、今日からこのギルドで・・・」

「「「いらっしやいレイラさん!!」「」」」

レイラが荷物を持って入口で挨拶をし終わる前にレイラの知り合いらしい数人が大きな声で歓迎して、飛びついた。

「え?・・・きゃあ」

少年少女達に跳びつかれたレイラは何が起こっているか分からないままホールに引つ張られ、200人以上の人数の歓迎に驚いていた。俺達はレイラの訪れに拍手で迎え、演奏グループが昔聞いた日本の有名な曲が流れ始めた。

戸惑っているレイラを見て、何処からかあかりが近付いてレイラに説明を始めた。

「おはよう、レイラさん」

「あ、あかりさんこれはいったい・・・」

「何が起きているか分からないみたいね、皆貴方を歓迎しているのよ」

「え、こんな早くから皆さん、私の為に?」

「レイラさん、このギルドはお祭りが好きなのよ、ギルドマスターはもう、貴方に関係なく朝からお酒飲んでいるわ」

そうしてあかりと話したレイラは皆の歓迎に驚きながらも、皆の前に立って一礼をして感謝の言葉を紡いだ。

「今日は、私の為にこんな歓迎会をして頂き本当にありがとうございます、私もこれからこのギルドの一員として頑張っていきたいと思います!」

レイラの大きな声で周りは静かになり、その後大きな拍手が起こった。

朝早くから騒いでもいい位のこの大きなギルドは、喋り声と笑い声、懐かしい音楽で覆い尽くした。

俺は、あかりとレイラの方に行き挨拶をする。

「おはよう、レイラ、今日はいきなりこんな歓迎で驚いただろうけど、これがこのギルドなんだ、色々大変かもしれないけど、これからよろしく頼むよ」

「はい、今日はありがとうございます、黒野さん」

「いや、お礼はあの大きい男に言ってくれ、今日の企画は楽しい事の大好きな忠則の考えだからね」

「そうですか、でも今はちょっと近づけないですね」

「あいつ、なぜ腕相撲大会を始めてるんだ・・・」

「さすが、ギルドマスターさん、次々と倒していきますね、両手でも敵わないなんて」

「あ、3人一気にぶっ飛ばしやがった・・・」

俺がレイラと話しているとあかりが声をかける。

「さて、そんな所で話してないで一緒に楽しみましょう、今日は貴方が主役なんだから」

そして俺はあかりとレイラ、それとギルドのメンバーでパーティーを楽しんだのだった。

第二章 04話（後書き）

第二章が始まり、緩やかなスピードで流れる話が続きます。

一時的な黒野達の休息に付きやっってください、流石にこのまま第二章が終わるつもりはありません。

ですが、作者的には一年間頑張った主人公達を休ませてあげたいのです。

これから読者様方を出来るだけ楽しませる事が出来る様な展開を作っていきたいと思えます、どうか、もう少しの間、飽きずに見てやってください。

どうぞよろしく願います。

そして、感想と評価どちらもお待ちしておりますのでお暇でしたらよろしく願います。

第二章 05話（前書き）

執筆スピードを上げる方法を探してみました。

そして、問題が発生しました。

作者はタイピングがあまり早くありません。

まあタイピングが早くてもイメージを文章化出来るスピードも早くなかった。

結局色々改善すべき点があったと築く作者。

タイピングは書いてるうちに早くなる気がするけど、文章化スピードは早くなる気がしないのでした。

それでも書き続けます。

目標は完結です。

第二章 05話

歓迎会は丸一日続いた。

途中で忠則や巡回の当番のメンバーは居なくなったり、受注中の依頼をこなす為に居なくなったりしたが、音楽や歌声、喋り声や笑い声は鳴り止む事は無かった。

何処からか街の人間や、旅人がやって来て人数は増えていった。

俺達はこの国に来てどれだけのお祭り騒ぎを行ったのだろう、お金の使い方が酷くなってきている、一度、ランクA Aの報酬を一日で使いきった時はどうしたものかと思ってしまった。

「ねえこれはなんという歌なの？とても良い歌詞ね」

「ああ故郷の歌だよ、とても有名になった歌なんだ」

「そうね、あまり音楽や歌を聞かない私でもこの曲は知っているわ」

だけどレイラがこんなにも楽しんでもくれるのならそれでもいいのだろうと思う俺だった。

俺はあかりとレイラの3人でこのお祭り騒ぎの中ずっと一緒に回った。

ついでにギルド内の紹介や、レイラの部屋に荷物を置きに行ったりと色々な準備だけは終わらせた。

「もうこんな時間ですか・・・」

「楽しい時間は進むのが早いねえ」

あかりとレイラは夕日が沈みかけた頃に話していた。

お祭り騒ぎは多分日が変わる頃まで続くだろう、忠則はアルコールを口を含み蝋燭の火で火炎放射を放っている。

佐藤兄妹は、いつものように周りに負けないくらいの声で言い争い

を続ける。

あかりとレイラもワインを飲んでほんのりと顔が赤くなって話が絶える事が無かった。

マリアも今日は城から戻って来て様々な業務を平田に教わりながら様々な片付けや料理の手伝いをしたり、いろんな人と会話をしたりと様々な事をこなしていた。

日が沈み、忠則が火炎放射に失敗し前髪がチリチリになった頃、俺達は、別の静かな場所を探して椅子に座った、音楽と笑い声が良いBGMに聞こえる所でレイラは口を開いた。

「ねえ、黒野さん？このギルドは、皆さん同じ故郷の人なんですか？」

「ああ、そうだよ、皆、出会った時間は短いけど同じ故郷で大切な仲間だよ」

「黒野さんの故郷は、何処なんですか？」

「え……」

黒野は躊躇してしまった、本当の事を行っても良いのだろうか、今まで特に説明しなくても、同じ異世界の仲間と暮らしていたのでこの様な状況になった事が無かった。

俺が答えに詰まっているとあかりが隣で答えた。

「私達は別の世界から来たのですよね、黒野」

「え……別世界ですか？」

「え、おい！あかり！」

「良いじゃない、もうレイラちゃんも仲間よ、別にばれたら死んじやう訳じゃないんだし」

「本当なんですか、別世界って……」

レイラは、完全に戸惑っていた、それはそうだろう、いきなり異世

界から現れたなんて言われたら、耳を疑うか、相手を疑うしかない。
俺は、戸惑っているレイラに声をかける

「えっと、レイラ・・・」

「そうですか、納得がいきました!」

「え・・・」

「そうですよ、異世界から来たなら説明が付きます、皆さん、だからこんなにも強く、奴隷会社なんかを相手に戦ったんですね、この人達は何か違うと思っていましたんですよ」

「なんか、思っていた反応と違う・・・」

俺は、レイラの思いの寄らない納得に次は俺が戸惑ってしまった。
俺の戸惑っている中レイラは言葉が続ける

「では、どんな世界に住んでいたんですか?とっても気になります」
「えっと、こことは違って、自分の世界は地球と言って果てがあるんだ」

俺は、地球、日本での事をレイラに話しだした。

「地球は、この世界のように魔法が無いんだ」

「魔法が無いのですか、では、魔力という概念が存在しないのですね」

「ああ、そうなんだ、だけど、この世界とは違って、様々な物があるんだ、例えば携帯電話って言うのがあって、それを持っていると、遠くに居る人と会話をする事が出来るんだ」

「それは魔法ではないのですか」

「ああ電波と言うものを使うんだそれは・・・」

俺は、レイラに色々な話をした、テレビやパソコンや、電車、車な

ど、俺が知っている事を限りなく詳しく話した、レイラは驚きながらもワクワクしながら自分の話を聞いてくれた。少しの間話に夢中になっていたら、あかりが気を利かせて居なくなっていた。

俺は、とても楽しかった、最初の出会いが出会いだったため、最初の会話はとても酷かった、だけど、今ではいつものように、いや、お酒も入っていた為、いつもより饒舌になった、レイラも俺の話に相槌や質問をしてくれた、とても興味を持ってくれていたし、自分で言うのもなんだが、楽しそうに聞いてくれたと思う。

「すごい世界ですね、黒野さんの世界って・・・」

「ああもっと色々あるんだけどね、一日では話しきれない位物が多い世界なんだ」

「黒野さんの話、いつまでも聞いてみたいです」

レイラは俺を萌え殺す気なのか、ほんのり赤くなった顔で、目がトロンとしている、そんな表情で、そんな言葉を使うなんて、反則以外何でもない・・・

ふと気がつく、あたりは暗くなっていた、周りのBGMも小さくなっていた。

「・・・黒野さん」

レイラは、俺の顔を見て名前を呼んだ。

「ん、何？」

「今まで、言えなかった事があったんです、本当はもっと早く言うべきでした」

レイラは俺に顔を近づける・・・

俺は、唾を飲み込んで、目を合わせる・・・
え、マジ？この展開ってなに？

「え？レイラ・・・どうした？」

「・・・この国を助けてくださって本当にありがとうございます、国民を代表してお礼を申し上げます」

「・・・ああ、良いよ、うん、そう都合よく行く訳ないしね」

「はい？」

「いや、何でもない、こっちの話」

そうして、俺は眠そうなレイラを部屋まで送った。

これからレイラと何とかやっていけそうな気がした一日になったのだった。

第二章 06話（前書き）

毎日投稿による焦りでもしかしたら文章やストーリーが悪くなっているかもしれません・・・。

今、書き貯めが1話しかない状況が続いており、毎日ギリギリで投稿しております。

もし書き貯めが0になった場合、毎日投稿は断念させていただきません。

最初、自分が発言した言葉に嘘をつく形になってしまいましたが、これ以上焦って執筆をつづけてもイメージや文章が良い物にならないと判断しました。

まだ、数日は毎日投稿を続けれる状況ですが、第二章完結までに

第二章 06話

祭り騒ぎが終わって、3日が経った。

レイラは、もうギルドに馴染み、ギルドの内装工事の手伝いを引き受けてくれていた。

忠則はいつものように巡回と、討伐依頼を受けに行き、あかりは、診療所で馬鹿な男を相手していた。

俺は、様々な金の管理と、メンバーの現状を平田と一緒に把握し、計画を立てていた。

「何か一つ、物足りない気がするんですけどよね」

平田は、何か物足りなさを感じて唸っていた。

「何かってなんだ？もう、結構色々やる事はやったし、皆不満なく業務に徹しているんだ」

「なんででしょうか、いつも、皆さん頑張ってくれているから、何か疲れをいやす何か欲しいんですよ、娯楽は、忠則さんが何回も提供してくれるんですけど、癒しは少ないですよ」

「そうか、忠則は、楽しい事は基本的に進んでするが、癒されはしないからな、あんなでかい図体で癒しなんか求めてはいけないな」

「あかりさんは、結構、男の人達がいつもいるので、あまり、ここにはいませんからね」

「ああ、あかりは結構晩御飯もおごって貰ったりとか、男が放っておかないからな、まああまり会話が弾むとは思えないが・・・」

俺は、2人が居ない事を良い事に言いたい放題を言っていた。

2人共くしゃみをしているのだろうかなんて事を考えながら話を元に戻す。

「でも、癒しと言ったらなんだ？俺は本を読む時間と寝る時間さえあれば癒されるから、これと言って思いつく事が無いなあ平田は何かないか？」

「まあ男なら、娼婦がありますからね・・・」

「ああ娼婦か・・・」

正直この話題は誰ともしたくは無かった、俺と忠則は、あかりと良く別行動をして、何度か利用しているのだ、流石に、俺も男だ、性欲が無い訳じゃない、どうしようもないのだ。

多分、あかりも気付いていたかもしれないが何も言わなかった。やはり、女性と一緒に行動するとかこういう事はあまり公にしたいのだから、いやだ。

「それはギルドにはどうしようもできないな・・・」

「まあ今では3割が女性ですからね、大変な事になりますね」

そうして、少しの間、沈黙の後、一つあかりの言葉を思い出した。召喚されてアルバイトを始めた時あかりがあれを求めていた。

「そうだ、風呂だ、露天風呂を作ろう！」

「ああ風呂ですか、風呂は身体と心を休ませますからね、でもどうやって？」

平田は、黒野の考えに賛成はするが、質問を返した。

まあそうだろう、風呂なんて、地面をひたすら掘らなければいけない、

忠則でも何日もかかってしまうだろう、だが、忠則は一応、大きい収入源だ、基本的に3人以上のグループで3日以上必要になるランクAの依頼を忠則は一人で、更に一日でこなせるのだ、実は、忠則

のおかげでこのギルドは成り立っているのだ、一応ギルドマスターとしてちゃんとしていた。

今、元奴隷を養う費用とギルド改装修理費用、一番掛かるのは一ヶ月に1回は行われるお祭り騒ぎの経費。

「祭りさえなければ結構金持ちなんじゃないか？このギルド・・・」
「そうですね、でも大切な事ですから」

平田は俺の呟きに苦笑いしながら答える。

まあ自分も祭りが無かったらギルドらしさが無くなってしまいうからこのままで良いとは思っていたが、やはり、経費の使用状況をみると呟きたくなるものだった。

「まあ風呂に関しては俺が何とかするよ」

「そうですか、黒野さんが言うのでしたら大丈夫ですね、よろしくお願いします」

そうして、俺は平田に後の事を任せ、温泉を作れそうな大きな広場に向かった。

「よし、ここで良いか」

俺は、工場の奥のちょうど林が茂って良い感じに空間が出来ていた。まず、俺は大きな魔法陣を地面に書いていった。

魔法陣は空間に指や、杖で書けるが、大きな魔法陣は魔力を送りながら直接書いた方が発動時の魔力量と魔力の放出する時の負荷が少なくなるのだ。

「完成！」

魔法陣を書き上げた俺は、魔術式をくみ上げる、これはあまり得意ではない……

魔術は目の見えない精霊との交渉を行うのだ、交渉する精霊は、地域や、場所、地形など様々な条件によって違ってくるのだ、あかりは、精霊との交渉がとても上手かった、基本的にどんな人間でも相手の出来るあかりなので、精霊とも仲良くできるのだろう。だが俺は違った……

「くそ、ここは難しい……」

約3分の強制魔力回復時間はいつもより2分近く長くなってしまった。

だが、何とか身体に魔力が見た黒野は魔法陣に魔力を流し込む。

「サーチ地層探索」

俺は、温泉脈を探す地属性の探索魔法を発動させた。

俺は地層にコンタクトを取り、半径1km、地下3kmまで探索した。

この頃黒野は魔法陣について考えていた。

魔法陣は、イメージした魔法を使う為のプログラムなのだ、プログラムにミスがあると、誤作動が起きたり、動かなくなる。

俺はプログラムや、作図のようなミスの許されない創作活動は得意だ。

大学では、機械科の大学で、製図や機械設計を得意としていた。

俺が魔法陣に設定した事は2つ、1つは地層にある温泉脈を探索。

「よし、見つけた、インフィニティトラップ永久の陥穽」

俺は更に魔法陣に魔力を込める、地面に半径1メートルの綺麗な円が地面に現れた。

もう1つは発見した温泉脈から地上まで、一直線の穴を開ける。

「くそ、地下1500mか・・・」

俺は、魔力を更に流し込み、魔法陣の機能を安定させる。

そして、遂に地下1500mまで穴が開いた。

すると地面が揺れながらドドドツツと大きな音が地面から聞こえた。

「あ、マズイ・・・」

数分後、数mと及ぶ暑い噴水が噴き出した。

だが俺は温泉が吹き出る穴の目の前に立っていた、俺はそんな単純な事に気が付くのに遅れ、そのまま噴水と一緒に数メートル吹き飛ばされていったのだった。

第二章 07話（前書き）

この頃作者である自分は、前書きと後書きに無駄の事書きすぎじゃないのかなと思っています。

ですが、どうせ毎日投稿してるので活動報告に書く意味も少ない気がするのでこちらに書いてしまいます。

さて、そろそろ本格的に第二章の舞台が幕開けします。

第二章 07話

「よし、まだ、行けそうだな」

俺は、数m温泉と一緒に吹き飛んだ身体の調子を確認し、他の魔法陣を描きあげて、川から水を引き温度を調節したり、岩を加工し、大きな露天風呂を作成する。

「これは、結構魔法の練習になったな・・・」

俺は、全身の魔力を何度も供給、放出を繰り返し、所々痺れたり、痙攣していた。

少し頑張りすぎたみたいだ、まっすぐ歩く事も出来なくなっていた。

「あ、マズイ・・・」

身体が言う事を聞かない、俺は、ギルドに戻る前に力尽きてしまった。

俺はギルドの裏口近くに横たわるように倒れた・・・

「・・・ここは何処だ？」

目を開けると俺はベッドの上で寝ていた、窓の外から出る日の光からして早朝だろう。

俺は上半身だけ、起き上がり身体の調子確かめる、手、足、腹部、隅々まで動かす。

所々、痺れはあったが軽度で何も問題はなかった。

俺は、部屋を確認する、俺と似たような部屋だが家具の配置が違い、俺の部屋にある物が無かった。

部屋が整っているので忠則の部屋じゃないだろう、あかりの部屋か？
いや、あかりは先日日本棚を壁中に配置して小説などの本を大量購入し、満足げだったのを覚えている。

「つてことは・・・」

俺が結論を出す瞬間に部屋のドアが開いた。

「あ、もう起きられましたか黒野さん、おはようございます」

「やはり、もしかしてこの部屋は・・・」

「はい、私の部屋です、ギルドの掃除をしている時に丁度倒れている黒野さんを発見してここまで運んできました、本当は誰かほかの人を呼んだ方が良かったのですが、見つけた時にはもう日も沈み、皆さんは寝ていたので・・・」

そうか、俺はレイラにここまで運んで貰ってしまったのか、情けなさすぎる・・・

俺は女の子に運ばれると言うショックを隠しながらレイラに話しかける。

「えっと、まだ俺があ場所で倒れている事は言っていないかな？」

「はい、本当かこれからあかりさんに見て貰おうと丁度準備していた所でしたので、まだ誰にも言っていないですよ」

「レイラ、この事は2人だけの秘密にしてくれ、お願いだ」

俺は、レイラのベッドの上で土下座をする、レイラは慌てて俺に正座をやめるように言って、約束すると口約束を交わした。

「でも、何故あのような場所で？」

「ああ、やはり昨日は誰も気が付かなかったか、じゃあ、その説明

をするから、今いる騎士のグループの隊長を呼んでくれないか？俺はあかりと忠則、平田とマリアを呼んでくる」

そうして俺はレイラに俺の部屋に隊長を呼んで来て貰い、皆の前で露天風呂の説明とその使用方法について相談をする。

「昨日の今日で作ってしまうなんて・・・流石黒野さんです」

「黒野、本当にありがとう、これで毎日、お風呂を焚かなくて済むわ」

露天風呂は想像以上の反響だった。

レイラは初めての温泉と言うものに驚いていたが、あかりと一緒に出て来た時の気持ちよさそうな笑顔と感謝の言葉で俺は最高の気分になった。

数日後、俺は男風呂と女風呂をわける事にして、脱衣所と受付を設置し、一般にも低価格で開放することにした。

その反響も大きく、数日後には様々な街の人達が利用するようになった。

そしてギルドは一気に改装工事を終了させ、ギルドは遂に完成し、様々な国から依頼を受けにくる旅人やこの世界に馴染む事が出来た俺達と同じ異世界から来た人間も訪れるようになった。

黒野達は新しい旅立ちへの準備が整っていた。

佐藤兄妹は半年以上の冒険に備えて数日後に出発する予定になっていた。

あかりは、この国の城にある文献を読み、まだ黒野達の知らない歴史と伝説、伝承を探し、元の世界に帰る為の糸口を探した。

忠則は、国の唯一のギルドのマスターであり騎士団のトップとして国の治安を守り、国に貢献をし続けた。

黒野は、ギルドの裏方に回り様々な業務をこなしつつ魔法の訓練を欠かさず行っていた。

その生活が1ヶ月が過ぎようとした頃、ギルドに一人の男性が駆け込んだ。

その男は数日前、同じ異世界から来たものとしてギルドに歓迎され、様々な依頼をここで受けていた人物だった。

だが、男の表情はいつもと違っていたのだ、明るい笑顔が特徴だったその男は顔を真っ青にして黒野とあかり、忠則の3人に告げたのだった。

「大変な事になった・・・俺達が召喚された国、リーディアが戦争に勝ってしまった！」

その男の言葉は、黒野達を驚愕させた。

そう、それは本当なら起こるはずの無い出来事だったのだ、リーディアは戦争に敗北し、戦争の無い未来になる筈だったのだ、黒野は男の言葉に思わず口を開いていた。

「新しい歴史が生まれた、もうこの世界は俺達の知っている物語では無くなった、これからは知っているイベントや、攻略法もない新しい物語だ」
ファンタジー

黒野の言葉はギルドに居た者達に届いた。

こうして、黒野達は新しい歴史に食いつくされない為の壮絶な戦いが始まったのだった。

第二章 07話（後書き）

戦争です、ファンタジーにはありますが、戦争の話になってしまします。

自分は他の作者様の小説作品に影響されまくっているのも、もしかしたら盗作の様な形になってしまっているのでは無いかとびくびくしております。

そして第二章ではやっと主人公の黒野君が強くなっていくはずですが。

第二章 08話（前書き）

明日、自分が待ちに待ったゲームが発売される・・・。
だけど書き貯めは2話・・・。

なんてことだ、たった二日しか、満足にプレイできない。
こうなったら今日沢山書きあげるしかない・・・。

こんな作者な訳ですが、まだ毎日更新は続けられそうです。
今後ともよろしくお願いします。

第二章 08話

俺はギルドに関係する者全員に収集命令をした。

この展開は全く予想外だった。

この世界が小説だった頃の歴史だと、主人公達は後半年間は修行や、旅を続けているはずだったのだ。

だが、リーディアが戦争に勝利し歴史が変わった今、今のままではこのレイドと言う国はおろか、リーディア周辺諸国の国全てが戦場になる可能性まであるのだ。

早急にリーディアの状況の把握と、その周辺諸国の対応方法を知る必要があった。

ギルドホールに着いた俺は皆が揃ったのを確認し、俺はホールにある少し高い舞台上に上り、全員に聞こえる声を上げる。

「今日は、忙しい中、皆集まってくれてありがとう」

ホールに居る騎士とギルドの関係者は俺の言葉を静かに聞いていた、

「もう知っている者もいるかもしれないが、戦争の国リーディアがまた戦争に勝利を収めてしまった、今回は自滅する事が予想されていたリーディアが勝利されていた為、特に作戦を計画していなかったのは私達ギルドマスターの失態だ、本当にすまない」

俺は、まず今起こっている状況と、それに対するお詫びをした、初めて聞いた者達は驚きを隠せないでいた、特に日本から召喚された者達は動揺が大きかった。

周りがざわつき始めた時また俺は口を開いた。

「そのため、我がギルドとこの国の騎士団の中隊長以上の者は会議

室で緊急会議を行う、他の者は私達が戻ってくるまで業務に戻っていてくれ、今後の方針は決定次第大隊長や私の口から告げる、どちらにしろ、皆覚悟してくれ、この国、このギルドを守りたい者は私達に着いて来てくれ」

そう言って、俺は皆に一礼し、会議時間を報告しホールから離れた。

「忠則、遅いぞ、何をしていた」

「すまん、ちょっと部下に囲まれて質問攻めにあっていた」

「そうか、まあ良い、これで全員そろったな、今から緊急会議を始める」

会議室にはギルド兼騎士の中隊長4人と大隊長の1人、平田、ギルドマスターの3人とメイドのマリア、観察官のレイラの11人が集まっていた。

皆、この国の騎士とギルドの今後の方針、行動についての事で緊張していた。

「では、会議を始めよう」

俺は重苦しい空気の中、会議の開始を告げる。

「では私がこの緊急会議の司会を行う、最終決定は、ギルドマスターである忠則にしてもらう形で良いだろうか」

俺は皆に事前に執拗な事を決める、皆、静かに頷き了解を得た。

「ありがとう、ではまず、リーディアの戦争勝利について、私達はまだあまりにも状況が理解できていない、その為、状況の把握が必要になる、これはギルドの依頼にしたいのだが、今、すぐにでも動かせ

るギルドの人員が騎士たちはいないか？」

「状況の把握というのは、リーディアに向かう必要がありますね、旅に出る準備のあるグループが2つある筈です、その者達に行かせましょう」

「分かった、そのグループに依頼をお願いするぜ、依頼料は俺が出そう」

俺は隊長達に質問をすると大隊長は直に答えてくれた。

忠則は、隊長に依頼をする事になった、そして俺は次の話に移る。

「では、リーディアに対する対応は、ギルドのグループが帰ってくるまで、保留にしましょう、では、次は私の提案なのですが、この世界に私達の存在を公表しましょう」

俺は、少し前から考えていた事を皆に告げる。

すると、皆が驚いている間にメイドのマリアが疑問をぶつけた。

「私のような者がこのような場所で発言するのは申し訳ないのですが、私達の存在とはどういうことでしょうか？」

「ああすまない、マリア、お前にも言わないといけなかった、私達は、この世界の住人ではない、別の世界から突然召喚されたんだ」

「え・・・どう言う事ですか？」

俺は、今までの経緯をレイラの時のように出来るだけ分かりやすく説明した。

そして、マリアを知った経緯まで説明した。

「そうですか・・・では、私の事を知っていたのは私の事が、物語として存在していたと言う事でしたか・・・」

「ああ私達の知っている歴史では、貴方は私達では無く・・・」

「いえ、起きなかった歴史の事は知らなくて大丈夫です、今、私はこの屋敷にメイドとして仕えているのです、それに私はこの生活に満足しております」

マリアは、俺の言葉を信じてくれた。

俺はマリアに感謝し、俺は皆の意見を聞いた。
すると、中隊長の一人が質問をした。

「俺達の事を公表してどうするのですか？」

「メリットはある、まず、召喚された方法が分かるかもしれない、その方法が分かれば戻る方法も見つかるかもしれない、それと、公表する事によって、別の国から、同じ召喚された者からの連絡が来るかもしれないそれはリーディアからもあるかもしれない、その連絡がどのような形になるかは分からないけどな・・・」

皆、俺の言葉に驚き考えているのだろう、会議室は静かになった。
そして、この会議はこの日をすべて使うとても長い会議になったのだった・・・

第二章 08話（後書き）

誤字脱字、もしかしたら存在しているかもしれません。
この頃あまり確認し無いで投稿しております。

ございましたらご報告お願いいたします。

第二章 09話

「では、これで会議を終了します」

俺はそう締めくくって日が沈むまで続いた会議が終了した。その日は、明日に向けて準備だけして、ベッドにもぐった。

「さて、動くか・・・」

次の日、俺は朝早く起きて行動を起こす。

まず、依頼を請け負ったはずのグループの居るはずの馬小屋に向かう。

「君達だね、これからリーディアに向かってくれるのは」

「はい、黒野さん朝から俺達の為に此処まで来てくれたのですか？」

「ああ、今リーディアは危険な状況だ、君達的能力は評価するが、相手が未だにどんな存在か分からない、十分に気を付けてくれ、誰も死ぬな」

「はい、絶対に死にません！」

グループの隊長は俺にしっかりとした声で告げた。

握手を交わし、もう一つのグループの隊長とも握手をする

「私たちなら此処からリーディアまで往復で10日掛かりません、その間に黒野さんも頑張ってください」

「ああ絶対にこの国に手を出させないように頑張るさ」

そうして2つのグループはリーディアに向かった。

俺は次の場所に向かう。

「朝早くすまない、昨日約束した黒野だ、起きてるか？」

「あ、すみません、今開けますのでちょっと待ってください」

俺はドアの前で少しの間待つとごめんなさいと女性の声と同時にドアが開く。

女性の声は佐藤妹、咲子だ、兄を起こしていたのだろう。

「すみません、馬鹿兄が起きるのが遅くて・・・」

「いいさ、俺がこんなに早く来たのが悪い、まあ時間は取らせないから、少しの間だけ俺の話を聞いてくれ」

「はい」

寝ぼけていた佐藤兄も俺の真剣な声で目が覚めたのだろう、あかりと同時にしっかりした声で返事をした。

「ひとつ二人の旅の事で修正させて欲しい事があるんだ、本当は2人には様々な場所に行ってもらいたいのだが状況が変わった、最初の目的地と会って欲しい人物がいる」

俺は昨日から考えていた事を二人に告げる。

「此処からどれ位の道のりになるか分から無いが、この世界の一番の巨大都市のアイディークに向かってくれ、そこで商人のイディアに接触してくれ、そして俺達の事を全て話し、仲間になってもらうよう頼むんだ、様々な情報と金になる事をアピールしてくれ」

「商人のイディアか・・・」

「仲間に出来るかしら・・・」

2人が悩むのも無理はないだろう、商人のイディアは小説の主人公

の一人だ。

巨大都市に住む商人の子供だった彼は父の才能を超えその巨大都市の最上位に君臨する商人になるはずなのだ。

だが、イディアは商人であり、あまり良い性格とは言えない、物事の損得を重視した考えで様々な人達に恨みを買うのも日常茶飯事だった。

「まあ難しかったら仕方ないが俺等の知っているイディアを全てを話して歴史を変えるんだ、商人はあまり良いエンディングでは無かったからな」

「そうですね、その方法がありますが、出来れば使いたくないです・・・」

「そこら辺は頑張ってくれ、後、期限は最低で半年だ、それ以上時間が掛かると思ったら何とかして連絡してくれ、今俺が想像している事が現実になってしまったら、商人との関係はとても重要になる」

時間はあまりなかった、今考えれる物を全て動かさないと待っているのはリーディアの独裁国家の一部になってしまうと言う残酷なエンディングになってしまうかもしれない。

それだけは絶対に避けなければいけない、俺はこの国とこの国の姫、レイラを守らないといけない、いや、絶対に守る。

「これは2人にしか頼めない、どうにかしてマリアの時のようにこの国に連れて来てくれ」「はい!」「」

そして俺はよろしく頼むと最後に一言言って佐藤兄妹の部屋を出る。俺は、次の場所に向かう。

「おはようございますご主人様、今日はこのような場所まで何の用事でしょうか?」

「ああ、メイド候補は決まったかと思ってね」

俺はマリアの挨拶に答える、此処では残酷な報告をしなければなら
ない。

「はい、メイド候補はだいたい決まりました、ギルドのお屋敷に必
要な数の15人です」

そう言ってマリアはその15人を俺の下まで呼んだ。

「ああ君達がこれから俺達のギルドで働くんだね、よろしく頼むよ」

「「「はい、ご主人様」」」

「じゃあマリア、この子達をちよつと別の場所に行かせてくれない
か、残りの子達と少し話がしたいんだ」

「はい、かしこまりました、ご主人様」

マリアはメイド候補の元奴隷達と共に別の場所に移動した。

「さて、君達は生きたいか？」

俺は心を抑えつける、無情になるのはとても辛い、だが此処で自分
に負けたらその先に未来はない、こうして俺は元奴隷たちに残酷な
命令をする。

第二章 10話

「今、君達は私の騎士団の部下としてこのギルドで衣食住を提供している、そして、マリアの選定も終わった、君達はもう我が騎士団には必要が無い者となったのだ、もう私に君達を養う意味はない、この意味は分かるな」

元奴隷の子供達は俺の声を聞いていた、意味も通じているだろう、数人が震え、怯えている。

俺は強く拳を握る爪が手に食い込み血がにじむ、だが俺は手も口も止めない。

「だが、君達が生きたいと望めば私は君達を我が騎士団の部下として迎え入れよう、だが、それは過酷な修行の日々になる、私達はこの国の為に強く逞しくならなければならないのだ、本当に生きたいと願うなら我が騎士団の部下となり国の為に死ぬ思いで生き抜く力を手に入れろ、死にたいなら今すぐここを出ていき、餓死すれば良い」

そこには選択肢はなかった、元奴隷の者達はこの時騎士団となった。だが、俺は苦悩した、なぜ奴隷から解放したはずの者達をまたこのような形で戦争に駆り出されるかもしれない騎士にしなければいけなかったのか。

だが、これは今の最善策だった、この国に元奴隷の難民をずっと養う金は無い。

ならば、今現状出来る事は限られる、見捨てるか、使うか。

騎士として、国に貢献させ、ギルドで依頼をこなし、育てる。

万が一戦争が始まった時、一兵士として動かせるようにしなければいけなかった。

俺は元奴隷たちの言葉を待った、静かな空気の中、一人の男性が手を上げ、声を出した。

「黒野様、そんなに苦しい顔をしないでください」

「・・・どう言う事だ」

「私達は貴方様方に助けられました、あの時未来は絶望しかありえなかったのです、ですが、その絶望に一本の光がさしました、その光は私に生きる希望を与えてくれたのです、私、いや、私達は貴方に感謝するのはともかく怨む事など全くないのです」

「だが・・・私はお前達を金で動く兵士になれと・・・」

俺は、男の言葉に反論するかのように言葉を出す直に他の者が声を上げる。

「それは奴隷より辛いもののですか？私には奴隷商人に此処に連れられた1週間、死よりも恐ろしい現実に絶望したのです、奴隷は人間として生きられないです」

「そうです、私達は、助かり解放されマリア様と一緒に貴方様のギルドを何度も見学させていただきました、私達が奴隷では無くその一員になれるのなら、紛争地域でも戦争でも行きます」

「皆、意思は同じです、黒野様は何も苦しむ事はありません、私達はまだ黒野様について行くと決めましたから」

「・・・お前達」

俺は、握りしめていた手をほどいた、その手の力は弱まり、そして震えた。

「私達のこの助けられた命、黒野様達の為に使わせてください、どうかよろしくお願いします」

元奴隷たちは俺に深く礼をして願うする。

「・・・では、契約は成立だ、これから我がギルドの下に国の為、騎士として働いてもらう、それは生半可な特訓ではないぞ、常に死と隣り合わせの修行だ、心して掛かれ」

「「「はい！」」」」

「・・・よろしく頼む」

俺は、元奴隷たちとの契約を交わし直に立ち去る、これ以上いると俺は耐えられそうになかったからだ、俺は空を見て少しうるんだ瞳を乾かす。

まだ、準備の為の準備も終わっていない、俺は次の場所へ急ぐ。

「クレマン様、今日は急な話で申し訳ございません」

俺は昨日、レイラに頼み王との謁見を取り合わせていた。

「良い、私の耳にも入って来ている、リーディアの事だろう、話せ」

「はい、今、私達騎士団はリーディアの状況を知るべく情報捜査をしております、まだリーディアの状況は把握しておりませんが、情報が来るまで待っている時間ありません、あの国は危険なのです」

「何故、そこまでお前の様な男がそこまで焦っているのだ、何か理由でもあるのか」

「はい、これから私が話す事は全て事実です、それをどうか理解していただければ理由は分かります、どうか信じてください」

「良い、話せ、お前には例があるどんな戯言でも信じようではないか」

「ありがとうございます」

俺は王クレマンに礼をして俺達の話をする。

「ではお前達は、この世界と別の世界の人間で、私達のこれから起こる歴史に干渉し、新しい歴史を作り変えていると言うのか」

「はい、私の知っている歴史ではリーディアはあの戦争で負け、そのまま廃れ消えていった国だったのです」

「では、何故リーディアは勝利した、お前たちにも召喚された者が居たのか」

「はい、私達はごく一部でしかございません、私達は約5000人はこの世界に召喚されております、そしてその全員が召喚された場所がリーディアなのです」

「そうか、だから召喚された者がリーディアに味方をしたのか」

「はい、今の所そう考えるのが妥当です、そして私達はこの世界の住人より、成長が早いのが分かっています、たった一年で私達はギルドランクB以上になったのもそれが理由です」

「そうか、では今、リーディアの騎士達はお前達と同等、又はそれ以上という事か・・・」

クレマンは俺の話を聞いて信じ、リーディアがどれだけの勢力を持っているのか理解したようだ、クレマンは苦しい表情をして俺に質問をする。

「とてもリーディアが驚異的力を付けている可能性があるのは分かった、だがお前が来たと言う事は打開策があるのだろうか？」

「はい、今日はそれをお願いにやってきたのです」

俺はクレマンにそう言ってこれから起きるかもしれない戦争に立ち向かうべく話す。

「私が、情報を確保し、その状況が私の予想範囲内でしたらリーディアの国周辺の国全てと同盟を組んでください、今、リーディアと

の戦争に勝つにはこの方法しかありません」

こうして戦争に向けて第一歩が動き出した。

第二章 10話（後書き）

大変申し訳ございません。

毎日投稿が出来なくなりました・・・

これからゆっくり投稿させていただきます。

本当にすみません・・・

第二章 11話（前書き）

大変お待たせしました。

もう申し訳ございませんとしか言いようがありません。
様々な不運が重なってこんなに更新が遅れてしまいました。
これから不定期に更新させていただきます。

第二章 11話

状況は悪くなかった。

リーディアが戦争に勝利したことが隣国諸国に届く3日前に情報が入ってきていたからだ。

俺達はその3日で様々な計画と行動を行い、対策を怠らなかったからだ。

俺は、レイラを通してこの国と他国の状況を把握していた。

今のリーディアは終戦後の処理の為、様々な処理に追われていた。

「なんとかリーディアの周辺の諸国の6割の賛同は得られたな・・・」

その間に王、クレマンは自国を守るため、リーディアに攻められない様に次々と国との同盟を組んでいった。

リーディアとの武器防具など、戦争に必要な物の流通を停止し、戦争の為の準備を極力抑える事を努めた。
だが、良い事ばかりは続かないものだ。

「ただいま調査隊到着しました！」

「・・・どうだった？」

「はい、戦争はリーディアの圧勝でした、勝敗を分けた理由はやはり私たちと同じ日本からやって来た者たちの存在です、その人数は約2000に及び他国の兵8000以上に圧勝したのです、そのためリーディアの死者は、ほぼ日本人以外の兵士です」

「そうか、ありがとう・・・」

「それと、日本兵の隊長の名前が発覚しました」

「誰だ？」

「柴田という男です、その男は元自衛隊出身の男で日本兵をその男

一人で指揮をとり、更に自ら戦場に立ち300人以上の兵をなぎ倒す力も持っているそうです」

「柴田だと・・・」

「どうしました？」

「いや何でもない、ありがとう詳しい話は後で平田と一緒に聞こう」

そう言って俺はリーディアの調査をしてきた隊長との会話を終え考える

4倍の兵を倒すほどの能力、まだこの世界に来て約一年まだこれよりも強くなる可能性はある、一人一人のランクがA以上と考えたほうがいいだろう・・・

こちらの騎士団も能力では劣っていないが人数と経験が足りない、それに戦争はおろか人を殺したことのない子供たちがいきなり戦場に出る事が出来るのだろうか・・・。

更に問題はあった。

「あの時の男か・・・」

日本兵を一人で指揮を取る男、柴田。

俺が初めて此処に召喚された時、教会で出会った男のはずだ。

何処か他の者と違う雰囲気を持っていた男だったが、その男がここまですごい男になっているとは思わなかった。

更に、柴田個人の力も圧倒的なのだ、戦場という空間で300人も兵を倒すと力は忠則と同等、又はそれ以上の力を持っているはずだ。

これで忠則一人でリーディアの日本兵を抑えるのは不可能になった。

「戦力が完全に劣っている・・・」

今、こちらの戦力は隣国の兵の合計約2万。

それとこの国の兵2千と騎士団3百。

そしてリーディアの兵は日本兵2千と国の兵1万。

人数では勝っているが、こちらは他国と一時的に固まった兵であり、統一性や団結力が無く、指揮官が有能でない可能性さえある。

だがリーディアの兵は何度も戦争を経験した者達で統制されている。特に日本兵は前線に立っていたにもかかわらず死者は少なくさらに戦争という経験値を手に入れただけ、強くなっているはずだ。

このままではこの国の未来はないかもしれない・・・
まだ何か打つ手を考えなければいけない。

「駄目だ・・・これ以上今のままでは手が打てない」

今、こちら側の全ての条件が上手く運び相手の行動が全て予想通りに進んでも、被害は大きく、このままでは勝利と言えるものではないのだ。

それだけリーディアの軍は強靱で数も多いのだ。

「もう手が無いわけではない・・・だが、どれだけ出来るか」

あと一つだけ手はある、だがその手は賭けだ。

そう、俺が強くなればいい、ただそれだけのことだ、俺が忠則と肩を並べるだけの力、いや、それ以上の力を手に入れば戦況は大きく変わるのだ。

そして失敗しても被害が拡大する事はないのだ。

もう、行動を起こすための人材は揃っている。

時間はまだある、そして俺がいなくてもこの国は戦争に立ち向かえるだろう。

だが俺は迷っていた、この1年間、あかりと忠則の3人で様々な修業をし、力をつけてきたつもりだった、だが自分の力は副ギルドマ

スターの称号が似合わないランクAだ、このランクならギルド内にも既に何人も存在する、一騎討ちをすれば負けるのは必至だろう。それだけ自分は弱いのだ、その俺が後半年の期間でどれだけ強くなれるのだろうか。

俺は怖かった、この半年間で全く強くなれず戦争の戦力にならずただ見ているだけになってしまっているのではないか。

「また、あの時と同じ顔をしていますよ？」

その声はあの夜とは違ったもう聞きなれた声だった。

「・・・また見られてしまったか」

「あら、今日は涙を流さないのですか」

「やめてくれよ、これ以上女性に涙を見せられないさ」

レイラは俺の向かい側の椅子に座り、俺の顔を見る。

「悩んでいるのですね、それも私が答えられる問題でもなさそう」

「いや、答えは出ているんだ、だけど不安なんだ」

「答えが出ているなら大丈夫ですよ、私が保証します、黒野さんは絶対やり遂げる事が出来ます、だってこの国を救ったではありませんか！」

「でも、それは皆の力なんだよ、俺だけの力では無理だったさ」

「黒野さん、貴方は戦争を一人で勝つつもりなんですか？」

「・・・いや、違う」

「黒野さんが今からしようとしている事はもしかしたら一人でしか出来ない事なのかもしれません、ですが私達はいます、信じていますこれは一人じゃないんです」

「・・・そうか、俺は何を迷っていたんだろうな」

「はい、私は黒野さんを信じていますよ、この国をまた救ってくれ

ると」

俺は椅子から降りてレイラの前に立つ。

「ありがとう、レイラ、俺に勇気をくれて」

「いえ、最初に私に勇気を暮れたのは黒野さん貴方よ、これでやつと返せました」

俺は椅子に座っているレイラの前で床に膝をつき顔を上げレイラに告げる。

「レイラ姫、私は剣士ではありません、貴方の強靱な剣になることも強固な盾になることも出来ません、この国のギルドの上位でありながら能力は低く一人前とは言い難いのです」

俺は一息つく、レイラは俺の目を見て言葉の続きを待っていてくれる。

「貴方の為に道を切り開く事も、貴方の道を守ることもし出来ないですが私は魔法使いです、私は貴方に魔法をかけましょう、貴方の道に、貴方の未来に、貴方の世界に」

「では私の魔法使いさん、私とこの国をその魔法をかけていただけないでしょうか」

「かしこまりました、必ず、貴方の為にこの魔法使いが貴方と貴方の国に魔法をかけましょう、私の全てをかけて」

そうして黒野はレイラに頭を下げて小さな部屋の小さな儀式は終わった。

だがこの時、起きた出来事だけは小さくなかった、それは黒野を変え、この国の未来を変えることになったのだった。

第二章 12話

「じゃあ、行ってくるよ」

俺はレイラとの契約を交わした3日後、様々な業務を平田とメイドに任せることにして、出発の準備を終わらせていた。

レイドの正門の前に立ってこれから半年間会えなくなる仲間にかける。

「ああ俺もお前に負けないように更に強くなって待ってるぜ」

「黒野、私達はちゃんと待ってるんだから絶対帰ってくるのよ」

「黒野様行ってらっしゃいませ、お帰りを心からお待ちしております」

「ギルドの業務は任せてください、必ず黒野さんの帰る場所を守って見せます」

忠則、あかり、マリア、平田、更に他のギルドのメンバーが数人俺に声をかけてくれる。

そして少しの沈黙の後、後ろにいたレイラが俺の前に立った。

「貴女との契約を守るためにこれから少しの間、旅に出ます」

「はい、必ず帰ってきて私に魔法をかけてくださいね」

俺はレイラの前で深くお辞儀をし、誠意を見せる。

「必ずや貴女の契約を果たして見せます、この私の全てをかけて」

俺は最後にレイラの顔をまっすぐ見る

「では、行ってきます」

俺は馬に乗り、レイドとその姫を守るため強くなるための旅に出発した。

目的地はこの世界の唯一の魔法使いの国ウェザンドだ。

そこで、魔法についてもう一度勉強し、更に自分の魔法に磨きをかける。

「・・・の、はずだったんだけどな」

旅に出て10日後の夜、本当なら森を抜け、小さな村に出るはずだった俺は深い森の中にいた、それも見たことが無い草花の生えた不思議な森。

「やばい・・・道に迷った」

旅に出ていきなり道に迷うとかありえない・・・。

だが、自分の情けなさに挫けそうになりながらも寝る準備を始める。草木や大きな石や岩でゴツゴツした地面を魔法で綺麗に整えテントを張る。

夜に考えるのはよくないネガティブな方向に志向がよってしまうのだ。

「さて、この森は俺の知らない場所だ、何も起きなければいいが」

準備の出来たテントから少し離れたところに周りの草木に燃え移らない程度の火を魔法で設置し、いつもの魔法の特訓を始める。

黒野は自分の中にある全ての魔力を意識し、全てをコントロールする。

この一年間で体内の魔力、放出量を把握できる事が可能になった。

その集中力は既に達人のレベルに達していた、魔力を頭の中で数値化し、魔法陣の形式、大きさを演算し必要な魔力を正確に放出するのだ。

黒野の限りある魔力を全て無駄なく使うために黒野が手に入れた技術だ。

それにより魔法の使用数や魔法の威力を最大限発揮できるようになったのだ。

だが、その集中力は長くは続かない、たった数分で全身から汗が噴き出し生命力を奪っていく。

10分間の使用で黒野は立つこともやつの状態になってしまうのだ。

だが、黒野はその10分間さえあれば魔力を効率よく使用する事が可能なのだ。

「よし、これを初めてもう10日目だ、そろそろ成功してくれ」

黒野は様々な魔法陣を何個も構築する。

全て風属性の魔法陣だ、少しずつ模様の違う魔法陣を幾重にも重ねる。

魔法陣を構築するスピードは既に限界速度まで到達していた、一つの魔法陣を描くのに約1秒しか掛っていないのだ、それも同時に何個も魔法陣を構築する事によって更に時間を短縮させる。

たった10秒の間に黒野は40もの魔法陣を構築させた。

「いっけええええ!!」

黒野の発動しようとした魔法は試作段階の風属性魔法の応用の飛行魔法。

だが、飛行は想像以上の計算式とその制御が必要だった、そのためこの10日間何度も魔法陣を組み立てては実行したが体が10cm浮き転倒する事しか出来なかった。

「あ、やば」

黒野は全ての魔法陣に均一に魔力を注ぐ、自分の演算できる限界を超える数値だった。

黒野は頭が割れるような痛みに耐えきれず、魔力の放出制御に失敗した。

魔力制御が不安定になった魔法陣は魔力の供給量を超え魔法が暴走した。

魔法の暴走で黒野は竜巻に巻き込まれたかのように勢い良く回転し森を見渡せる上空まで吹き飛んだ。

「やばい、飛行には成功したがこれでは着地できずに死ぬ」

黒野は冷静に空中で魔法陣を構築する、一度魔法制御に失敗したがまだ魔力に余裕はあった。

まだ黒野は上昇し続けている、真上に飛んでいる訳ではないようだった、既に魔法陣の火は消え、テントと馬が何処にいるか分からなくなっていた。

着地地点の設定はあきらめ、何とか無事に着地する事だけに集中する、風属性魔法陣を描き始める。

大きな魔法陣を構築に成功した瞬間、無重力状態のように体が停止しそこから落下を始める、体が高速に落下するのはとても恐怖だった、物理の数学の勉強は得意だったがこんな状況で冷静に着地でき

る計算式を考える事は出来なかった。

黒野は地面との距離がビルの10階の高さくらいの時、一気に魔法陣に魔力を注いだ、一時的に体が浮き落下速度が低下した、だが恐怖により魔法発動のタイミングが早かった、減速した落下速度はまたスピードを上げた、黒野は魔法陣をもう一度くみ上げようとしたが体が言う事を聞かなかった黒野は目の前に森が近付いた瞬間一つの声が聞こえたような気がした。

「空間固定」

黒野はその言葉を誰が放ったのかは分からないまま空中で気を失った。

第二章 12話（後書き）

黒野君の修業の旅が始まります。

黒野君と作者の応援よろしくお願いします。

第二章 13話（前書き）

今日も何とか投稿出来た。

出来れば明日も投稿したいですがどうなるか・・・。

やはり、毎日投稿と言っておきながら突然の連載停止は読者様に申し訳ない事をしてしまいました。

読まなくなった人少なからずいます。

ですが全部自分の責任の為、これからそんなことのないように何とか不定期ですが完結目指して頑張りたいと思います。

未だに読んでくださっている読者の皆さま、これからもよろしくお願いいたします。

第二章 13話

目が覚めると知らないテントで横になっていた。

起き上がると体の痛みは全く感じられない、俺は夜魔法の暴走でビルの100階程度まで吹き飛んだはず・・・。

上手く受け止められたとしても俺も受け止めた側も骨が無事ではないだろう。

あんな高い処でから落下して無事に助かるはずはない、俺は飛行石なんて持ってないし、この世界には天空の城なんてないのだ。

「此処はあの世か？」

「こんなテントが天国だったら一瞬で魂が溢れてしまうよ、まあ君が天使さんならあの世って言葉は間違っではないかもしれないね」

俺が変な事を呟いた時、返答が返ってきた。

テントの入り口からその男の声は聞こえた。

「天使さん、体の具合は大丈夫かい？」

「ああ、ありがとう怪我ひとつ無く無事だよ、君が俺を助けてくれたのかな」

「そうだね、結構驚いたよ、ちょうど寝ようと思っていたら大きな魔力の反応があって、確認しにテントから出たら人が空から降ってくるんだからね」

「そうか、最後に何とか魔法を放ってなかったら俺は木に串刺しになっていたのかもしれないのか・・・」

俺はその事を想像し体が震えた、旅に出て10日で修業中の魔法暴発で死ぬなんてマヌケすぎるし最悪だ。

これからはもっと安全性に気を付けなければいけないといけない。

俺はテントの外に出て男にもう一度お礼を言い、一番気になっていた事をその男に聞く。

「助けていただき本当にありがとうございます、ところで俺は相当な勢いで落下したと思うのですがどうやって無傷で助けていただいたのでしょうか？」

「うん？それは魔法に決まっているじゃないか、こんな体で君を受け止めたら腕が取れてしまうよ」

その男は笑いながら自分の手を振る、男は170cmくらいで体はやせ気味だった。

男の服装はただの村人同然だった、魔法使いが好んで着るローブも、戦士の鎧も一切ない、ただの布を巻いたような少し汚れた服装だった。

ただ、一つ村人とは違うのはその手には杖と思われる木の棒が握られていた。

俺はその男の事を少し観察していたが、自己紹介をすることを忘れていた事に気が付き慌てて自分の事を話す。

「すみません、まだ自分の事を話していませんでしたね、俺は黒野迅って言います、今はちょっと旅に出ていて、魔法を勉強するためウエザンドに向かっていた途中だったんですが、道に迷って・・・更に特訓中の魔法の暴発で此処まで飛んできてしまいました」

「いろいろ大変だったんだね、天使君」

「・・・あの俺は天使じゃなくて黒野ですよ？」

「いやあでも君は空から飛んできたしね、天使君と呼ばせてもらおうよ」

「はあそうですか・・・」

「うん、それと天使君もやはり魔法使いだったんだね、なら名前はあまり明かさない方がいいよ、名前による呪いに近い魔法も存在す

るからね、名乗るなら偽名や、愛称だけにしないとね」

その男は朝食の準備を始めながら言葉を続ける。

「まあ君はまだ魔法使いに成りたてみたいだね、なら私も自己紹介させてもらおうかな、私の名前はロイエンディフィール・エン・ロイエツソだよ、ロイドとでも呼んでくれ」

俺は時間が止まった様にそこに立ちつくした。

ロイド・・・、それは俺が日本に居たころ一番好きだった主人公。

ロイエンディフィール・エン・ロイエツソは第二章の主人公だった。小さな村で育った彼は農民として毎日を過ごしていた。

皆にロイドと呼ばれていた彼は、毎日両親の手伝いをしながら村の子供たちと一緒に遊んだりしていた。

その生活が変わるのはロイドが17歳の時だった。

ロイドはちょうど村人の恋人と結婚をして農民としてのんびりと生活を始めようとしていた頃、一人の魔法使いが現れたのだ。

この世界の魔法使いはあまり良い身分ではなかった。

なぜ身分が低いのかは世界の遙か昔、この世界に魔法というものが定義されていなかった時代に遡る。

魔法は、誰にでも使えるものではなく、本の文字を読める事が必要で、人間の持つ魔力は人により異なるのだ、魔法を覚えても中には火の粉を出す事も不可能な人間も少なくない。

そのため、魔法を扱えるものは、文字が読めて勉学もでき魔力の持っ者に限られた。

魔法使いが確立された当初は魔法使いは学者として尊敬の対象だっ

た。

魔法使いは様々な魔法を使い町を切り開き、繁栄させて人々の生活を豊かにした。

だがその時代はずっとは続かなかった、魔法使いを目指したが魔力の少ない者達や、勉学の出来ない者達が魔法使い対して僻みや妬みが生まれたのだ。

その感情は少しずつ渦を巻きながら大きくなり、ついに魔法使いに攻撃を始めた。

攻撃したその中には魔法を使えなかった貴族や、富裕層までに及び被害は拡大した。

魔法使いが世界に広まり10年以上が立った時、ついに魔女狩りという言葉が一つの国で生まれた。

その国は魔法使いが少ない国だった、魔法の繁栄が無いその国は魔法使いは嫉妬の対象でしか無かったのだ。

その国は一斉に魔法使いを捉え、呪われたものとして死罪を言い渡しその日うちに民衆の前で断頭されたのだった。

その反響は大きく様々な国で魔法使いを名乗るものが弾圧されていた。

だが、魔法使いも黙ってはいなかった、魔法は大きな力を持っていた、大人が数人一気に襲いかかっても抵抗できる力すらある。

そして、新しい事件が起きた、魔法使いが捉えようとした者達を大量に殺害したのだ。

その時、既に魔法使いと魔法を使えない者の間に恐怖や憤怒で大きな溝が生まれたのだ。

魔法使いたちは結託し、弾圧を避けるように寄り添い一つの国が生まれた。

それが魔法使いの集まる唯一の国ウェザンドだった。

戦争は行われなかった、魔法使いは学者が多かったのだ、争いを好むものは少なく武器を持つ前に盾を持ったのだ。

魔法使いの国は魔法で直ぐに大きな繁栄をして、大きな防壁を築き

あげた要塞の形をした大きな国になり、それにより他国の弾圧を阻止し、侵入不可能にさせた防壁は戦争を防いだのだ。

その国は他国との交流を極力遮断し、魔法を覚えたいものや、魔法を使える様になったものを迎え入れた。

そして、長い年月は、魔法使いとそうでない者の溝を少しずつだが埋めていった。

そうして魔法使いは国から出る事も出来るような世界になったのだった。

こうして魔法使いの身分はあまり高くはないが、他国に移り住む事も出来るようになった時、その村に訪れた魔法使いがロイドの人生を大きく変えたのだった。

第二章 13話（後書き）

今回は異世界の魔法事情を説明させていただきました。

黒野君も実はあまり良い目で見られていないのです。

ですが忠則君のおかげであまり気にすることなく居られるのですね。そういう話も本編に入れたかったのですが、タイミングが合わずここで紹介させていただきます。

黒野君が強くなるのはもう少し先になるのかな・・・。

更新停止の謝罪

いきなりですが、今回この「イン・ザ・ファンタジーノベル」を投稿停止させる事にしました。

理由は今まで毎日投稿を欠かさず投稿なって居たのに途中で勝手に更新停止をしてしまった事や、自分がこの小説に対して納得がいっていない事が理由です。

感想で書かれて通り、私の小説は自分の頭の中の妄想をただ文章に書くだけの単純なものです。

でも私は単純な物でも良いと思い、ただひたすら毎日投稿をしていました。

ですが、投稿しているうちに少しずつ荒が見えてきました、私は執筆中に自分の中で急遽設定を変えたり、加えたりと何も考えない思いつきでの執筆をしていたのです。

さらに初投稿当初、私は設定を組み立てる途中、早く小説が書きたい、この話を読んで欲しいという理由で完全に設定が固まってなく、プロットもなにも立てないで執筆を開始していたのです。

第一章を書いていた時はそれでもいいと思っていました。

ですが少しずつ読者の故田形が増えていき、嬉しい半面、自分の適当な設定に少しずつ悩んでしました。

途中で付け足しの設定や、曖昧さをなくすための理由を後付けしたりしようとはしましたがあまりうまくいか無かったのです。

そして、第二章が始まった時には自分で納得のいく文章やストーリーが書けず、荒の多い部分を如何に修正し隠していけるのかを考えてしまっていたのです。

そう考えている間は執筆が楽しくなく、ただ毎日投稿を読者様の為に続けようという思いで書き続けていました。

ですがそんな事も長く続かず結局更新は止まり、最悪な結果になってしまったのです。

数日が経って、色々考え直した結果また少しずつ投稿していこうと思うようになり、長い期間を置いてまた執筆を開始しました。

ですが、やはり気持ちは何処か別の場所にありました。

感想での私の甘さを正確に指摘したくださった読者様や、大量の誤字をそのままにしていた事を指摘してくださった読者様。

そういう方の指摘を自分は蔑ろにしているんじゃないかと思ったのです。

そうするとまた執筆は止まってしまいました。

このままではこの物語は完結しても、ボロボロな物語を布で覆ったチグハグだらけの恥ずかしい物語になってしまうんじゃないかと思ったのです。

そうするともう完全にこの「イン・ザ・ファンタジーノベル」を書き続けることが出来なくなりました。

ですがこの物語を完結させたい思いは大きいのです。

ここで断念してしまったら、もう私は他の物語を書く自信は無くなってしまうです。

そのため、今回このような形でこの物語を投稿停止していただくと同時に、今まで書いていたこの「イン・ザ・ファンタジーノベル」を自分で最初から見直し、大編集を行うことにしました。

ただいま自分が適当に作り上げてキャラが薄くなってしまった人物や、曖昧な設定を見直し、少しずつ自分が考えていた本当の物語を細部にわたり設定しなおし、序章から書きなおしや修正を繰り返しております。

今まで私の小説を楽しみにしてくださった読者の方には本当に申し訳ない気持ちでいっぱいですが、読者様に本当に楽しいんでもらいたい為に今回、勝手ながら更新を停止し、新しく修正を重ねる事を決定いたしました。

必ず今まで以上の作品に仕上げる事をここで誓うと同時に、出来るだけ早く皆様読者様に読んでいただきたいと思っております。

長い言い訳にしか過ぎないと思う読者もいるかもしれませんが、作者自身もその通りだと思えます。

ですが、もし私の小説の続きが読みたいという気持ちが少しでも残っていましたら、少しの間お待ちください。

この「イン・ザ・ファンタジーノベル」を改め、「in the fantasy novel」をどうぞよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2827q/>

イン・ザ・ファンタジーノベル

2011年3月19日16時38分発行